# 幕末維新期におけるフランス学者の研究
（第一稿）

田　中　貞　夫

はしがき

第一部　村上英俊
第1章　その生涯
1.　生い立ち
2.　佐久間象山との出会い
3.　フランス学の始祖
第2章　『三語便覧』の成立過程
1.　象山の字書出版計画
2.　『三語便覧』の構想
3.　『三語便覧』の構成
4.　オランダ辞書との関連
第3章　『五方通語』の成立とその内容
1.　『雑字類編』の影響
2.　オランダ辞書との関連
第4章　『佛蘭西答屈智幾』の原典
1.　『佛蘭西答屈智幾』の内容
2.　“Traité de Tactique”の構成
3.　両者の比較
4.　村上英俊の解釈力
5.　結　語
第5章　松代藩との関係
1.　仏語書購入の経路
2.　洋書関係の資料
第6章　仏学塾「達理堂」について
1.　開塾の時期
2.　洋学塾の状況
3.　英俊の仏学の開創的意義

第二部　入江文郎
第1章　入江文郎の生涯
1.　生い立ち
2.　フランス留学
第2章　フランス留学生の名簿
1.　官費之分
2.　県費之分
3.　自費之分
第3章　入江文郎の仏文
1.　学校宛の書簡
2.　日本紹介の文章
3.　東洋学者会議での講演

第三部　山本松次郎
第1章　山本松次郎の生涯
　1.　生い立ち
　2.　フランス語の学習歴
第2章　辞書の解説
　1.　「佛語荘嶽・其之一」
　2.　「佛語荘嶽・其之二」
　3.　「和佛譯嚢」
　4.　「佛和譯嚢」
第3章　仏文の解説
第4章　その他の著作

あとがき

## はしがき

明治以後の我国の目覚ましい変化の原因を明らかにするためには，幕末維新期の洋学者の存在を無視するわけにはいかない。すくなくとも，彼等の驚くべき熱意と努力による準備があったればこそ，西欧文化を受容することが出来たのであり，我国の急速な近代化が可能であった，と言えよう。

そこで，本稿では，それら洋学者の1グループとも言うべきフランス学者に焦点をあて，彼等が明治日本の近代化が進行していく過程で，如何に時流に対応し，さらにフランス学者としての役割を果たしていったのかを，ここに述べてみたい。

さて，おおくのフランス学者と呼ばれる者の中から，以下の3名に限定して報告したのは，彼等が，それぞれの活躍した場所において，その代表者と呼ぶに相応しい人物であり，さらには，彼等の仏学に関しての業績，および，その貢献度から推して，異存はないものと考えたからである。

まず第一に，我国の仏学の先覚者である村上英俊，第二に，江戸（東京）を中心として活躍をし，さらにはフランスに渡航した人物として入江文郎，最後に，地方にあってこつこつと仏学を研究し，ひいては独自の分野を開拓した人物——山本松次郎——の3名を取上げることにした。

なお，本稿の一部には，すでに大学の論集，および雑誌などに発表したものも含まれているが，これは，その後未発表の新資料をかなり入手することが出来たので，前稿に訂正加筆を施し，ここに掲載したものであることを，あらかじめ付記しておく。

# 第1部　村　上　英　俊

# 第1章　その生涯

## 1.　生い立ち

（村上英俊）

村上英俊[1]は文化8年（1811）の4月8日，父・松園（諱を木仙），母・ちか（尾島氏）の長子として，下野国那須郡佐久山（栃木県大田原市佐久山）に生まれ，幼名を貞介と名づけられた。松園，29才の時の子である。松園は経済的にも恵まれた，旅籠（屋号，佐野屋）の主人であったが，同時に漢方医を業とする者でもあった。

なお，佐野屋をいわゆる本陣とする説もみられるが[2]，最近，入手した資料[3]によれば，その説を一概に妥当であるとは断じ得ない。しかしながら，英俊の生家が，本陣（井上家），問屋（渡辺家）に次ぐ格式を誇る宿屋であったことは事実であろう。年紀によっては脇本陣を務めていたとも，推測に難くない。

さて，奥州街道の佐久山宿は，旗本・福原家（3,500石）[4]の知行地で，宿内惣家数121軒，人別473人（男230人，女243人）である。その内，旅籠屋の数は27軒となっている[5]。

土地の医者[6]について医術を修めた松園は，地方の一知識人で終わることを潔しとはせず，新しい時代の知識欲に燃え，旺盛な探究心を持っていた。英俊に江戸で新しい学問を修めさせたいという彼の気持は，ひとえに，そのような松園の知識人としての，姿勢の表われであったと言えよう。

松園はついに文政7年(1824)，何不自由のない故郷・佐久山での生活を捨てて，江戸に移り，新生活に入るようになった。英俊，14才の時のことである。家業は近郊の小川村梅曽に住む縁者[7]に譲られることになったが，人口流動の比較的激しい佐久山では，買養子という制度によって家業を他人に譲渡することが，さほど珍らしいことではなかった[8]。

松園は京橋柳町で町医者として，細々と暮らすことになったが，英俊への教育に対する情熱はいささかも衰えず，佐久山時代の伝手を頼って，英俊の教育環境を整えることに努めた。

「即ち漢学は古学に名ある唐津藩の儒官・東馬大野鏡湖，医は篠山藩の侍医・無涯足立長雋を夫大師とする事が出来た[9]」。

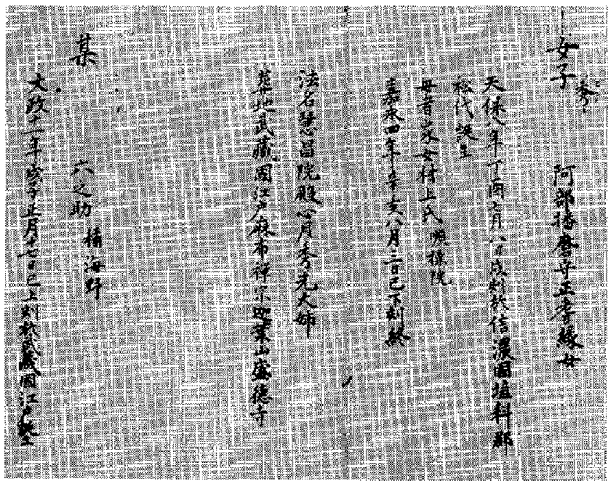
さらに，文政10年(1827)，18才の時，英俊は津山藩の侍医・宇田川榕庵について蘭学を学ぶようになったが，彼の師匠がそれぞれ当時の名のある学者であったことからも，父・松園の意気込みと，子息・英俊への期待の大きさが容易に推測されよう。

なお，松園には英俊を頭に，三男三女の子宝に恵まれたが，不幸にも一男二女が夭折し，残ったのは英俊，於順，覚次郎[10]の3名であった。従来，英俊の妹の名前は「チエ」とされてきたが，私の調査によれば，それは幼名であり，正しくは上述のように，「於順」であることが明らかとなった（「真田家御系譜」，真田幸治氏所蔵）。於順は後に，天保3年（1832）あるいは同4年(1833)の頃，信州松代藩主・真田信濃守幸貫の嫡子，豊後守幸良[11]の側室となった人である[12]。

天保4年，松園を失った[13]村上英俊は，その後も江戸にとどまっていたが，同12年(1841)，母

と弟を伴って江戸を離れ，松代に移ることになった。当然，妹・於順の手引きに因るものと考えられるが[14]，これが総ての理由ではなく，佐久間象山の存在が，彼の松代移住への動機に無縁ではなかったとする見解もみられる。

すなわち，「松代には英俊と年を同じうした時代の先覚佐久間象山がいた。象山は幸良の父幸貫侯に早く認められその信任も厚かった。松代に行けば象山との提携も出来る[15]」とか，「・・・・・象山の蘭学が，英俊の脳裏に往来しなかったとも限るまい[16]」という見解がそれであるが，いささか疑問である。彼等の出会いは，英俊が松代の住人となった後とするのが，やはり，妥当のように思われる。



（「真田家系譜」、真田幸治氏所蔵。）

天保12年以前の象山は，まだ時代の先覚者と呼ぶには相応しくないし，その時期には，彼が蘭学を学んでいないことからも，そうした見解は，決して正しくはないからである。

## 2. 佐久間象山との出会い

松代で町医を業としていた英俊を[17]，帰藩中の同藩々士・佐久間象山が訪れたのは，弘化3年（1846）あるいは弘化4年（1847）のことで，その用向きは，新兵器を運用するために必要な，より強力な新火薬の製造法を記した化学書を，蘭書の中より選ぶための相談であった。

19世紀の初頭より，徐々にみられた現象だが，中頃には対外関係を反映して，蘭学は医学以外に，軍事に関連した分野，たとえば，火薬学，砲術学，兵学，航海学，地理学，銃学，築城学，器械学，舎密学（化学）などの諸科学を研究するうえに，不可欠な学問として認識されるようになっていた。

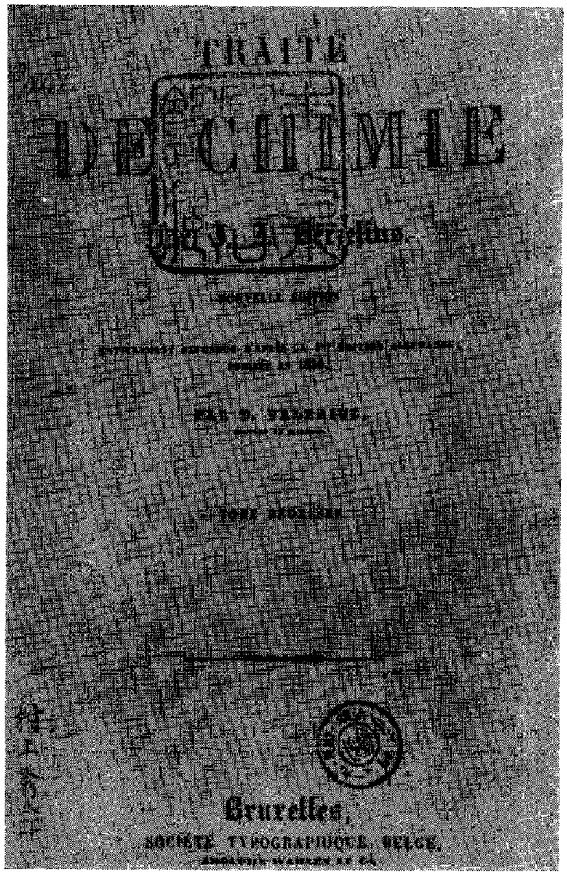
象山もまた，外国を知るには，その国の言語を熟知するのが先決だとし，蘭学を弘化元年の6月21日より，黒川良庵[18]について学んでいる。最初は，蘭学と漢学の交換教授という方法をとったが，後に藩主・幸貫侯の知るところとなり，別に漢学の師を良庵にあたえ，象山の負担を軽くする配慮を行ない，蘭学に専心させている。当時，聡明な藩主として聞こえた幸貫侯が，象山の才能を高く評価した結果とはいえ，やはり，時代の影響を見逃すわけにはいかない。

オランダ語の学習が進むにつれて，その重要性を再認識した象山は，弘化2年（1845）正月，書簡[19]をもって，藩老・恩田頼母[20]に，天下に率先して洋籍，とくに兵書および火術書を購入して，非常時に応ずる策を建てるべきだと説き，さらに，それに投ずる費用は，決して惜しんではならないと力説している。

一方，象山より相談をうけた英俊は，即座に，ベルゼリウス (J. J. Berzelius) [21]の化学書を推薦した。

「即ち彼は象山と謀って長崎在住の蘭人の手を経てこれを海外に購入するの手続を取った。待つ事一年有半にして同書は無事百五十両の大金を投じ，千秋の思ひせる英俊の手に帰する事になった[22]」

しかしながら，待望のベルゼリウスの化学書はフランス語で書かれてあり[23]，彼等の当面の役



("Traité de Chimie", 国会図書館所蔵)

には，いささかも立たなかったのである。

英俊は，かって江戸在住のおりに，愛読した蘭書（化学書）の中で，しばしば，「べ氏いわく」という文字に邂逅し，ベルゼリウスには，かねがね尊敬の念を抱き続けてきた。それであれば，彼の失望はきわめて大きかったと言える。だが，このような状態の英俊に，一筋の光明を与えたのが，佐久間象山のフランス語学習への勤めであった。これが後に，日本における最初の，フランス語の正則的学習者の名誉を，村上英俊に与える機縁となったのである。

英俊は，嘉永元年（1848）の5月からフランス語の学習を，フランス文法書[24]を頼りに始めている。さらに，本格的に，蘭仏辞書[25]によって蘭学事始にも似た，労苦と孤独との研鑽の道を経て，ようやくフランス語に通じたのは，嘉永2年（1849）あるいは同3年（1850）のことである。

人生わずかに50年という時代に，既に38才にもなっていた英俊が，たとえ，オランダ語の知識はあったとはいえ，未知の外国語に取組む決意をしたのは，よくよくの事であると言える。

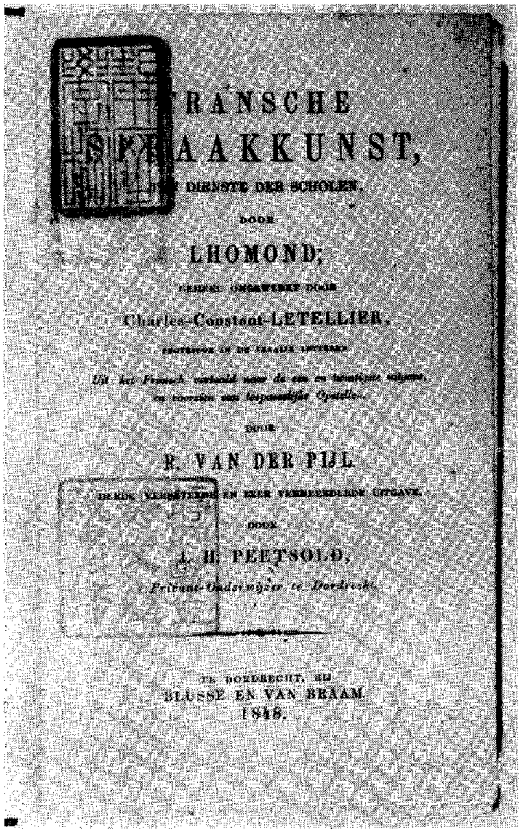
「一年四カ月といえば，冬を二度越すことになる。信州の冬の寒気はまことにきびしい。夜ふけておそく，未知の世界ととっくんで，しんしんと背中から膝に迫ってくる寒気にふるえつつ，勉強にいそしむ中年の勉学者の姿を想像するとき，われわれは，思わず襟を正さずにはいられない[26]」

英俊が好学心の強かったことは，確かなことであるが，それにしても，何故にこれ程までの苦労をしてまで，彼はフランス語の学習に踏切ったのであろうか。直接的な動機として，象山の勤めがあったことは事実であるが，ただ，それだけの理由と断定して仕舞うには，あまりに，その根拠が単純かつ直線的であると考えられる。そこには，英俊自身が，幾多の困難を冒してまで，フランス語学習に踏切った積極的な理由——すくなくとも，内的必然性が包含されていた筈である，と考えたい。

すなわち，18才の時に宇田川榕庵について蘭学を始めてより，十数年にわたって研鑽した蘭学の知識を頼りに，以前から興味を抱いていた化学について，さらに探求するために，フランス語を始めたのではないか，と推定されるのである。

何故なら，フランスは学問が進歩し，化学の分野においても例外ではないことを，英俊は象山から聞かされておったので，彼がフランス語で書かれた化学書から，最新の知識を吸収しようとする願望を抱いたとしても，なんら不思議ではないと考えられるからである。化学書を読解するための手段として，フランス語の研究は，是非とも必要な要因だったのであり，そこには，彼が象山の勤めに応ずる必然性が，すでに存在しておったと言えよう。

英俊に，強い刺激を与えた1冊の本が，かりに化学書ではなくして，文学，哲学，歴史などの書物であったとしたら，はたして，英俊は仏学への道を歩んだであろうか。




(Lhomondのフランス文法書，
静岡県立中央図書館所蔵)

に恵れたときで，妻との間には一子・栄太郎が誕生している。

従来の研究によれば，英俊の妻の名前を，「カネ（兼）」としているが，私の調査によれば，これ以外に「きん」という名もあることが判明した。

長野市松代町在住の田中誠三郎氏宅に，「壬申戸籍」が所蔵されており，そこには，村上英俊と並んで彼の妻・「きん」の名が明記されている。[28]

学問的な刺激の強い江戸での生活は，家庭生活の暖かさと相俟って，英俊のフランス語研究を一段と進歩させる結果となり，ここに，『三語便覧』成立の基礎が形成される。

村上英俊の著作活動は，『三語便覧』を上梓した後も目覚ましいものであった。『佛英訓弁』(1855)，『五方通語』(1856)，『英語箋』(1857)，『英語箋後篇』(1863)，『佛語明要』(1864)，『佛蘭西答屈智幾』(1867) 等の書籍をやつぎばやに公刊した。明治に入ってもその活動は衰えず，『西洋史記』(1870)，『明要附録』(1870)，および『三国会話』(1872) を版行している。安政6年 (1859) に弟・覚次郎を養子にして

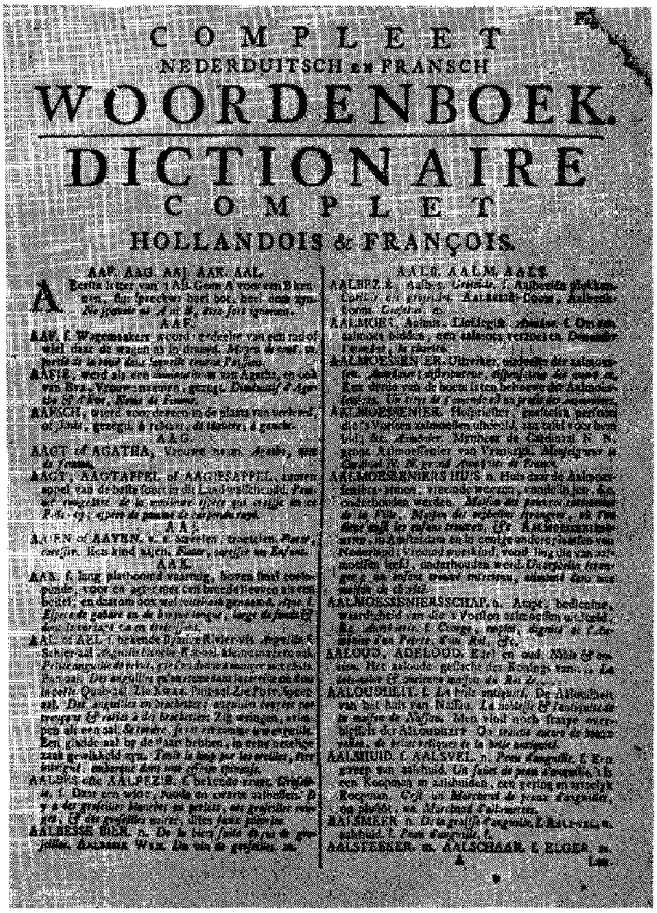
この時点では，あくまでも「化学者」としての英俊が先行するのであり，いわゆる「フランス学者」としての出発の時期は，彼が再び江戸に出て『三語便覧』をはじめ，数々の著作を上木した頃とするのが妥当であろう。

## 3　フランス学の始祖

村上英俊は嘉永4年(1851)，まだ寒さの厳しい1月に松代を離れて[27]，江戸深川小松町の松代藩邸内に住むことになった。フランス語を江戸でさらに研鑽したいとする，英俊の希望を藩主が快諾した結果のことである。

偶然，佐久間象山もまた，同年4月に江戸に入り，5月には木挽町に居を構えている。

この時代は，英俊の生涯のうちでも，最も家庭的




(Marin『蘭仏辞書』の本文内容，早稲田大学図書館所蔵)

家督を譲った英俊は，それを機会に同6年3月27日から慶応3年（1867）まで，当時の最高学府であった開成所（蕃所調所が洋書調所と改称された後，さらに改称されたもの）において，教授手伝い，さらに翻訳方として勤務し，後進の指導に当り，我国のフランス学の発展に務めた。

明治元年(1868)，英俊は私塾「達理堂」を正式に開塾することになるが，「達理堂」は深川猿江町の松代藩下屋敷内で発足した。明治日本の知的選良たらんとする幾多の青年達が，東京は勿論のこと，北は盛岡，弘前から，南は四国，九州より参集して，この仏学塾の名前をより一層著名なものにしていった。「達理塾」に学んだ学生の数は，現在，判明しているものだけで429名のおおきに達している。[29]

これらの中には，幕末維新期に，知的選良として活躍した人々———中江兆民，榎本武揚，林正十郎，小林鼎助，井上修理，駒留良蔵，松平太郎，浜尾新，加太邦憲，磯部四郎，黒川清一郎，栗塚省吾，辻新次など———の名が見られて壮観である。

「ここでの講義は勿論佛蘭西語であった。そしてその講演には佛語で書かれた西洋史も読まれたらしい。又或る時は彼の得意とする化学（セイミ）の講釈を一週一度生徒全体に行なう事にした事もあった。これは生徒の希望によったのではなく英俊の自発に出たものである。然し高遠なセイミも塾生に取っては猫に小判の類で，生徒は寧ろこれを有りがた迷惑に思った。一度は好奇に駆られ，二度目は引ずられて出たが，三度目には，女中が生徒の召集に来る有様だった。がそれでも行く人は殆んどなかったという[30]」

しかし，法律や兵学などを研修する手段として，フランス語を学んでいた生徒達にとっては，化学の講義など興味あるものでは無かったに違いない。それでは，英俊のフランス語の授業に関してはどうかと言えば，「講読」や「作文」に関しては，彼の著書などから類推して，当時としては仏学始祖の名に恥じないものであったであろう，と推察できるのである。

しかしながら，その「発音」に関しては，残念ながらあまり良い評判は残されていない。

「・・・・・エゲプテ（埃及）とは何んだ，あれはオランダよみで，エヂプトと読むのが本当だそうだ。先生の佛学は佛蘭西には通じないという珍物だといった噂が門下生の間にもポツポツ起るようになっていた。然もこれは開塾当初の頃にさえも沙汰せられた事であった[31]」

この間の事情も，彼がまったくの独学でフランス語を学んで来たために，世人に発音が問題であると指摘されたものであろうが，これも先覚者の悲しい宿命であり，今となっては同情すべき余地も多分にあろう。

さて，開塾後の数年間は繁盛した「達理堂」も次第に荒びれ，ついに明治10年（1877）その幕を閉じたのであった。英俊，67才の時のことである。この事柄も，明治という時代がすくなからず「達理堂」の閉塾に影響を与えたものと言えよう。

ところで，我国が，明治初期において，近代的な国家として急速に成長する必要性から，きわめて貪欲に西欧先進諸国の文物制度を接取していったことは，すでに周知の事実である。そのような時代では，当然のことながら実用向の学問が尊重され，功利的思想が支配的なものとなっていたが，これはフランス語を研究する人々にとっても例外ではなかった。

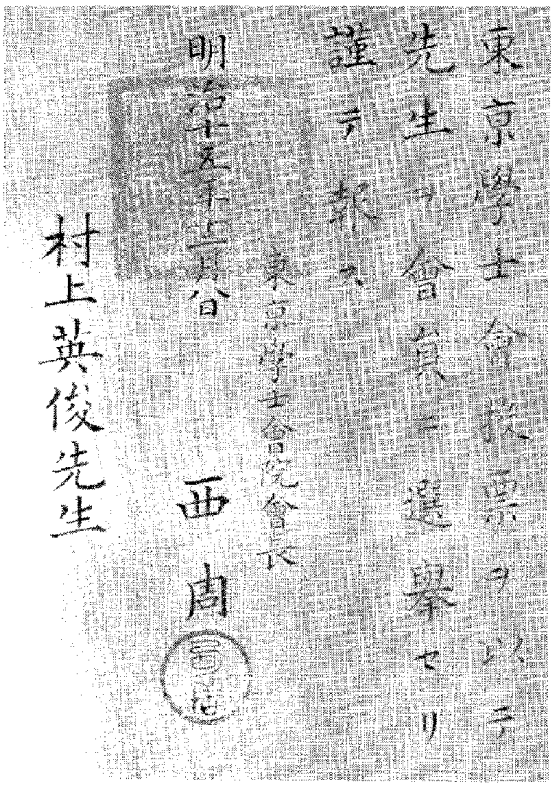
たとえ，村上英俊に数多くの仏語書を上木したという実績が有ったとしても，フランス人に対して通用しない「発音」であったならば，門下生が英俊に対していつまでも敬意を表し，師事するはずもなかったと言えよう。実際の役に立たないフランス語では，もはや利用価値が無いからである。それ故，実際に西欧の地を踏んで来たフランス学者が現れるや，人々は次第にその門を叩くようになったのであった。事実，フランス語を研鑽しようと希望する人々は，すでに英俊が志を立てた時とは違い，単に知識を得ることにのみ目的が置かれてはいず，現実に海外へ雄

飛したり，フランス人と交渉するという実際的な目的が大きく掲げられていたことを，看過するわけにはいかない。それ故にこそ，村上英俊の「達理堂」から次々と塾生が去っていったのであろう。これは明らかに，門下生達の背離の悲哀を英俊に嘗めさせた事柄であったが，ある意味では，先覚者の宿命であったと言えよう。

「達理堂」を閉塾した英俊は，経済的にもかなり逼迫することになったが，それにもまして彼の心を悩ましたのは，一子・栄太郎の不行跡であった。英俊はフランス語を教授し，その将来をも考えて，自分の著作に彼の名と並べて，栄太郎の名を載せたこともあったが[32]，栄太郎は父・英俊の恩に報いることなく，ある女性と出奔し，再び父の前に姿を表わすことはなかった[33]。

しかし，このような不遇の英俊にも，愛弟子達の援助の手が差し伸べられ，明治15年(1882)，東京学士会員に選出されることになった[34]。

その後，明治18年（1885）8月18日に，フランス大統領より英俊の偉勲を賞して，レジョンドヌール勲章が下賜された[35]。


東京學士會院會員ヲ以テ
先生ヲ會員ニ選擧セリ
謹テ報ス
東京學士會院會長
明治十五年十月
西周
村上英俊先生

(村上英俊が東京学士会員に選ばれた時の辞令，村上英夫氏所蔵)

ORDRE NATIONAL DE LA LÉGION D'HONNEUR.

HONNEUR PATRIE

Le Grand Chancelier de l'Ordre National de la Légion d'Honneur

Le Président de la République Française

Iko Mouraksmi

la Décoration de Chevalier de l'Ordre National de la Légion d'honneur

(村上英俊にレジョンドヌール勲章が下賜されたことを知らせる証書，村上英夫氏所蔵)

さらに，仏学会の名誉会員[36]にも任命された英俊は，一つの仕事を為し遂げた満足感を抱いて，その生涯を東京府下豊島郡金杉村で静かに閉じた。時に，明治23年（1890）1月10日，行年80才であった(墓所は青山墓地にある)。

〔注〕

(1) 諱は義茂，または義隆。字を棟梁といい，茂亭あるいは棠陰と号した。後に鶴翁，さらに松翁と称している。なお，棠菴閑人なる名称を使用しているが，最近，入手した資料によれば，「義禮」とも称していたことが判明した(田中寿氏所蔵)。

(2) 瀧田貞治，『佛学始祖・村上英俊』(巌松堂書店古典部)，上巻5丁裏。

(3) 佐久山本陣之図（井上潤三氏所蔵，文久3年以前のものと推定される）によれば，本陣の地坪は九百坪と明記されているので，敷地から考えても，佐野屋が本陣であったとは考えられない。なお，佐久山宿の配置図（遅沢俊郎氏所蔵，年代不明）においても，「加登屋（右五十二），御本陣，海老屋（右五十三），佐野屋（右五十四）」と並記されておるので，本陣と佐野屋は明らかに別のものである。

(4) 福原家々臣扶持役附控帳（福原家所蔵）によれば，家老・福原某を筆頭に，給人，地方，大目付，町奉行，山奉行，中老，納戸役等がおり，あたかも「佐久山藩」のような様相を呈している。

(5) 児玉幸多，『近世交通資料集』(吉川弘文館)，P. 273。

(6) 誰れに就いて医学を学んだかは不詳。

(7) 会津戦争の頃，佐野屋の当主が佐久山を離れて後，村上家と佐野屋との関係は絶たれた（子孫の生田目ムメ氏談)。

(8) 佐久山の郷土史研究家，吉田英夫氏談。

(9) (2)の上巻8丁裏。

(10) 兄の英俊は，松代藩郡奉行・山寺常山（源太夫）宛の書簡のなかで覚治郎とも書いている。

(11) 文化11年（1814）10月28日，江戸出生であるが，公儀への届出は，文化13年（1816）になっている。幼名は貞四郎。松平楽翁定信の末男とされ，幸貫の養子として届出されているが，実は幸貫が実家（江戸八丁堀の松平家）にあった時，家女（佐竹氏，俗名於喜勢，法名貞操院。）に生ませた子である。弘化元年（1844）卒去したため，松代藩の藩主にはなっていないが，幕府の「御役人衆，御同朋衆，出入御坊主名面」(真田幸治氏所蔵，天保12年作成）には，「御詰衆」として真田豊後守の名が見られるので，幕府での地位がどのようなものであったのか，これで明らかとなった。さらに，「系譜」には法名大雲院道隆一潤，葬地武蔵国江戸麻布今井禅宗盛徳寺，と記されている。

(12) 於順がどのような経路で幸良の側室になったのかは定かでないが，当時の松代藩の慣習から考えて，側用人の世話によって，真田家へ上ったものと推定されている（松代町の郷土史研究家，高橋雲峰氏談)。

なお，於順が幸良の実母である貞操院付きの女中となり，その後幸良の側室になったものとする説もある（真田家の事情に詳しい永井久子氏談)。

当時，幸良は八丁堀の松平家に寓居していたが，村上家がその屋敷とわりに近距離の場所（京橋柳町）にあったことを考慮に入れるならば，あながち，これ等の説を推測だけとは断じ得まい。

弘化元年（1844)，剃髪して「心戒」と改名し，安政2年（1855）9月25日から「順操院」と名のった。なお，於順には一男二女があり，長女は「於貞」(天保5年6月16日，松代出生，松平和之進源定猷の縁女となる)。長男は9代目藩主・「幸教」(幼名，雄若。天保6年12月13日，松代出生）であり，次女は「於秀」(天保8年7月8日，松代出生，阿倍播磨守の縁女となる)。

さらに，於順に関しては，「真田家過去帳」によれば，「村上松園木仙女・順操院，明治十四年一月六日，赤坂一ツ木町村上覚次郎方ニテ卒。法名，順操院殿瓊随智山大姉。葬地，赤坂永川町迦葉山盛徳寺」と

あり，最後まで真田家との関係が深かったことがわかる。

(13) 天保4年（1833）8月8日死去（戒名，松林院諦宗了義居士）。

(14) 於順（順操院）が，いつ頃から松代に住居したのか，従来の研究では触れられていないが，長女の「於貞」が天保5年6月に松代において誕生しているところから(「真田家御系譜」)，やはり，天保4年か，あるいは5年の初めとするのが正しいであろう。

(15) (2)の上巻11丁表（・・・は筆者が付したもの)。

(16) 同上，11丁裏（・・・は筆者が付したもの)。

(17) 「松代藩監察日記」によれば，英俊が藩医となったのは嘉永3年（1850）のことである。

「其方儀心掛事者厳様御座候付家名永ゝ相続有ゝ之様思召ヒ二召出一御切米金四両二人扶二人半御ふち二下置一御医師ヒ二仰付一ゝ之」

なお，同日記によれば，表御番医となったのは安政2年（1855）のことである。

(18) 宇田川玄随の養子，宇田川玄真の弟子である。加賀に生まれ，名は弼，号を静淵といった。13才の時（文政11年，1828）には父親と共に長崎に遊学し，吉雄権之助，さらに，シーボルトに師事した。後に江戸に出て坪井信道の塾に入門する。加州藩に仕えたが，蕃書調所の教授手伝いも兼務した。

(19) 信濃教育会編，『象山全集』（尚文館），下巻のP. 164～P. 167。

(20) 頼母は通称で，貫實という。真田幸貫，幸教の二代に仕えて，1,200石という大禄の家老職。

(21) 1779年，スエーデンに生まれる。化学を専攻し，1804年には，ストックホルム医学校の教授となり，1818年，貴族に列せられ，1832年にフランス学士院の客員会員となる。新元素の発見，原子量の決定など，現代化学の基礎をきずいた。

ベルゼリウスの伝記に関しては，原光雄『化学を築いた人々』（中央公論社），P. 129～P. 154に詳しい。

(22) (2)の上巻14丁裏。

購入の経路に関しては以下のような異説もみられる。

「・・・藩人村上英俊〻奉二公命一從二事蘭学一日久矣。是歳始也二于化學〻就二先生〻欲ゝ借二三本幸民所ゝ藏司隣(イヤ)蹟(モラヌ)律私化學書。先生曰〻此不三必勞二他人。余近日乞二吾公〻購二得佛文化學書數種。吾子盍ゝ讀ゝ之。邦人未ゝ通一佛文。吾子自ゝ今從二事于此。亦爲二本邦佛學之鼻祖一矣。英俊欣然從ゝ之。後遂成二一家。其業一勵後進〻啓知ゝ斯道。」（上段余白の註記，英俊の借らんとしたるベルゼリウス化学書は薩藩の購入せるものなり。英俊の読みたるは松代にて購入せる佛文の同書なり。)，真田幸世『象山佐久間先生』（象山神社奉賛会），50丁裏～51丁表。

なお，ベルゼリウスの化学書が英俊のフランス語学習の原点となったことを否定する見解もみられるが（有馬成甫「村上英俊の佛蘭西語修得の動機に就て」，研究報告第12号，蘭学資料研究会)，英俊自身がその著書（『佛語明要』）の中で明記しているので，従来の説を認めざるを得まい。

(23) 原書はフランス語で書かれたものであり，題名は“Traité de Chimie”（化学提要)。この書は数カ国語に翻訳され，オランダ語訳も我国に現存するが，最近の研究によれば，国会図書館，静岡県立中央図書館葵文庫などの他に，山口県三田尻の華浦医学校蔵書目録にも見在するという（阿知波五郎「山口県三田尻，華浦医学校蔵書目録追補――とくに書誌学から見た蘭学よりドイツ医学への推移――」，研究報告第251号，蘭学資料研究会)。

(24) Lhomond, Fransche spraakkunst. 1825.

なお，調査にあたっては静岡県立中央図書館所蔵本（1848年版）を使用した。

(25) Marin, P.

Groot Nederduitsch en Fransch woordenboek. 1728.

この蘭仏辞書は松代文庫には現存していないので，静岡県立中央図書館所蔵本（1752年版）を使用した。

(26) 高橋邦太郎「法朗西語事始」③，(雑誌・「フランス」，第29巻7月号，白水社)。

(27) 「定府ヒ仰付之　医師村上英俊」，(松代藩監察日記，嘉永4年正月十一日)。

(28) 信濃国埴科郡松代田町四十九番屋敷居住

士　族

実父元松代県士族村上松園亡次男　　村上覚次郎　　壬申年　四十四

養父（実兄）隠居　　村上英俊　　年　六十二

明治元辰年三月十五日ヨリ私塾ヲ開

東京本所猿江八番屋敷寄留

養母　　きん　　年　四十八

柏崎県士族鈴木春吾姉

なお，「きん」については，明治5年8月21日没す（松操院常岩妙青大姉），と添え書きされている。この没年月日を英俊の年譜に照らし合わせてみると，英俊の妻のそれにぴたりと一致する。この事実から考えても，「きん」という女性が彼の妻であったことは間違いないようである。

そうすると，「カネ」は本名ではなく俗称であったのか，あるいは「きん」が「カネ」の改名したものなのか，その間の事情は明らかではない。ただ，英俊が再婚しなかった事実を考慮にいれるならば，「きん」と「カネ」が同一の人物であることは間違いなさそうである。

(29) 藤田東一郎「村上英俊の異った三語便覧と佛英独三語便覧に就て」，(「書物展望」，第11巻3号)。

(30) (2)の上巻23丁裏～24丁表。

(31) 同上，26丁表～裏。

(32) 『三語便覧』（仏英独）には，村上松翁撰，村上義徳（栄太郎）校となっている。

なお，英俊がいつ頃から松翁と称したかは不明であったが，筆者の調査によれば，その年を明治6年(1873)のことと推定される。何故なら，明治5年の壬申戸籍では「英俊」と記されていたのが，翌6年の「家塾開業願」では「松翁」と明記されているからである。

(33) 村上家の過去帳には，6月26日が命日となっている。泰修院法栄信士位。

(34) 「東京学士会投票ヲ以テ先生ヲ会員ニ選挙セリ謹テ報ス

東京学士会院会長

明治十五年十二月八日　　西　周　㊞

村上英俊先生　　」

（村上英夫氏所蔵）

(35) ORDRE NATIONAL DE LA LEGION D'HONNEUR.

HONNEUR　　PATRIE

Le Grand Chancelier de l'Ordre National de la Légion d'Honneur certifie que, par Décret du dix-huit août, mil huit cent quatre-vingt cinq, Le président de la république Française a conféré à Mr. Sho Wo Mourakami, Médecin Japonais, auteur d'un dictionnaire franco-Japanais et fondateur de l'Ecole de français au Japon la Décoration de chevalier de l'Ordre National de la Légion d'honneur. Fait à Paris, le 26 août 1885 (Signature illisible)

(36) 明治21年（1888）の11月に会員名簿が刊行されたが，その「佛学会員姓名一覧」の名誉会員の部に，「東京学士会員　村上英俊 (Murakami Eishun, Membre de l'institude de Tôkyô.) 北豊島金杉村三百五十六番地」と記されている。

# 第2章　『三語便覧』の成立過程

三語便覧初巻

日本

村上松翁撰

村上義德校

天文

佛蘭西語　英吉利語　獨逸語

天地既成 Ciel, Heaven, Himel

物 matiere, Matter, Materie

自然 naturel, nature, natur

公書界 universel, universal, allgemein

三語便覧　初巻　一　成長蔵板

（村上英俊『三語便覧』の本文内容，松代文庫所蔵）

茂亭・村上義茂著『三語便覧』が刊行されたのは，安政元年(1854)[1]のことである。従来，この書をもって，邦人編述による，我国最初の仏語書とされてきかが，最近の研究によれば，それに先立つこと約40年前[2]に，長崎出島のオランダ商館長・ヘンドリク・ドウフ (Hendrik Doeff) 以下，数名の長崎のオランダ通詞[3]たちが作製し，浄書の上，長崎奉行に提出したという，「払郎察辞範」および「和佛蘭対訳語林」[4]の方が古く，この両者を我国における仏語書の嚆矢としている。[5]

『三語便覧』は周知の如く，純粋な仏語字書というより，むしろ，仏・英・蘭あるいは，後になって出版された仏・英・独のたんなる対照字典であるが，公刊されたことで，我国におけるフランス学の研究を促したことは，容易に察することの出来る事実である。

『三語便覧』およびその著者に関しては，前述したように，瀧田貞治氏の研究があるが，『三語便覧』の成立事情に関しては，詳細な言及はみられないので，本章では，この本の成立事情を佐久間象山との関連において述べてみたい。

## 1.　象山の字書出版計画

佐久間象山が，オランダ書に親しんだ時期ともいえる，いわゆる，御使者屋時代[6]は，「国防及び海外の学術技芸に通ずる必要上，洋書を読むことが益々欠く可からざる緊要なことになって来た[7]」時代でもあった。

しかしながら，象山はオランダ語学習の経験から，従来の字書は，あまりにも不完全かつ不便であったがために，象山自身の手で字書を改訂，出版する計画を企てるに至った。この間の事情は，象山の次の書簡からも窺うことが出来る。

「・・・・道富ハルマ訂正の上御蔵板の御含も御座候て既に公辺へ伺にも相成候やに承候へば定めて御伺通りの御沙汰に可有御座と奉存候[8]」

さらに，「誤寫多分のものにてすらも拾二三円に及び可申少し念入に寫させ候へば十八円も掛り可申候然る所を訂正を加え是迄に無之新発明の漢訳など増補し候もの七円そこらにて手に入候へば世の人の彼れをやめて此を求め候はん事申迄も無之候是迄の十七八円も掛り候品にても年々坪井の塾[9]などにて頼みをうけ数部出来候趣に承候へば其品是迄と抜群の相違にて金壱枚位と申時には天下の洋学者輩挙て競ひ求可申候へば三百部五百部はけ候はん事は暫時の間なくべく・・・・・[10]」

このように，象山の字書出版計画は，かなり具体的なものであったが，実際に出版するためには多くの障害が横たわっていたのであった。

象山は，嘉永2年(1849)，まず，藩の事業として字書を出版しようとしている。次の藩主・幸貫侯への書簡は，象山の字書出版の目的を述べている点で注目される。

「当今外寇の備へ候の御急務に彼を知るより先なるはなく，彼を知るの方法は彼の技術を盡くすより要なるはなく，彼の技術を盡し候には，天下其学の楷梯たる詞書を梓行するより便なるはなしと申所に御心を定められ，期する所は五大洲の学術を兼備し，五大洲の所長を集め，本邦をして永く全世界独立の国と為らしむる基礎を世に弘めんと申所に，御眼力を注がれ候はば假令群小の批評等御座候とも，本より蚊蚋の羽音に均しき事御掛念に及ばざる義と奉存候[11]」

彼の意見は，藩主には理解されたが，藩の子弟のオランダ語研究のためならば，ハルマ（字書）の写本を五六部得れば事足りるし，藩が利潤を目的とするが如く，世間から曲解されるのは遺憾であるとする，家老・小山田壹岐などの反対意見があり，結果的には出版の許可はおりなかった。やむなく，同年（1849）7月には，藩老・恩田頼母に願い，当時としては，千二百両という破格な借金までして，出版の実現をいそいでいる。

これほどまでして，象山が版行をいそいだその字書の特徴は，長崎ハルマ（ゾーフ・ハルマ）の誤訳や長崎地方の方言などを訂正した，たんなる改正版ではなく，ハルマ，マーリン，ウェーランドなどのオランダ辞書を参酌した点であろう。やがて，彼は「増訂荷蘭語彙」[12]と名付けた，その第一巻（Aの部）を携えて上府し，幕府天文方に差出しているが[13]，幕府は当時の諸事情を考慮してか，これの出版の許可を出さなかったのである。

嘉永3年（1850）の3月，まだ江戸深川の松代藩邸にあった象山は，21日に，時の老中・阿部正弘に，「増訂荷蘭語彙」出版許可の遅延に関して陳情しているが，不許可との返答を得て，やむなく江戸を離れた。しかし，不撓不屈の象山は，出版計画を断念するどころか，むしろ，さらに発展させようと大編纂を思い立っている。

「清朝の乾隆欽定の満洲蒙古漢字三合切音清文鑑並に同じ欽定の同文韻統の例に依り別紙一寸其体裁を著はし候通り皇国同文鑑と号し候て其内には満洲字も天竺字も払朗察字も荷蘭字も魯西亜字も何も収め候姿に致し先其荷蘭の部・・・・・[14]」

と，望月主水宛書簡に計画を述べている。

しかし，「皇国同文鑑」の荷蘭部として，出版する願いも空しく拒まれた。さすがに象山もこれには途方に暮れ，ついに友人の三村晴山[15]に，このような状態ではやむを得ないので，世禄を返上し藩を離れて，独立して立たんとする意を伝えている。象山不惑の年のことである。

象山の字書出版計画は，彼の熱意と努力にもかかわらず，このようにして挫折することになったのであるが，彼の努力は必ずしも徒労に終わったとは考えられない。何故なら，フランス語学習に専念し，ようやく，フランス語修得をした村上英俊が，『三語便覧』の編集に着手したとき，佐久間象山のあの幻の字書が，そこに反映していたのではないか，と推定されるからである。

事実，村上英俊は北山安世[16]などと共に，象山の字書出版計画に協力しており[17]，象山の影響をこの面でも無視するわけにはいかない。

## 2. 『三語便覧』の構想

「己の学が進むにつれて彼が感じた遺憾は，蘭書を読む者は世に多い，英語を解する者も尠くはない。然し佛蘭西語を読解するものに至っては天下広しと雖も一人もいない。四辺しきりに騒しいこの頃，佛蘭西語こそ世界の尖鋭佛蘭西を知る屈強の鍵だのに，という事であった。彼は乃ち後進に洋学を博むる為めの一助にもと，字書の編輯を思ひ立ったのであった[18]」

さらに，その字書の作成するにあたり，如何な内容に為すべきか，日夜熟慮した結果，

「先ず初学者の便を計り，かつ蘭英を読む者の為めを考えて，三ケ国語の対照字典に思ひ付いた。そしてこれに総假名の読みを施して発音を知らしめたのである[19]」

英俊の『三語便覧』にたいする決意と抱負は，こうしたものであったろうとは想像されるところである。

しかしながら，『三語便覧』の成立過程を考察するとき，必ずしも編者の独創的な構想のみで，編纂されたものではないように考えられる。ここで英俊が象山の勤めをえてフランス語学習を始めた，という事実とともに重要なのは，『三語便覧』もまた象山の「増訂荷蘭語彙」および「皇国同文鑑」を雛型として編纂されたのではないか，ということである。

すなわち，『三語便覧』は象山の未完に終わった字書の編纂計画に触発され，その精神にのっとり———さらに英俊独自の着想を加えて編纂され———刊行されたものではないか，というのが私の見解である。

英俊が，フランス語学習を志したのは，松代においてのことであり，『三語便覧』の公刊は江戸に出てからのことであるが，松代在住時代のみならず，松代を離れたあとも，英俊と象山との間には，変らぬ交友関係があったのである[20]。

こうした事実からも，英俊が象山の「増訂荷蘭語彙」，および，「皇国同文鑑」を十分に考慮にいれて，『三語便覧』を編纂したものと考えられる———仏・英・蘭あるいは仏・英・独の三語を対照させるというアイデアは，多分に「皇国同文鑑」の英・仏・露・独・印・満・蘭などの各国語対照字典から，ヒントを得たものと推定されるのである。

このように，村上英俊のフランス学者としての功績の背後には———すくなくとも，『三語便覧』が上木された頃までは———佐久間象山の存在が看過できないほど大きかった，と言えるのではあるまいか。

## 3. 『三語便覧』の構成

同書は，黄色表紙，和装（縦26センチメートル，横18.2センチメートル），右袋綴の3冊本である。題簽には，それぞれ「三語便覧初巻（中・終）」と墨書されており，紙数は初巻が引（塩谷世弘）2丁，序文（小林至静）2丁，凡例2丁，目録1丁，本文60丁からなっている。見返しには，茂亭村上義茂著，達理堂蔵と記されている。中巻は本文のみで63丁，終巻は同じく62丁である。

次に，この字書の構成についてであるが，目録によれば次の通りで，項目は25部門に分類されている[21]。

単語総数は，3,375語であるが，3ケ国語（仏・英・蘭，あるいは後になって出版された仏・英・独）を合計すると，その3倍の10,125語ということになる。

「初巻」　1,076語

天文　地理　身体　疾病　家倫　官職　人品　官室　飲食　衣服　器用

「中巻」　1,131語

兵語　時令　神仏　徳不徳　禽獣　魚虫　草木　果実　金石　医薬　采色　数量　地名

「終巻」　1,168語

言語（陪名詞　附詞　前置詞　附合詞　動詞）

さて，この書の記述を紹介するために，初巻の「天文」の部から，その一例を引用してみると，次のようなものである。

| | 仏蘭西語（フランス コトバ） | 英傑列語（エゲレス コトバ） | 和蘭語（ヲランダコトバ） |
|---|---|---|---|
| 風（カゼ） | vent（ヘント） | wind（ウキンド） | wind（ウキンド） |
| 寒（サムサ） | froid（フロイド） | cold（コルド） | koude（コユデ） |
| 土（ツチ） | terre（テルレ） | earth（エーテル） | aarde（アールデ） |

一瞥すると，まず最初に気づくことは，日本語の単語に対して，それぞれの外国語が並列されていることであろう。また，その発音を示すのに，仮名をあてているのも目につく――これが後に問題となるところである（「仏・英・独」の改訂版には仮名表記は見られない）。

従来，村上英俊のフランス語発音に関する評価は，必ずしも勝れたものでなかったのは事実である。そればかりか，むしろ芳しいものではなかったとさえ言えよう。

このことは，英俊が我国の黎明期におけるフランス学者であり，さらに，まったくの独学によって，フランス語を修得した事情を考慮にいれても，これらの非難は免れないところであろう。

なお，フランス語の発音に関する問題は，日本仏学史に興味を抱く人達の指摘をまつまでもなく，『三語便覧』が上木された当時から，すでに存在していたものである。

その間の事情は，佐久間象山の書簡にも窺うことが出来る[22]。

さて，幕末の洋学者の大部分がそうであったように，村上英俊もまたオランダ語を基礎外国語（第1外国語）としていた。

一般に，未知の外国語を学習するさい，学習者がすでに第1外国語を修得している場合には，その言語をなんらかの形で活用しようとすることは，むしろ当然のことであると言える。さらに，英俊のように，かなりの年令で第2外国語（フランス語）に取り組もうとするような場合は，より一層，第1外国語の影響を強く受けると言っても過言ではあるまい。まして，ヨーロッパ人との接触する機会に恵まれなかった当時の国内環境を考えてみれば，なおさらのことであろう。

それ故，彼がフランス語の発音をカナ表記するにあたって，同じヨーロッパの言語という見地から，その言語資料をオランダ語に求めたことは容易に推測される。

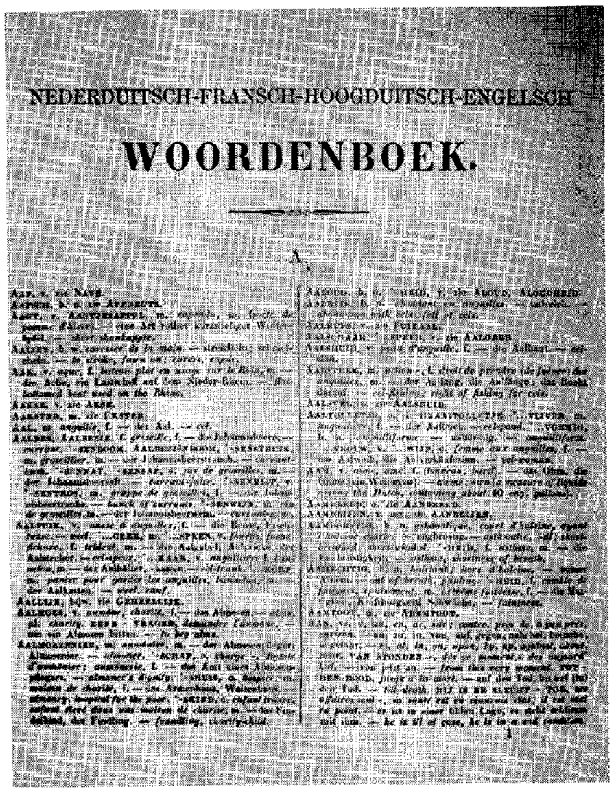
さて，英俊のフランス語発音がオランダ語流であるという批判は，『三語便覧』におけるカナ表記の発音にも如実に表われている。しかも，この発音が正確なオランダ語でなされているかどうかは，疑問のあるところである。むしろ蘭仏折衷の発音であると言った方が正確であろう。

当時の基礎外国語とも言うべきオランダ語には，言語資料としての文献は豊富であるが，その中でも英俊が参考にしたものといえば，大槻玄幹の『西音発微』(1820)[23]を逸することは出来ない。なお，『西音発微』を中心として，その他にフランス語関係の書物を参照にした形跡がみられるが，その書物は英俊自身が記述している，「原書ハ千八百三十年（天保元年）ノ鏤版ニシテ佛蘭

西ノ語学名家ノ魯門篤氏ノ著述ナリ」，がそれであろうと推測される[24]。

ところで，ここに一つの疑問が生じてくる。それは，当時の英俊の知識では，はたして三ケ国語対照字典———たとえ，それが一種の単語帖のようなものであったとしても———編纂することが可能であったろうか。すなわち，『三語便覧』のなかで使用された外国語が，いかなる方法によって選択され，配置されたものであるのか，と言うことである。

なお，この問題については，すでに日本フランス語フランス文学会（口頭発表）において指摘したが[25]，その後，英俊とはゆかりの深い松代にしばしば赴いて，松代文庫，その他の所蔵本を一通り調らべることが出来た。その結果，判明したことは，オランダで出版されたある種の辞書が，同書の成立に密接な関係をもっていると看取され，その書名も中心となったものについては，ほぼ確実であると推測できるものである[26]。


NEDERDUITSCH-FRANSCH-HOOGDUITSCH-ENGELSCH

WOORDENBOEK.

Calisch『蘭・仏・独・英・辞典』の本文内容，松代文庫所蔵）

下記に掲出した3冊は，『三語便覧』の成立に大きく寄与したものと思われる。その他にも若干のオランダ辞書が関与していたものと考えられるが，その書名は明らかではない。

1) Marin, P.
Groot Nederduitsch en Fransch woordenboek. 1132p. (26 x 20cm). 1728.

この蘭仏辞書は，現在，松代文庫には所蔵されていないが，真田家文書「政典」（安政3年）において，蕃書所蔵目録の中に蘭仏辞書としては，この本のみが見在するところから，その書名は間違いないものと思われる。

本稿を草するにあたっては，静岡県立中央図書館葵文庫所蔵本を参照した。同文庫には第2版(1730)，および第3版（1752）が所蔵されているが，そのうちの第2版本は破損がはげしく調査する上に困難な状態にあったので，第3版本のみを使用した。なお，松代藩蔵書本は1728年の出版と記されているところから，おそらく初版本であろうと推定される。

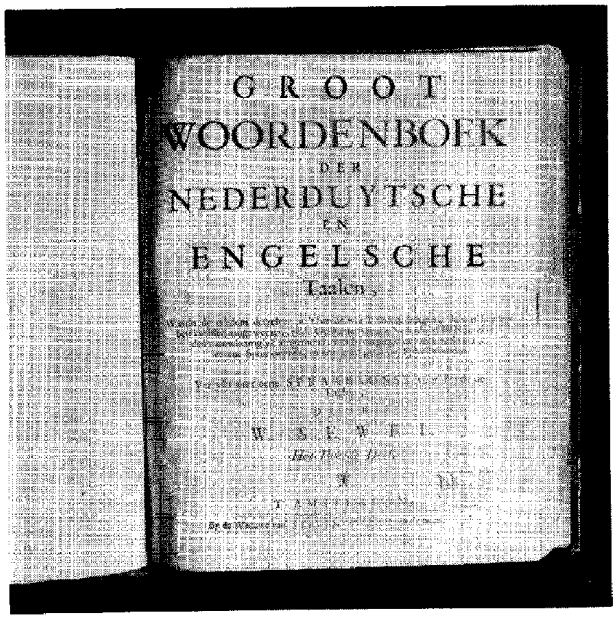
同書を簡単に紹介しておくと，総ページ数は1,132ページであるが，AからKを第I部として1ページから528ページとし，さらにLからZまでを第II部として，やはり1ページから順をおって604ページとなっている。それ故，本稿では，Iの何ページ，またはIIの何ページという方法で記述することにする。

2) Calisch, N. S.
Nieuw woordenboek der Nederduitsch, Fransche, Hoogduitsch en Engelsche talen.
(18.6 x 14.3cm). 1854.

総ページ数，950ページ（本文のみ922ページ）である。この本は，『三語便覧』の改訂版とも言

うべき，仏・英・独の『三語便覧』作成のときに———とくにドイツ語の単語について———使用されたものと考えられるが，この他にも，真田家文書によれば蘭独辞書（書名は不詳）が，安政3年の頃には所蔵されているので，この蘭独辞書との関係も推測されるところである。

しかし，『三語便覧』の改訂版はかなり後年になっての版行であるので，ここでは，現在，松代文庫に所蔵されている同書との関連において考察したい。なお，この辞書の題名については，本稿では仮りに，Calisch の《蘭・仏・独・英》辞典としておくことにする。




(Sewel『蘭英辞典』の扉，松代文庫所蔵)

3) Sewel. W.
Groot Woordenboek der Nederduytsche en Engelsche Taalen. (17 x 21cm). 1708.

この《蘭英辞書》は，かなり大きな活字で組まれており，頁数は680ページと辞書としては紙数がすくない。

## 4. オランダ辞書との関連

さて，いよいよ，『三語便覧』の具体的な検討にはいるわけであるが，収録語彙のすべてにわたって触れることは，とうてい不可能なことである。そこで，同書とオランダ出版の辞書との関連を実証するために，『三語便覧』の各項目から，それぞれ一語づつ摘出して，その内容を調べることにした。これだけの分量があれば，本稿の主題に関して結論を引きだすのに充分であろう，と判断したからである。

なお，『三語便覧』において付されていたルビについては，当面の問題とは直接に関係がないと思われるので，特別なもののみを括弧にいれ，その他は省略した。

次に，前述したように外国語の単語は横に並列されていたが，便宜上それを縦とした。

〈 〉はドイツ語の単語（同書が改訂されたとき，オランダ語にかわってドイツ語がおかれた）を示したものであり，イタリックの個所は筆者が付したものである。

(1) 「天文」　天
　(仏)　ciel
　(英)　heaven
　(蘭)　hemel
　　<himmel>

〈蘭仏辞書〉 (Marin) p. I–388
*hemel.* m. word veeltyds voor Paradys, 't verblyf der zalige zielen genomen. *ciel,* Paradis, séjour des bienheureux. m.

〈蘭仏独英辞典〉(Calisch) p. 216

der *Himmel,* die Luft, das Firmament, Himmelsgewölbe;

(紙数の都合上，記述に支障をきたさないかぎり，ドイツ語のみとした)

〈蘭英辞書〉 (Sewel) p. 173

*Heaven,* the sky.

(2) 「地理」　地　震

(ママ)

(仏)　tremblement de terre

(英)　earth quake

(蘭)　aardbeving

<erdbeere>

<Mar> p. I–22

*aardbeving,* aardbeeving, f. Dreuning, fchudding der aarde. *Tremblement de terre.* m.

<Cal> p. 17

Aardafstand, m. ··· Beving, v. das Erdbeben. ··· Bei, ··· Bezie, v. die *Erdbeere.*

<Sw> p. 12

Aardbeeving (F), an *Earth quake.*

(3) 「身体」　鼻　鼾

(仏)　ronfrement

(英)　snoring

(蘭)　snorking

<Schnarchen>

<Mar> p. II–341

*snorking.* f. Action de ronfler. f. *Ronflement.* m.

<Cal> p. 622

Snork, ···ing, das *Schnarchen.*

<Sw> p. 450

Snorking (F) (ronking). a *Snoring,* a Vaunting, boasting, swaggering

(4) 「疾病」　健　康

(仏)　Sante

(英)　health

(蘭)　gezondheid

<gesundheit>

<Mar> p. I–329

*gezondheid.* f. Gezonde toeftand, welvaarendheid naar den ligchaame. *Santé,* bonne disposition du corps. f.

<Cal> p. 189

die *Gesundheid;* das Heilsame; der Gürtel.

<Sw> p. 151

Gezondheyd (F), *Health,* healthfulness.

(5) 「家倫」　破瓜年（トシゴロノムスメ）

(仏)　fille nubile

(英)　marriageable sister

(蘭)　Huwbare dochter

<mannbar tochter>

<Mar> p. I–427

Huwbaar. Adj. Houbaar. ... Een *huwbaare dochter.* Une *fille nubile,* en âge de puberté.

<Cal> p. 131

Dochter, die *Tochter;* das Mädchen.

〈同上〉

Huwbaar, b. n. ... *mannbar,* reif.

<Sw> p. 187

Huwbaar, *Marriageable,* fit for marriage.

〈同上〉 p. 90

Dochter (F), a Daughter.

(6) 「官職」　留台（ゴジョウダイ）

(仏)　burgrave

(英)　vicount

(蘭)　burggraaf

<burggraf>

<Mar> p. I–163

Burg-graaf. Slotvoogd: Heer van een Burgt of vaft Slot en omleggende Landeryen. Burg-grave; Burgrave, ou Vicomte.

<Cal> p. 118

der *Burggraf.*

<Sw> p. 79

*Burggraaf* (M), a *Vicount.*

(7) 「人品」　収生媼（トリアゲババ）

(仏)　sage-femme

(英)　midwife

(蘭)　vroedvrouw

<vroedvrouw>

<Mar> p. II–514

*vroedvrouw.* f. zie vroedmoer. Vroedmoer, Vroemoer. f. Troedvrouw, Vroedwyf. *Sage femme;* Matrone qui aide les femmes à accoucher.

<Cal> p. 839

Vroed, ... vrouw, v. ... die Wehmutter, Hebamme.

（フランス語，および，英語については， sage-femme, accoucheuse, f. ... midwife となっている）

<Sw> p. 607

Vroedvrouw (F), Vroedwyf (N), a *Midwife.*

(8) 「宮室」　王城（ミヤコ）

(仏)　capitale

(英)　capital city

(蘭)　hoofdstad

<hauptstadt>

<Mar> p. I–411

*hoofdstad.* f. Voornaamfte Stad. *Capitale.* Ville capitale.

<Cal> pp. 228~229

Hoofdingang, ...Stad, die *Hauptstadt.*

<Sw> p. 183

Hoofdstad (F), the chiefest city, the metropolitan city.

(9) 「飲食」　食　物

(仏)　nourriture

(英)　victuals

(蘭)　voedsel

<nahrung>

<Mar> p. II–494

voedsel, n. Koft, fpys, onderhoud. Nourriture. f. Aliment. m.

<Cal> p. 814

Voedsel, o. die *Nahrung.* das Nahrungsmittel, dis Speise, das Fütter, die Kost; Versorgung.

<Saw> p. 590

Voedsel (N), Nourishment, food, nutriment.

(10) 「衣服」　風領（エリマキ）

(仏)　cravate

(英)　neck-cloath

(蘭)　das

<dach>

<Mar> p.I–192

*das.* f. Mans linne halscieraad. *Cravate.* f.

<Cal> p. 124

Das, m. daim, blaireau, taisson, m. ... der *Dachs,* ... badgar. ..., v. cravate, f. ... die Halsbinde, Halskrause, das Halstuch. ... neck-cloth, cravat, neckerchief.

<Sw> p. 85

Das (F), Dasje (N), a *neck-cloth,* cravat.

(11) 「器用」　家　具
(仏)　meuble
(英)　houshold stuff
(蘭)　huisraad
<hausgerätt>

<Mar> p. I–424

*huisraad.* n. & m. Stoelen, tafels, bedden, fpiegels, kaffen, & c. tot gemak of cieraad van 't huis dienende. *Meubles,* ustencilles pour la commodité ou l'ornement d'une maison.

<Cal> p. 235

*Huishuur,* ... raad, das *Hausgeräth,* der Hausrath.

<Sw> p. 188

Huysraad (N), *Haushold stuff,* house-utensils.

(12) 「兵語」　城
(仏)　forteresse
(英)　strong
(蘭)　sterkte
<stärke>

<Mar> p. II–368

*Sterkte.* f. ... Een Sterkte, een Vefting of Schans. Une place forte, une *Forteresse,* un Fort, une Citadelle.

<Cal> p. 650

Sterk, ...te die *Stärke,* Kraft, Macht, Gewalt, das Vermögen; die Dauerhaftigkeit, Festigkeit; Ranzigkeit; Schanze, Festung.

<Sw> p. 465

Sterkheyd (F), Strongness

(13) 「時令」　今　日
(仏)　aujourd'hui
(英)　today
(蘭)　heden
<heute>

<Mar> p. I–377

*Heden,* Huiden. Van daag. *Aujourd'hui,* ce jour-ci.

<Cal> p. 212

Heden, *heute,* heutigen Tages.

<Sw> p. 171

Heden, *Today.*

(14) 「神仏」　経　典
(仏)　pseaume

(英) psalm
(蘭) psalm
<psalm>

<Mar> p. II–243
*Psalm.* m. Heilige Lofzang. *Pesaume.* m.
<Cal> p. 538
Psalm, der *Psalm*
<Sw> p. 395
Psalm (M), a *Psalm.*

(15) 「徳不徳」 不 学
(仏) aveuglement
(英) blindness
(蘭) verbindheid
<blindheit>

<Mar> p. II–448
*verblindheid.* f. *Aveuglement,* éblouissement. m. illusion. f.
<Cal> p. 754
Verblind, ... heid, v. die *Blindheit,* Verblendung.
<Sw> p. 537
Verblindheyd (F), *Blindness,* cecity.

(16) 「禽獣」 告天鳥（ヒバリ）
(仏) alouette
(英) lark
(蘭) leeuwerik
<lerche>

<Mar> p. II–16
*leeuwrik,* Leeuwerk, bekend vogeltje. *Allouette.* f.
<Cal> p. 326
Leeuwerik, Leeuwrik, m. die *Lerche.*
<Sw> p. 242
Leeuwrik (M), a *Lark.*

(17) 「魚虫」 雪 魚
(仏) merluche
(英) stock fish
(蘭) stokvisch
<stockfisch>

<Mar> p. II–373
stokvis. Gedroogde kabeljauw of leng. Du stokfisch, espèce de moruë ou *merluche* sêche.

<Cal> p. 656

Stoklantaarn, Stoklantaren, ··· visch, m. stockfisch, der *Stockfisch.*

<Sw> p. 468

Stokvisch (M), *Stock-fish.*

(18) 「草木」　松　樹

(仏)　sapin

(英)　fir tree

(蘭)　dennenboom
(ママ)
<denneboom>

<Mar> p. I–196

*denneboom,* greeneboom, m. Maftboom, fparreboom. *Sapin.* m.

<Cal> p. 126

Dennenboom, m. zie Den. ··· bosch, ··· woud, o. sapinière. f. der Tannenwald. wood of fir-trees. ··· hout, o. bois de sapin, m. das Tannenholz. wood of firs, fir-wood. ··· zwam, v. agaric du sapin, m. der Baum, Blätter, Tannenschwamm, agaric.

<Sw> p. 87

Dennenboom (M), a *Fir-tree.*

(19) 「果実」　果
(ママ)

(仏)　fruits
(ママ)

(英)　fruits

(蘭)　vrucht
<frucht>

<Mar> p. II–516

vrugt, voordeel, nuttigheid. *Fruit,* profit, avantage, benéfice. m. Utilité. f.

<Cal> p. 840

Vrucht, v. die *Frucht;* das Obst.

<Sw> p. 608

Vrucht (F), *Fruit.*

(20) 「金石」　珊瑚

(仏)　corail

(英)　coral

(蘭)　koraal
<koralle>

<Mar> p. I-502

*koraal,* coraal. n. Koraalplant, Zeegewas dat in de grond week is, en in de lugt komende zoo hard als marmer word. *Corail.* m.

<Cal> p. 294

Koraal, m. zie Koorjongen. die Koralle.

<Sw> p. 224

Koraal (N), *Coral.*

(21) 「医薬」　肉　桂

(仏)　Cannelle

(英)　Cassia

(蘭)　kaneel

<zimmet>

<Mar> p.I–459

*kaneel* of caneel. n. Schors, baft van de kaneelboom, *Canelle.* f.

<Cal> p. 262

Kaneel, der *Zimmet,* die Zimmtride, der Cannel.

<Sw> p. 204

Kaneel (F), Cinnamon

(22) 「采色」　緑

(仏)　vert

(英)　green

(蘭)　groen

<grün>

<Mar> p. I–347

*groen.* n. De groene koleur. Verd, *vert,* la couleur verte.

<Cal> p. 198

Groen, *grün;* frisch; unreif, jung, jugendlich.

<Sw> p. 158

Groen, *Green.*

(23) 「数量」　十九

(仏)　diz neuf

(英)　nineteen

(蘭)　negentien

<neunzehn>

<Mar> p. II–105

*negentien* uuren, dagen, weeken, maanden, jaaren. *Dix-neuf* heures. jours. semaines, mois, ans.

<Cal> p. 396

Negentien, *neunzehn*

<Sw> p. 292

Negentien, *Nineteen.*

(24) 「地名」　弟印

(仏)　danois

(英)　dane
(蘭)　deen
<däne>

<Mar> p. I–193

*deen.* Man uit Denemarken. *Danois,* homme de Danemarc.

<Cal> p. 942

Denemarken, deen, der *Däne,* die Däninn.

<Sw>（相当する単語なし）。

(25)「陪名詞」　強
(仏)　fort
(英)　strong
(蘭)　sterk
<stark>

<Mar> p. II–368

*sterk.* Adj. Kragtig. *Fort,* robuste.

<Cal> p. 650

*stark,* kräftig, mächtig, fest, dauerhaft; ansehnlich, zahlreich; dicht, dick; gewaltig, heftig; gesund; gut, mit Stärke.

<Sw> p. 227

Kracht (F), ... Krachtig, Powerfull, *strong,* effeetual,

(26)「附詞」　刻下（タダイマ）
(仏)　tout à l'heure
(英)　dresently
(蘭)　straks
<sogleich>

<Mar> p. II–377

*strak.* Adv. In 't kort, flus. Bientôt, dans peu.

（何故に，フランス語に tout à l'heure を用いたのか不明であるが，これで他の辞書をも参照していたことは間違いない。）

<Cal> p. 660

Strakjes, ... *sogleich,* nächstens, hald.

<Sw> p. 471

Strak, Straks (adv.), *Presently,* by and by, e'en now.

(27)「前置詞」　向
(仏)　contre
(英)　against
(蘭)　tegen
<gegen>

<Mar> p. II–389

Voorzetfel van tegenheid, afkeer, ftrydigheid & c. *Contre;*

<Cal> p. 480

Tegen, gegens, wider; mit, an; zu; um; zuwider, nachtheilig, widrig.

<Sw> p. 676

Tegen, Tegens, *Against*

(28) 「附合詞」　時

(仏)　quand

(英)　when

(蘭)　wanneer

<wann>

<Mar> p. II–530

*wanneer.* Adv. Doe, ten tyden als, in welke tyd. *quand,* lors que, dans le temps que.

<Cal> p. 849

Wanneer, *wann,* wenn, zu welcher Zeit, als, da; wofern, so.

<Sw> p. 619

Wanneer, *When.*

(29) 「動語」　置

(仏)　mettre

(英)　to set

(蘭)　zetten

<setzen>

<Mar> p. II–583

*zetten.* v. a. Plaatfen, ergens ftaan laaten. *Mettre,* poser, placer.

<Cal> pp. 905~906

Zetten, b. w. *setzen,* legen, stellen

<Sw> p. 653

Zetten, *to Set,* to Put.

上記の用例から，色々の事が問題として考えられるが，その内のおもな点を要約して記せば，以下の通りである。

1.　村上英俊は，『三語便覧』の見出し（日本語）に対して，三ケ国語を当てる方法としては，次のような経路をへたものと考えられる。

まず，最初に〈蘭仏辞書〉によって，オランダ語――または，松代藩架蔵の蘭英辞典，および蘭独辞書，その他蘭和字書によってオランダ語を選択した形跡がある――を摘出し，次に，同辞書からフランス語を引き出したもの，と推定される。

2.　英語に関しても，オランダ語を頼りにしたことは明らかであり，〈蘭英辞書〉によって，英語の単語を探したことが認められる。

3.　それでは，後になって出版された改訂版（ドイツ語所収のもの）の場合はどうであろうか。

この改訂版は，『三語便覧』で用いられたオランダ語のみを，ドイツ語に置き変えただけであるところから，〈蘭仏独英辞典〉が大きく関与していたことは，ほぼ間違いのないところであろう。

**4.** 英語の単語についても，時として例外も存在し，かならずしも参照した辞書と一致しない点がある。例えば，用例(5)の場合であるが，英俊の方法にしたがえば，marriageable daughter となるところであるが，何故に sister が用いられているのか不明である。

**5.** 同じく英語において，〈蘭英辞書〉にまったく出ていないものがあるが，はたして『三語便覧』で使用された単語はどのようにして配置されたものなのであろうか。

用例(9)がまさにその例であるが，では一体そこで使われた victuals なる単語は，何を参考にして書かれたものなのであろうか。結論から先に言えば，W. H. Medhurst <An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary> （バタヴィア版，1830）を参照していたことが調査により明らかとなった。用例(21)も同様である。

〔註〕

(1) 初版が出た年については諸説があるが，『三語便覧』の引（塩谷世弘）が嘉永7年甲寅良月（陰暦10月の別名），さらに序（小林至静）も嘉永甲寅孟冬（陰暦の10月）となっているところから，いずれにせよ出版は嘉永7年の10月以降とするのが妥当なところであろう。しかし，嘉永7年という年は，11月27日をもって改元されているので（日本歴史大辞典），『三語便覧』の初版本が上木されたのは，やはり安政元年のことと考えて差し支えあるまい。

(2) 吉岡秋義『「払郎察辞範」源流考』（長崎大学教養部紀要・「人文科学」第4巻，P. 76）に「・・・・この編集の着手並に成就の年紀は分らない。しかし，文化十一年甲戌年六月暗厄私亜語大成の脱稿以後の者らしい・・・・」とある。

(3) 石橋助左衛門，中山作三郎，本木庄左衛門，今村金兵衛，楢林彦四郎，馬田源十郎の6名である。
なお，くわしくは，拙稿「Les origines de l'étude du français au Japon」，（「文学部論集」，第4巻第2号，創価大学文学部）参照。

(4) 両書の研究に関しては，松村明『洋学資料と近代日本語の研究』（東京堂出版），P. 243～P. 302に詳しい。

(5) 高橋邦太郎「仏語事始の背景」（「成城文芸」，成城大学文学研究室，第44号），P. 32～P. 33。

(6) 弘化3年（1846）5月より，嘉永4年（1851）の4月までをいう。

(7) 『佐久間象山』（象山先生遺跡表彰会編，実業之日本社），P. 192。

(8) 嘉永元年（1848）11月8日の書簡。

(9) 蘭医・坪井信道の塾。信道に就いては，青木一郎『坪井信道の生涯』（杏林温故会）に詳しい。

(10) 嘉永元年（1848）11月15日の竹村金吾宛の書簡。

(11) 嘉永2年（1849）2月の上書。

(12) 原稿は和紙に鵞ペンをもって書かれており，従来，東京大学南葵文庫に保存されていると言われてきたが，私の調査したところによると見あたらない。なお，その草稿といえるものが，松代町在住の依田忠雄氏宅（象山とは依田家が遠縁にあたる）に所蔵されていたが，大正の末期か昭和の初期に，長野市の古本屋に売却してしまったという。
しかしながら，先学によって，「増訂荷蘭語彙」の題言は明らかにされている。
「学必博，而後所見不偏，所識不固，而所能得其要，中略。大西洋諸国，言語不通，書亦殊文，故欲為其学，非先記其言語其文法，不能也。詳文法者，固必須於語段，而記其言語，亦不可不求之邦訳字書，予雖留之余，嘗裡訂徒弗氏所訳荷蘭語彙，以便討索，今段語様，同学之士，或有取焉。

文化中、荷蘭人徒弗。久在崎港、頗通本邦之語、乃与荷蘭通事数輩、取法法爾禾下篇、排其払釈、以我邦語、以便於邦人、斯学発端、無過之、故今依其本、採摭蹟隣以下数書、会萃附注。漢字註、以英語洋語、釈以漢字者、始于英人莫栗禾、荷蘭通事吉雄永保、取莫氏之本書、換英以荷、以纂一書、今註下注住存漢語多従吉雄氏之本。

徒弗は Hendrik Doeff、蹟隣は Pieter Marin、莫栗禾は Dr. Robert Morrison に該当す。」

古賀十二郎『長崎洋学史（上巻）』（長崎学会），P. 87。

(13) 嘉永2年（1849）10月。

(14) 嘉永3年（1850）4月2日の書簡。

(15) 松代藩の絵師。13才にして藩の絵師として召出され，和漢の学に長じ，また政治家としての才能も有していた。

(16) 佐久間象山の甥で医者。オランダ語を解するばかりではなく，フランス語も研究していた形跡がある（真田家文書「政典」）が，不幸な死にかたをしているため，彼の業績は埋れて久しい。

(17) 「増訂荷蘭語彙」の題言でも述べているように，象山は字書を編纂するさいに，ドウフ・ハルマを定本としているが，蘭和字書の編纂という大事業であってみれば，彼が一人で作成することはとうてい不可能なことであろう。それ故，数名の協力者がいたとしても不思議ではない。実際，協力者たちによるドウフ・ハルマの筆写がおこなわれ，村上英俊もその一人として参加している（「英俊説」の中で「・・・・・騰寫道布譯法爾瑪一部・・・・・」と記している）。

なお，その写本（十六巻にて完本であるが，第一，第二巻は欠本）が松代文庫に所蔵されており，「洋書目録」の備考蘭に「第四巻題箋（道布萃爾麻）ハ村上英俊ノ書ナリ」と記されている。

(18) 瀧田貞治『佛学始祖・村上英俊』（巌松堂書店古典部），上巻17丁裏。

(19) 同上，上巻18丁裏。

(20) 二人の交友関係があったことは，次の書簡でも明らかである。

松代時代のものとしては，「・・・・・漢方医でも致さぬ程のやり投げなる療治に付直様右慎斉迄安世を遣し呼寄せ候て理解申聞かせ其上此末の手充の所存急申尚榮俊等へも相談いたし治法を誤らざる様・・・・・」と，嘉永4年正月十三日の倉田左高宛がある。

江戸在住時代のものとしても，嘉永4年11月16日の長谷川深美宛がある。「・・・・・御在府中御内話も候ひし村上生外宅之事其後随分無油断心断遣し候へども相応之所無之今日に至り候処此節一ケ所有之候趣にて場所は萱場町に候故医業致し候には最寄よろしく御座候委細之義は当人より申上候に付相略し申候・・・・・」（・・は筆者が付したもの）。

(21) 部門別に分類する方法は，当時の字書にはよく見られることであり，同書も『改正増補蛮語箋』等の影響をうけたことは否定できない。しかし，村上英俊は，我国で出版された蘭和字書，節用集の他に，W. H. Medhurst の英和・和英辞典（後に翻訳されて『英語箋』および『英語箋後篇』となる）を参照していたことが明らかとなった。

(22) 「昨日は珍物御恵被下感荷浅からず奉謝候然ば御示し被下候三語便覧一寸致寓目候處訛誤以ての外に外く散々なる著述と存候右へ松代など題し候事恥かしき次第・・・・・）（倉田左高宛の書簡）。

それでは，何故に，佐久間象山に直接，『三語便覧』を献本したかったのか，という疑問が残るが，それは，当時，謹慎の身であった象山を考慮してのことであろうと考えられる。

(23) 『西音発微』（調査にあたっては，松代文庫所蔵本および創価大学所蔵本を用いた）の構成内容について簡単に記してみると，次の通りとなる。

この本は書名からも明らかなように，オランダ語の発音を和字，および漢字によって示したものである。なお，同書は紺色表紙であり，縦25.7センチメートル，横17.8センチメートルの寸法であるが，題簽に

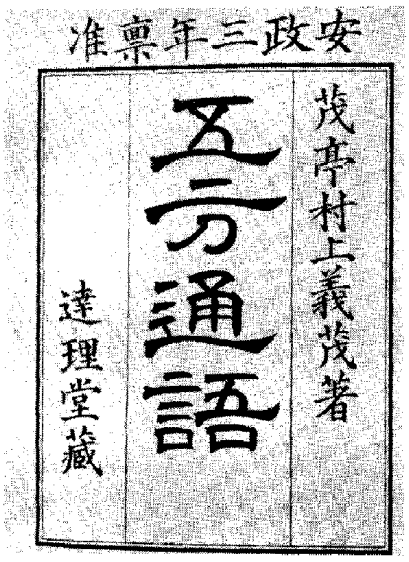
は，「西音発微，附西洋字原考国字考」と墨書されている。墨付丁数，41丁というのがその紙数である。

(24) 「魯門篤氏ノ著述」は，後に英俊によって抄訳され『佛英訓弁』の基礎になった本であるが，真田家文書によれば，「フランス文法書，但千八百二十五年版，ロモンド著」(Lhomond, Fransch spraakkunst. 285p. 23 x 14cm. 1825) とある。

(25) 昭和47年度，春季大会（共立女子大学）。

(26) 前稿（『三語便覧』の成立をめぐって，文学部論集第4巻第1号，創価大学文学部。P. P. 145～154。）において，『三語便覧』の成立に影響をおよぼした蘭仏辞書としては，"Agron, P. en Landré, G. N. Nieuw handwoordenboek, der Nederduitshe en Franche talen." であろうと推定したが，新資料・真田家文書「政典」にマーリン辞書の名が明記されているので，ここに訂正しておく。

# 第3章　『五方通語』の成立とその内容




（村上英俊『五方通語』の見返し、松代文庫所蔵）

## 1．『雑字類編』の影響

村上英俊の初期の著作に『五方通語』（1856）があるが，この5ケ国語対照字典は，『三語便覧』の延長とも言うべき性質のものである。

なお，同書において収載された外国語に関しては，以下のような説明がなされている。

「佛蘭西語，英傑列斯語，和蘭語，羅甸語，ヲ集メ記シ，且漢説アル者ハ，引挙シテ，語後ニ之ヲ附録ス，故ニ覧者，其検セント欲スル所ノ語ヲ，国語ニ依テ，検査スルトキハ，西洋ノ四邦語ヲ知ル而已ナラズ，傍ラ漢ノ故事物原ヲ，粲然トシメシ，明ニ知ルベシ」（凡例1丁裏）。

さらに，英俊自身がその凡例のなかで，

「近頃洋学，日月ニ盛ニシテ専ラ世ニ行ル顧ニ後進ノ者，必ス洋文ヲ作ルニ至ランカ，然シテ学者，其洋文ヲ作ルニ臨テ，一二語ヲ遺忘スルトキハ，必ス其洋文ヲ作リ得ルコト能ハザル可シ，誠ニ遺憾ニ非スヤ，其時ニ当テ，此書坐右ニ在ルトキハ，国語ニ因テ，其語ヲ探リ得ルコト，最モ易シ，故ニ其文作リ得ベシ，若シ彼字書ニ因テ，求ルトキハ，其語ヲ探リ得ルコト，容易カラズ，徒ニ時日ヲ費シカ，是ニ由テ，此書ヲ作リテ以テ，洋学者作文ノ一助ト為ス，余ガ著述ノ意ハ，全ク此ニ存スト云爾」（凡例2丁表）

と記していることからも明らかなように，この字書が英俊の外国語（初期の）に対する知識を知る上でも，重要な意味をもっているものと思われる。

そこで，本稿では，その内容を詳細に検討し，報告することにする。

『五方通語』は松代文庫所蔵本によれば，紺表紙，和綴の3冊本である。縦26.3センチメートル，横18.3センチメートルの寸法で，紙数は巻之一が序（井上源時朝）2丁，題辞（塩谷世弘）2丁，凡例2丁，本文は巻之一が38丁（収録語彙448語），巻之二が36丁（同，444語），巻之三が40丁（同，533語）からなっている。

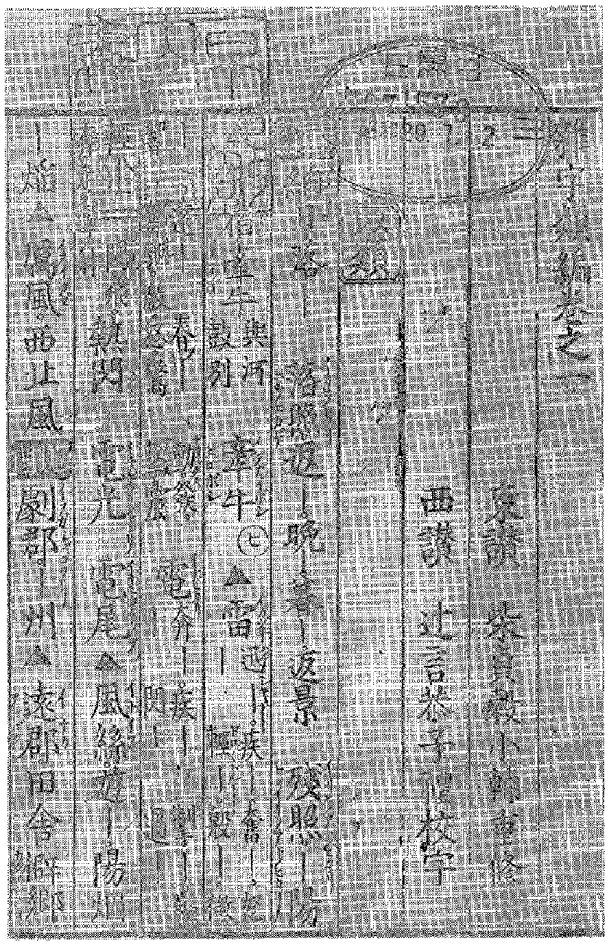
各巻の題簽は「五方通語1（2・3）」と記されてあり，見返しには巻之一のみ，「安政三年稟准，茂亭村上義茂著，五方通語，達理堂蔵」と墨書されている。

さらに，この本の構成内容を記せば，次の通りである。

「此書ハ国語ニ依テ，洋語ヲ検査スル為ニ，編輯セリ，全ク初学ニ，便利ヲ欲シテナリ，故ニ伊呂波四十八字ノ順次ニ倣テ，序次ヲ為ス，因テ毎字ニ，門ヲ別ツ……」（凡例1丁表）

とあり，天文，地理，時令，官室，人品，家倫，官職，身体，神仏，器用，衣服，飲食，文書，銭穀，采色，人事，動物，植物，言語の19の部門に分類がなされている。

なお，『五方通語』における門立ての名称と順序については，凡例の2丁表において明らかなよ



（『雑字類編』，京都大学図書館所蔵）

うに，『雑字類編』(1) を参照したものである。さらに，見出しで使用した日本語の単語にも，同書が重要な役割を果たしていることが察知される。

一例として，「好の部」の項を比較対照してみると，次の通りとなる（『雑字類編』は京都大学所蔵本を使用した）。

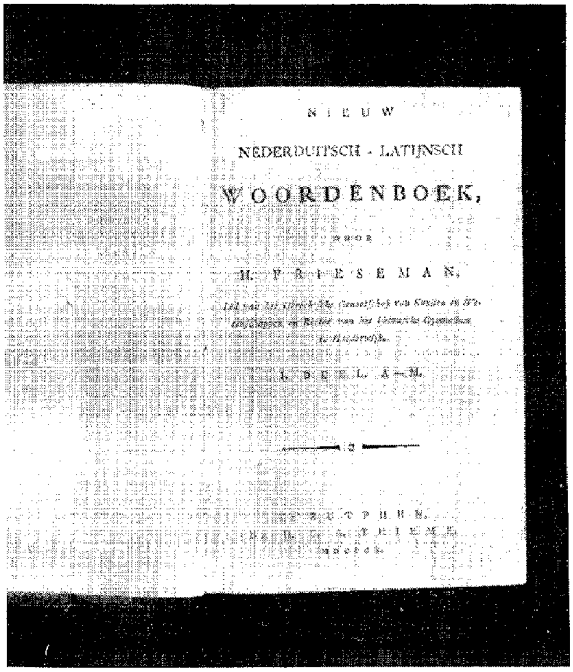
| | 『五方通語』 | | 『雑字類編』 | |
|---|---|---|---|---|
| 「天文」 | 徵 | 星 | 徵 | 星 |
| 「地理」 | 間 | 道 | 間 | 道 |
| | 湿 | 上 | 湿 | 土 |
| | 沼 | | （ナシ） | |
| 「宮室」 | 塗 | 屋 | （ナシ） | |
| 「人品」 | 繍 | 匠 | 繍 | 匠 |
| | 漆 | 工 | 漆 | 工 |
| | 漆 | 家 | 一 | 家 |
| | 漆 | 匠 | 一 | 匠 |
| | 布 | 売 | 布 | 売 |
| | 布 | 客 | 一 | 客 |
| | 紅 | 女 | 紅 | 女 |
| | 織 | 布工 | （ナシ） | |
| | 奴 | 僕 | （ナシ） | |
| | 奴 | 隷 | | |
| | 盗 | 人 | 盗 | 人 |
| | 偸 | 児 | 偸 | 児 |
| | 夜 | 客 | 夜 | 客 |
| | 精 | 細人 | 精 | 細人 |
| 「身體」 | 板 | 歯 | 板 | 歯 |
| 「器用」 | 漆 | 簡 | 漆 | 簡 |
| | 漆 | 板 | 一 | 板 |
| | 簡 | 板 | 簡 | 板 |
| | 漆 | 器 | （ナシ） | |
| | 湿 | 紙 | 湿 | 紙 |
| | 白 | 刃 | 白 | 刃 |
| | 露 | 刃 | 露 | 一 |
| | 布 | 幕 | 布 | 幕 |
| | 布 | 幔 | 一 | 幔 |
| | 布 | 機 | 布 | 機 |
| | 小 | 機 | 小 | 一 |
| | 腰 | 機 | 腰 | 一 |
| | 戀 | 書 | （ナシ） | |
| | 艶 | 書 | | |
| 「衣期」 | 布 | | （ナシ） | |
| | 刺 | 花 | 刺 | 花 |
| | 楂 | 花 | 楂 | 一 |
| | 刺 | 文 | 刺 | 文 |
| | 繍 | 文 | 繍 | 一 |
| 「飲食」 | 温 | 湯 | 温 | 湯 |
| | 慢 | 火 | 慢 | 火 |
| | 緩 | 火 | 緩 | 一 |
| | 文 | 火 | 文 | 一 |
| | 糠 | | 糠 | |
| 「人事」 | 奸 | 蘭 | 奸 | 蘭 |
| | 揩 | 抹 | 揩 | 抹 |
| | 揩 | 浄 | 一 | 浄 |
| | 女 | 工 | 女 | 工 |
| | 婦 | 工 | 婦 | 一 |
| | 鍼 | 線 | 鍼 | 線 |
| | 縫 | | 縫 | |

『五方通語』　　『雑字類編』
縫合　　縫合
抄書　　抄書本
（抄書本は「文書」の項目に入っている）
抄書　　（ナシ）

なお，『五方通語』には「言語」の部があるが，『類字雑編』には存在しないので，その項目は省略することにした。

前述のごとく，この五ケ国語対照字典の成立に関しては，『雑字類編』の影響があったことは明白であるが，その他，どのような書物がその成立に関与していたのだろうか。

筆者は，前章のときと同様，村上英俊が書籍を購入する場合，その大部分を松代藩を通して購入していた事実に着目し，松代藩旧蔵書，ならびに，松代文庫所蔵本の中から関連のある書を選び出し，検討した。




（『蘭羅辞書』の扉，松代文庫所蔵）

その結果，『三語便覧』と同じく，ある種のオランダ出版の辞書が，その成立に密接に関与していたことが看取された。

次に掲出した3冊がその中心となったものと推測されるが，その他にも若干の辞書の影響が認められる(2)。

1) Marin. P.
Groot Nederduitsch en Fransch woordenboek. 1132p. (26 x 20cm). 1728.
2) Sewel. W.
Groot Woordenboek der Nederduytsche en Engelsche Taalen. (17 x 21cm). 1708.
3) Frieseman. H.
Nieuw nederduitsch-latijusch woordenboek. (11 x 17.3cm). 1810.

## 2．オランダ辞書との関連

さて，具体的な内容の検討に入るわけであるが，紙数の都合上，すべての用例について報告をすることは不可能なことである。そこで便宜上，各部門についてそれぞれ一語づつ取出し，調らべることにする（イタリックの個所は筆者が付したもの）。

(1)　伊之部「天文」（雷，雷公）
tonnerre 仏/thunder 英/donder 蘭/tonitru 羅
〔易経辞〕動萬物者莫疾乎雷
〔逸雅〕雷，碌也。如轉物有所碌碌之声也。震，戰也。所擊輒破若攻戰之也。又曰辟歴。辟，折也。所歴皆破折也。

(a) 蘭仏辞書 *donder.* m. ··· *Tonnerre.* m. Foudre. f. p. I–207

(b) 蘭英辞書 Donder (M), *Thunder* p. 92

(c) 蘭羅辞書 Donder, m. *tonitru,* u. n. p. 156

(2) 呂之部「地理」（平地）

plaine / plain / vlakte / camporum aequon

(a) *Vlakte.* f. Vlak veld, vlak land, *Plaine.* platte campagne, campagne, rase, f. p. II–489

(b) Vlakte (F), a *Plain,* level. p. 586

(c) Vlak, ··· vlak veld is *camporum aequor,* ··· p. 1298

(3) 波之部「時令」（春夜・春宵）

nuit de printemps / nicht of spring / lente nacht / nox de venus

(a) *lente.* f. voorjaar. *Printems.* p. II–19 *nacht* of nagt. Tyd tuffchen Zonnen onder-en opgang. *Nuit.* f. p. II–91

(b) Nacht (C), *Night.* p. 288 Lente (F), the *Spring,* Spring-time p. 244

(c) Nacht, m. *nox,* noctis, f. p. 615 Lente, v. ver, veris, n. tempus vernum. Van de lente, *vernus,* ··· p. 502

(4) 仁之部「宮室」（楼梯）

escalier / stairs / trap / gressus（漢説略）

(a) trap om op en af te klimmen. m. Marche. montée. f. Degré. m. ··· *Trap,* al de trappen famen. Degré, *escalier.* m. p. II–407

(b) Traf (C), *Stairs,* Stair-case p. 495

(c) Trap, m. dienende om ergens op te klimmen, *gressus,* us, m. ···. p. 1120

(5) 保之部「人品」（本草家）

botaniste / herbaliste / kruidkenner / intelligens herbarum

(a) *kruid-kenner.* Een die den aart en kragten der kruiden kend. Herboriste, ··· celui qui connaît la nature et les vertus des plantes, des simples. p. I–517

(b) Kruydkenner (M), a *Herbalist* p. 230

(c) Kruid, ··· Kruidkenner, *intelligens herbarum,* rei herbariae peritus. p. 471

(6) 利之部「家倫」（両親）

parens / parens/ ouders / parentes

(a) *ouders.* Vader en Moeder ten opzigte der kinderen. Père et Mère, par rapport aux enfans. p. II–197

(b) Ouders (M), *Parents.* p. 367

(c) Ouders, m. *parents,* um, genitores, um, m. plur. p. 799

(7) 知之部「宮職」（天使。勅使。制使。）

ambassadeur / ambassador / afgezant / legatus.

(a) *afgezant.* Gezant, uitgezondene Staats-bediende. Envoyé, *Ambassadeur.* p. I–30
(b) Afgezant (M), *Ambassador.* p. 18
(c) Afgezant, m. *legatus,* i, m. p. 30

(8) 奴之部「身体」(板歯)
dent de devant / foreteeth / voortand / dens primus.

Marin の蘭仏辞書には該当する単語が見当らない。ちなみに Agron の蘭仏辞書を用いてみると以下の通りとなる。
(a) *Voortand,* m. *dent de devant,* f. p. 1042
(b) Voortanden (M), the *Fore-teeth.* p. 602
(c) Voortand, m. *dens primus,* dens anterior, dens incisor, dens gelasinas. p. 1328

(9) 遠之部「神仏」(鬼)
diable / devil / duviel / diabolus.
(a) *duivel.* m. Booze geeft, kwaaden Engel. *Diable,* Démon. p. I–231
(b) Duyvel (M), the *Devil.* p. 104
(c) Duivel, m. *diabolus,* i, m. daemon, onis, m. p. 181

(10) 辺之部「器用」(軍船。兵船。陣船。戦船)
vaisseau de guerre / man of war / Oorloogs-schip / classis bellica. (漢説略)
(a) oorlogs, ... Een *Oorlogschip* van de eerfte, tweede rang. Un *vaisseau de Guerre* du premier, du second rang. p. II–172
(b) Oorlogschip (N), a *Man of war.* p. 351
(c) Oorlog, ... Oorlogsvloot, *classis bellica.* p. 761

(11) 伊之部「衣服」(絲)
cordons / thread / draad / filum. (漢説略。)
(a) *draad.* Fil. m. p. I–219

(英俊が，何故にフランス語の fil という単語を使用せず，cordons を配列したかの根拠としては，現在のところ不明である。しかし，この事例は，英俊が Marin および Agron の他に，ときには他の辞典をも参照していたことを表わしていると言えよう。何故なら，Agron の蘭仏辞書でも，やはりフランス語は fil と記されているからである。
Draad, m. fil, filet, m. p. 158 (アゴロン)
(b) Draad (M), a *Thread.* p. 97
(c) Draad, m. *filum,* i, n. p. 171

(12) 利之部「飲糧」(糧食)
provision / provisions / voorraad / copia.
(a) *voorraad.* m. Verzameling van eetwaaren, & c. Magasin. m. *Provision.* f. p. II–505
(b) Voorraad (C), Store, *Provision,* stock. p. 560
(c) Voorraad, m. *copia,* ... ae, f. abundantia, ae, f, affluentia, ae, f .... p. 1325

(13) 遠之部「文書」(赦書)

passeport /pass / vrijbrief / immunitalem dantes.

(a) *vrybrief.* m. Paspoort in Onduitsch. Un *passe-port,* sauf conduit. p. II–516

(b) Vrybrief (M), a *Pass,* pasport. p. 608

(c) Vrijbrief, m. literae libertatem dantes, ook *immunitatem dantes,* ook diploma, atis, n. p. 1338

(14) 遠之部「銭穀」(陸運傭銭)

voiture / money for carriage / voerloon / vectura.

(a) 用例(8)と同様，該当する単語が見当らないが，参考までに Agron 辞書を記してみると，次の通りである。

*Voerloon,* o. *voiture;* f., port, chariage, charroi, transport, m. p. 1029

(b) Voerloon (N), *Money for carriage,* carriers wages. p. 591

(c) Voeren, ... Voering, v. vectio, onis, f. *vectura,* ae, f. ....p. 1308

(15) 保之部「采色」(大紅)

rouge grand / carnation colour / hoog rood / ruber celcus

(a) *hoog.* Adj. Verheven. Haut, élevé. p. I–411 *rood.* Adj. Dat de koleur van 't vuur of 't bloed heeft. *Rouge.* p. 273

(英俊が「大」を文字通り直訳して，grand にしたものと思われる。)

(b) Hoog rood, *Carnation-colour.* p. 412

(c) Rood, bijv. n. en bijw. *ruber,* a. m.; p. 918 Hoog, bijv. n. en bijw. *celsus,* a, m.; p. 330

(16) 波之部「人事」(法制。大禁。厲禁。成憲)

loi / law / wet / legem.

(a) *wet.* f. Gefchreeve vaftftelling of voorfchrift. *Loi.* f. p. II–550

(b) Wet (F), a *Law.* p. 633

(c) Wet, v. regel, voorfchrift, pracscriptum, i, n. lex, legis f. Eene wet geven, *legem* dare, ....p. 1336~p. 1337

(17) 仁之部「動物」(雞)

coq /cock / haan / gallus

(a) *haan.* m. Bekende huis-vogel. *Coq.* m. p. I–358

(b) Haan (M), a *Cock.* p. 163

(c) Haan, m. *gallus,* i, m. p. 281

(18) 知之部「植物」(茶茗)

arbre qui porte le the / tea tree / thee boom / thea.

(a) theeboom ... *The-boom,* boompje daar de thebladen van komen. Plante, arbrisseau qui porte les feuilles de Thé. p. II–394

(フランス語に arbre qui porte le thé が使用されたのか不明であるが，Agron によれば，arbre à thé [p. 863] とあるので，両辞書が混合されたものであるのか，現在のところ明らかではない。)

(b) *Thee* (F), *Tea.* p. 484　Boom (M), a *Tree*　p. 72

(c) Thee, Theeboom, *thea,* ae, f. p. 1091

(19) 奴之部「言語」(塗(スル))

graisser / to smear / smeeren / lino.

(a) *smeeren.* v. a. Beftryken met fmeer of andere vettigheid. *Graisser,* suiver, frotter. p. II–335

(b) Smeeren, to Grease, p. 447

(c) Smeren, b. w. zoo veel als beftrijken, *lino,* levi, litum, linere, adlinere, collinere, …. p. 1002

(英語に　to smear が配列されたのか不明。)

〔注〕

(1)　『雑字類編』(七巻二冊)は，柴野栗山著，柴野貞毅重修のものである。なお，その刊行年に関しては，「森岡健二氏は明和元年(1764)の板であろうとされた(『国語と国文学』昭和42年4月)。佐村八郎の「増訂『国書解題』・新潮社の『日本文学大辞典』・平凡社の『大辞典』はいずれも明和6年の刊行とし……」(鈴木博『蘭語訳撰』解題十五ページ，臨川書店)，と両説が存在するようである。

なお，『雑字類編』の門立ては，18部門に分けてあり，次のような門立てである。

天門(本文では「天文」)，地理，時令(本文では「時運」とも記されている)，宮室，人品，家倫，官職，身体，神仏，器用，衣服，飲食，文書，銭穀，采色，人事，動物，植物。

(2)　新資料(真田家文書・「政典」)によれば，この当時，松代藩における唯一の蘭仏辞書ということになるが，筆者が前稿(「村上英俊『五方通語』に関する一考察」，文学部論集第5巻第1号，創価大学文学部。P，P89～93)で指摘した，Agron辞書との関連もかなり深いものである。

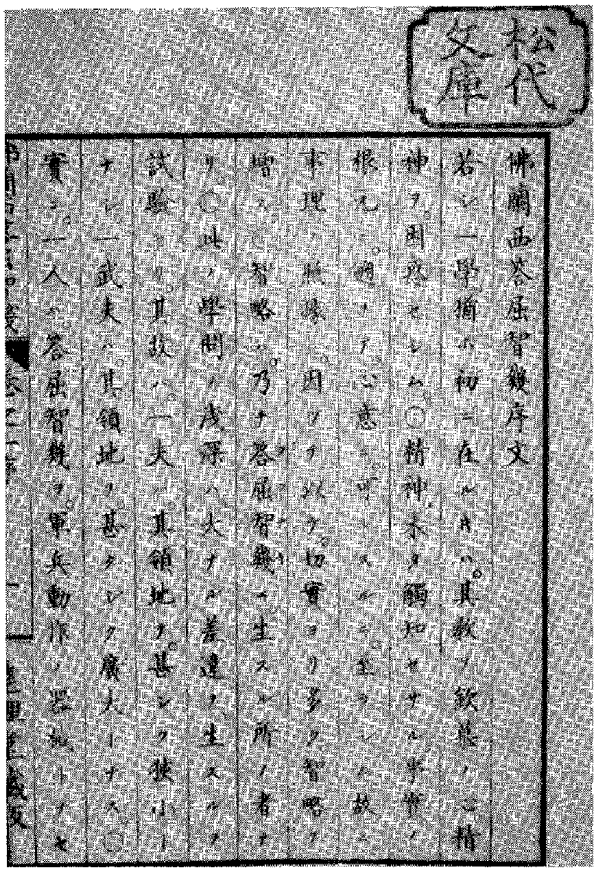
例えば，以下の事例もその間の事情を物語っていると言えよう。

本文の用例 (5) *Kruidkenner,* m. herboriste, *botaniste,* m. p. 378

本文の用例 (6) *Ouders,* m. meerv. vader en moeder, *parents,* m. pl., père et mère p. 630

本文の用例 (10) (a) *Oorlogsschip,* o. *vaisseau de guerre,* m. p. 597

# 第4章　『佛蘭西答屈智幾』の原典




（村上英俊『佛蘭西答屈智幾』の序文，松代文庫所蔵）

当時の洋学者には，時代の影響であると思われるが，西欧先進諸国の兵学書を翻訳する傾向が，すくなからず見られるが，英俊にもフランスの兵学書の翻訳があり，『佛蘭西答屈智幾』[1]がそれである。

『佛蘭西答屈智幾』が公刊されたのは，明治元年（1868）のことであるが，[2] 村上英俊がこの書を翻訳するにあたっては，幕府の役人であり，砲術家でもあった下曽根威遠（金三郎）[3]の示唆がその機縁となったものと考えられ，その間の事情は英俊の「雷酸金の説」の序文に窺うことが出来る。

「威遠下曽根先生告余日吾聞之子専研究佛蘭西学自往古佛蘭西者文武隆盛之国也而如我炮術亦本于佛蘭西尚子勤選訳有益于当世者公于世則少可有益于国学矣」

このような動機をもとに刊行されることになったこの書は，答屈智幾の名が示す如く，当時，流行の兵学書のひとつであるが，この翻訳書を兵学書としてばかり捉えず，黎明期における仏文和訳の一例として考察した場合，きわめて興味深いものであると言える。

同書に関しては，すでに先学によって簡単な紹介がなされているが，[4] 紹介者自身も述べているように，『佛蘭西答屈智幾』の原書を見ていなかったがために，たんなる推定だけに止まり，詳細な言及はみられなかったのである。

最近，松代文庫において，“Traité de Tactique” なる仏語書を読む機会に恵まれたが，実はこれが『佛蘭西答屈智幾』の原本であることが判明した。

そこで，この資料をもとにして，英俊の翻訳書の内容を詳細に検討し，報告することにする。なお，あわせて村上英俊のフランス語の実力，とくにその解釈力をも窺いたい。

## 1．『佛蘭西答屈智幾』の内容

本稿では，翻訳書および原書の内容，さらに，両者の関係について考察するが，まず翻訳書から述べることにする。

同書は，茶色表紙和装の3冊本で，縦26センチメートル，横18センチメートル，各冊の題簽には，「佛蘭西答屈智幾1（ 2・3 ）」と墨書されており，紙数は巻之1が序文24丁，目録1丁，本文22丁からなっている。巻之2は本文のみで33丁，巻之3も同じく39丁である。見返しは，巻之

1だけが灰色で，慶応3年稟准，村上英俊訳，達理堂蔵とあるが，巻之2および巻之3は，いずれも白紙で何も記されていない。

さて，この本の内容であるが，通覧してみると，まず序文の長いのに気づく。まさに，全体の5分1にも相当する紙数をこれにさいている。しかし，これは後述のように，そこに記された内容からは勿論のこと，漢文書き下し体[5]の文章からしても，英俊によって記述されたものではなく，訳文であることは明らかである。

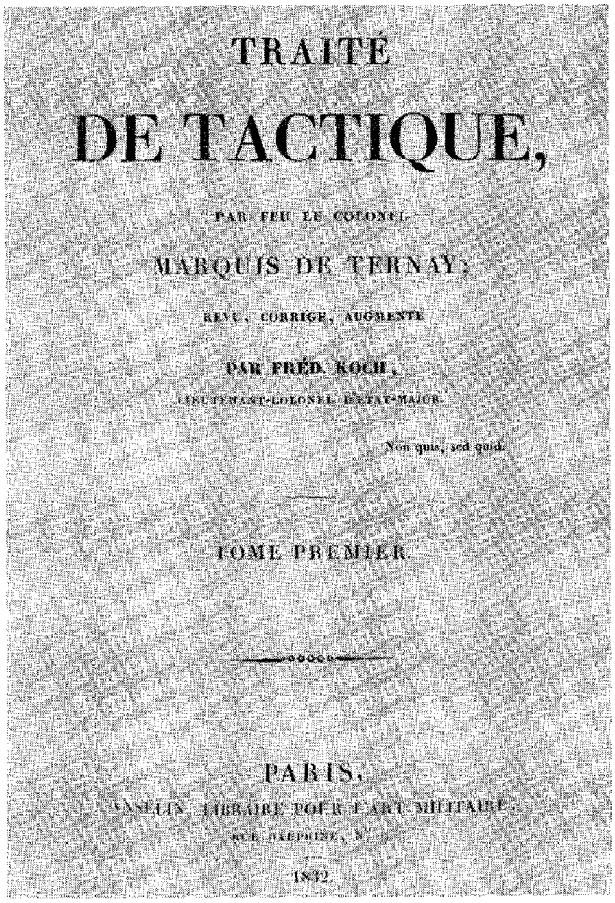
英俊は目録において，全巻の構成を示すものとして，いくつかの項目を掲げているが，それは次の通りである。

（巻之1）
（a）序文
（b）前文
（c）敵ノ弾丸，至ラサル所ヲ，為ス行軍
（d）常行軍
（e）急行軍
（f）迅行軍
（巻之2）
（g）諸軍隊，敵近キ所ヲ為ス，進行ノ論
（h）攻撃行軍ヲ為スコト
（i）前面行軍ノ作業
（巻之3）
（j）側面行軍ノ法
（k）前面ト側面ト，変化スル，行軍ヲ開クコト
（l）軍隊ノ一部，側面ヲ進行スル際ニ，他隊ハ前面ヲ進行スル，行軍ヲ開クコト
（アルファベットは筆者が付したもの）

本書は，前述したように3巻から構成されているが，各巻がそれぞれ独立しているわけではなく，訳書を便宜上，巻之1，巻之2および巻之3に分類したにすぎない。そのことは全巻を通して，順を追って110の章から構成されていることからも明らかである。なお，見出しには「行軍篇」という文字が見られるが，その後はどこにも見出しを認めることが出来ないので，この本は原書の「行軍篇」だけを翻訳したものであろう，と推定されるのである。

ところで，110章の中の多くは[6]，その文頭に項目名が置かれているのであるが，なかには，文頭および文中の両方に項目名が付されていたり，さらには，項目名がまったく見られないのもあって，必ずしも首尾一貫していない。それらの用例について記せば，例えば次のようなものである。

(1) 項目名が文頭に置かれているもの
第5章：衆多ノ縦隊，行軍ヲ為ス要務
第36章：攻撃行軍四類ノ差別
第103章：軍隊異ナル方位ニ，進行スル両隊ニ，分カル機会
(2) 項目が文中に置かれているもの


TRAITÉ
DE TACTIQUE,
PAR FEU LE COLONEL
MARQUIS DE TERNAY;
REVU, CORRIGÉ, AUGMENTÉ
PAR FRÉD. KOCH,
LIEUTENANT-COLONEL D'ÉTAT-MAJOR.
Non quis, sed quid.
TOME PREMIER.
PARIS,
ANSELIN, LIBRAIRE POUR L'ART MILITAIRE,
1832.

("Traité de Tactique" の扉，松代文庫所蔵)

第36章～第37章： (h) (6丁ウ～9丁オ)
第38章～第65章： (i) (9丁ウ～33丁オ)
(巻之3)
第66章～第95章： (j) (1丁オ～26丁ウ)
第96章～第100章：(k) (27丁オ～30丁オ)
第101章～第110章：(l) (30丁オ～39丁ウ)

第31章 ：攻撃行軍ト戦地ヲ取ルトノ行軍ノ差別
第78章 ：側面進行ヲ開ク法則

(3) 項目名が文頭および文中に置かれているもの
第9章 ：広狭ノ頓舎ノ利害(文頭)，諸軍隊ノ為ノ行道ノ撰 (文中)

(4) 項目名が置かれないもの
第15章，第16章，第17章

さらに，原書と対比する必要上，『佛蘭西答屈智幾』の本文の構成内容を，ここに整理しておくことにする。その概略は，次の通りである。

(巻之1)
第1章～第2章： (b) (1丁ウ～3丁オ)
第3章 ： (c) (3丁オ )
第4章～第18章： (d) (3丁ウ～15丁ウ)
第19章～第26章： (e) (16丁オ～20丁オ)
第27章～第29章： (f) (20丁オ～22丁ウ)
(巻之2)
第30章～第35章： (g) (1丁オ～6丁ウ)

## 2. "Traité de Tactique" の構成

"Traité de Tactique" は，Charles-Gabriel d'Arsac, marquis de Ternay (1771～1813) が記述した手書きの原稿を，1832年，フランスの陸軍大学教官（陸軍中佐）であった，Fréd Koch が原作者の母親に懇望されて，その原稿を増補，修正し改編したのち，パリの Anselin (軍事書専門出版社) から刊行したものである。

この本は洋装本で，縦19センチメートル，横14センチメートルの大きさであるが，背および表紙にはまったく文字が刷られていない。前付には，まず <Notice biographique sur l'auteur> とあり，12ページの紙数をさいて，原作者の略伝をのせている。さらに，刊行者の前文 <Préface de l'éditeur> を8ページ， <Introduction> 23ページ，本文699ページ，<Table des matières> 3ページ <Errata du premier volume> 1ページ，すなわち合計746 ページからなるかなり部厚い本である。扉の文字を示すと，次の通りである。

「Jusqu'ici M. de Terney a adopté l'ordre suivi par tous ses devanciers, mais nous arrivons au point où sa méthode s'écarte entièrement de la leur」(int, p. 16)

という文章が翻訳書では，(「テルナイ君」ハ，諸先哲ノ，施シタル法ニ従ヘリ，然レドモ，我輩ハ，其法全ク先哲ヨリ，相ヒ隔絶スルト，目撃スルニ至ル——序文，16丁裏）と訳出されている。これによると原作者の MARQUIS DE TERNAY[7] が記したものとは考えられないので，これは，やはり刊行者の FRÉD KOCH の手によって書かれたことは明らかである。

③ 「章」と「番号」の関係

「章」と「番号」との問題に関しては，それぞれの内容の概略を，第2章および第3章において述べ，すでに推測をしたように，原書に付されている各番号は，そのまゝ翻訳書の中において各章——すなわち番号〈1〉は第1章——となったものである。さらに原書において番号に「小見出し」が置かれているものは，その「小見出し」が和訳され『佛蘭西答智幾』において，章の「項目名」となっている。

それ故，原書中に「小見出し」の見られないものは翻訳書の中においても，「項目名」が認められないということになる。[8]

④ 村上英俊の誤記について

a. 第22章は，第22年と記されているが，これは前後の文章の関係から考えて，「章」とすべきところを，「年」と誤って記述されたものか，あるいは印刷時のミスと思われる

b. 翻訳書の第79章の項目名には，その「第1則」と付されてあり，次の第80章ではその「第2則」，さらに第81章がその「第3則」となっているが，不思議なことに第82章には「第4則」という文字が見られない。次の第83章にはその「第5則」とあるので，これは英俊の不注意によるものであると推測される。事実，原書中には番号〈82〉(P.P 56～57) にその「第4則」を示す〈。4〉があるところからしても，当然，第82章の項目名には「第4則」と付されるべきものであろう。

c. この翻訳書には，第96章という「章」が置かれていないが，原書中には番号の〈96〉(P.P 68～69) が存在するし，さらには原文とその訳文と対比してみるとまさしく一致するので，これは訳者の英俊が「第96章」という文字を書き忘れたのであろう，と考えられる。

d. 第109章も第96章と同様，翻訳書中にその「章」が認められないものであるが，原文を調べてみると番号の〈109〉(P.P 77～78) が見られるので，これも前節の(C)と同様に英俊の書き落したものであろう。それでは第109章とはいったい翻訳書の中のどの部分に該当するものであろうか。この問題に関しては，原文から推察して「巻の3」の38丁表——すなわち項目名となっている「隊間ノ行動ノ距離——から始まって39丁表までが第109章となるところであろう，と考えられる。

## 4. 村上英俊の解釈力

さて，ここで村上英俊のフランス語の実力について触れることになるが，『佛蘭西答屈智幾』は英俊の語学力——とくに解釈力に関して——を知る上で最も適当な手掛りになると思われる。そこで，原典の "Traité de Tactique" と翻訳書を対比させることによって，彼のフランス語に関す

de l'ennemi couvrant le mouvement des autres troupes
Livre II. Des manœuvres
Avant-Propos
Chap. 1er. Des ordres de bataille en général
Art. I. Des moyens de conserver le liaison des différentes parties de l'ordre de bataille
Art. II. De la disposition des différentes armes
§ I. De la disposition de l'infanterie
§ II. De la disposition de la cavalerie
§ III. De la disposition de l'artillerie
Art. III. De la combinaison des différentes armes
§ I. De la combinaison de l'artillerie avec les troupes
§ II. De la combinaison de l'infanterie avec la cavalerie
Chap. II. Importance du talent de bien choisir les points d'attaque et possibilité de donner des principes relativement à cet objet
Art. I. Du choix du point d'attaque
§ I. Du choix du point d'attaque, par rapport à la disposition générale de l'armée attaquante
§ II. Du choix des points d'attaque relativement à la position générale de l'ennemi
§ III. Du choix des points d'attaque, la position de l'ennemi étant considérée en elle-même
Art. II. Principes relatifs à toutes les attaques
Chap. III De la formation des ordres de bataille offensifs à la suite des marches de front
Art. I. Des attaques parallèles
Art. II. Des attaques d'une seule aile
§ I. Des attaques d'une seule aile dans lesquelles toutes les colonnes se déploient en même temps
§ II. Des attaques d'une seule aile, dans lesquelles les colonnes se déploient successivement
Art. III. Des attaques des deux ailes
Art. IV. Des attaques au centre
§ I. Des attaques au centre dans lesquelles toutes les colonnes se déploient en même temps
§ II. Des attaques au centre dans lesquelles les colonnes se déploient succesivement
Art. V. Des attaques de flanc
Art. VI. Des attaques de revers
Art. VII. De le formation des disposition offensives à la suite des marches de front dans les circonstances extraordinaires
§ I. De le formation des dispositions offensives sur le front de la marche quand on a été obligé d'altérer l'ordre de marche
§ II. Des circonstances où on est obligé de former une disposition offensive sur le flanc d'une armée qui exécute une marche de front
§ III. Des circonstances où une armée qui exécute une marche de front est obligée de

former une disposition offensive sur son flanc, l'ennemi pouvant attaquer le front et le flanc de la marche

§ IV. Des circonstances dans lesquelles une armée qui exécute une marche de front est obligée de fromer une disposition offensive sur le flanc de la marche, l'ennemi ne pouvant qui attaquer ce flanc

§ V. De la formation des disposition offensives sur les derrières d'une armée qui exécute une marche rétrograde, sur les derrières d'une armée qui exécute une marche de front, ou sur le front d'une armée qui exécute une marche rétrograde

## 3．両者の比較

村上英俊の『佛蘭西答屈智幾』の分量に較べて，原書の "Traité de Tactique" のそれが，あまりにも多く両者の間に，まず分量の上で顕著な相違が見られる。翻訳書が原書の抄訳，あるいは部分訳であることは，このような量的な相違からも明白であるが，それでは原書のどこの部分を採って『佛蘭西答屈智幾』としたものであろうか。その問題を究明するためには，翻訳書と原書を対比させて順次調べていくことが必要であるが，ここではそのうちで最っとも問題となる点のみ考察するに止めておく。

### ① 翻訳の範囲

結論から先に言えば，『佛蘭西答屈智幾』とは，原書の前付にある <Introduction> の全訳，および本文中（699ページ）の1ページから78ページまで――「番号」でいえば，〈1〉から〈110〉までに相当する――を訳述したものであり，その部分を要約して記せば，以下の通りとなる。

| | | |
|---|---|---|
| Livre 1er. | | Des marches |
| Chap. 1er. | = | （第1章～第3章） |
| Section I. | = | （第4章～第18章） |
| Section II. | = | （第19 章～第26 章） |
| Section III. | = | （第27 章～第29 章） |
| Chap. II. | = | （第30 章～第31 章） |
| Section I. | = | （第32 章～第37 章） |
| Art. I. | = | （第38 章～第65 章） |
| Art. II. | = | （第66 章～第95 章） |
| Art. III. | = | （第96 章～第100章） |
| Art. IV. | = | （第101章～第110章） |

### ② 翻訳書の序文について

前述したように，『佛蘭西答屈智幾』の序文は，訳者・村上英俊の記述によるものではなく，たんに原書の <Introduction> を翻訳したものである。さらに，<Introduction> の

TRAITÉ DE TACTIQUE, / par feu le colonel / MARQUIS DE TERNAY; / revu, corrigé, augmenté / PAR FRÉD KOCH, / lieutenant-colonel d'état-major. // TOME PREMIER. // PARIS, / ANSELIA, LIBRAIRE POUR L'ART MILITAIRE, / rue dauphine, No.9. // 1832.

この仏語書の内容について触れると，まず注目すべきことは，699 ページからなる本文の中に，〈1〉から〈1091〉までの番号が順を追って配置されているということである。この番号は，章および節などには，まったく関係なく付されているものであるが，各番号は，それぞれひとつのまとまった文章を形成している。なお，たいていの場合，文章が記されているその左右の余白（そのうちのいずれか一方）に，本文の要約を示す「小見出し」が付されて，本文の理解を助けているが，この「小見出し」は文章の文頭に置かれているもの，または文頭と文中との両方に置かれているもの，さらには，まったく「小見出し」が見られないものなどがあり，それは，まさに翻訳書の項目名の場合と一致している。

さて，この原書の構成内容であるが，翻訳書を考える上で必要と思われるので，少し長くはなるが，その目次を以下に掲出しておくことにする。


Livre 1er. Des marches
Avant-Propos
Chap. 1er. Des marches qui s'exécutent hors de portée de l'ennemi
Section I. Des marches ordinaires
Section II. Des marches accélérées
Section III. Des marches en poste
Chap. II. Des marches dans lesquelles tout l'armée se trouve à portée de l'ennemi
Section I. De l'ouverture des marches manœuvres
Art. I. Ouverture des marches de front
Art. II. Ouverture des marches de flanc
Art. III. Ouverture des marches qui sont alternativement de front et de flanc
Art. IV. Ouverture des marches dans lesquelles une partie de l'armée marche par son flanc, tandis que le reste marche de front
Section II. De l'exécution de différentes espèces de marches
Art. I. De le disposition des troupes dans les marches en avant
Art. II. De l'exécution des marches de flanc
Art. III. De l'exécution des marches rétrogrades
Art. IV. De l'exécution des marches où l'armée passe alternativement de la marche de front à la marche de flanc
Art. V. De l'exécution des marches dans lesquelles une partie de l'armée se meut par son flanc, tandis que le reste marche de front
Chap. III. Des marches de position
Section I. Des marches de position en avant
Section II. Des marches de postition de flanc
Section III. Des marches de position rétrogrades
Chap. IV. Des marches qui s'exécutent une partie seulement de l'armée se trouvant à portée

る解釈力を窺いたいと思う。

1. Si on classe les connaissances militaires relativement à leur degré d'importance, les marches sont incontestablement la partie la plus essentielle du grand art de la guerre. C'est en effect en marchant qu'on commence une guerre offensive et qu'on la transporte ensuite dans les lieux où la faiblesse de l'ennemi fait espérer des succès. Il faut absolument marcher pour former un ordre de bataille offensif, pour profiter d'une victoire, ou, enfin, pour se retirer à la suite d'une défaite.

La combinaison des marches n'est pas une partie moins essentielle du système défensif: combien n'a-t-on pas vu de plans d'attaque complètement déjoués, parce qu'un ennemi, réduit à la défensive, exécuta une diversion puissante, prévint avant leur réunion les différens corps destinés à l'attaquer, ou bien agit avec succès contre leurs communications!

Il n'est d'ailleurs pas de guerre où l'on puisse se dispenser d'exécuter des marches assez fréquentes, car on trouve très-peu de camps dont il soit impossible de gagner les flancs ou les derrières; et une frontière n'a jamais été défendue avec succès, si l'on ne peut se porter rapidement d'une position défensive à une autre, rassembler beaucoup de troupes sur un point qui paraît dégarni, se retirer de position en position, ou, enfin, suivre et tourner soi-même un ennemi qui tenterait d'en faire autant. A quoi servirait la victoire, si, après l'avoir obtenue, on se contentait de conserver son champ de bataille? L'ennemi, qui verrait que les suites d'une défaite se réduisent à la perte de quelques milliers d'hommes, renouvellerait sûrement ses attaques d'un autre côté et pourrait bien finir par obtenir du succès. (p. 1–p. 2)

(若シ軍政ノ大事ニ，管スル兵学ノ類ヲ，差別スルトキハ，行軍ハ，軍術ノ，最モ著シキ類ニシテ，須臾モ，離スヘカラサル者ナリ。実ニ進行スルニ於テハ，攻撃ヲ始メ，而メ後ニ，弱敵勝利ヲ，授クルノ地ニ，移リ進ムナリ。実ニ攻撃陳列ヲ，斎整スル為ニ，進行スヘシ，勝利ヲ速ニスル為ニ，進行スヘシ，終ニ続テ退軍ヲ，為サシムル為ニ，進行スヘシ，行軍ノ斎整ハ，少シモ防禦法ノ部ニ，管セス，攻撃ノ策略，十分ニ画餅トナリシコトヲ，幾可モ，人之ヲ見ス，何トナレハ，防禦ニ備フル敵ハ，攻撃スヘシト決シタル諸隊，会合ノ前ニ，諸防禦法ヲ為シテ，其集会ヲ，妨クルカ故ナリ。

行軍ヲ十分ニ，数ト遂ケ得ル，戦争ハ，有ルコト少ナシ，何トナレハ，側面或ハ後軍ヲ，越ヘ行クコト容易ナル，戦地ヲ見ルコト，稀ナルカ故ナリ，而メ或ル地ニ，防禦ノ地位ヲ，占メ得ス，守兵アラサル処ニ，衆多ノ軍兵ヲ，集メ得ス，地位ヨリ，地位ニ，相ヒ退キ得ス，或ハ戦ヲ挑メル敵ヲ，追ヒ退ケ得ス，マタ廻リ得サルトキハ，常ニ軍利ヲ得テ，堺界ヲ，防守スル能ハス。若シ戦勝ヲ得タル後ニ，其戦場ヲ，保ツコトニテ足レリトスルトキハ，何ノ為ニ，戦勝ハ，其用ヲ為スカ，敵退軍ノ後ニ，一二千人ノ失ヒヲ，点検スルトキハ，新タニ他道ヨリ，襲撃ヲ為スヘシ，而メ軍利ヲ得ルニ由テ，戦ヲ止ムヘシ。）（第一章）

## 5. 結　語

以上のように，村上英俊の『佛蘭西屈智幾』は，"Traité de Tactique" の中の <Introduction>，および本文の1ページから78ページまでを訳したものであるが，その訳文について言えば，フランス語の意味を伝えるのに重点をおいている関係からか，日本文としてはやや生硬な感じのする文章であると言えよう。

しかしながら，『佛蘭西屈智幾』の訳文が直訳体のものであるとはいえ，明治元年の当時としては――本格的な仏和辞典といえば，英俊の『佛語明要』ぐらいしかなかったことを考えれば――訳語の問題ひとつにしても大変な努力が払われたものであったろう，と想像されるところである。

それ故，村上英俊が，日本仏学史の黎明期においてこのような翻訳書を公刊したことは，大きな意義があり，またその時代としてはすぐれた価値をもつものであったと認めるべきではあるまいか。

〔注〕

(1) 本書は現存するものがきわめて少ないが，本稿を草するにあたっては，松代文庫本（図書番号，番外の4）を参照した。

(2) 見返しには，慶応3年稟准とあるが，出版されたのは明治になってからのことと考えられる。それは，奥附に東京府と記されていることからも，そのことが推定される。

(3) 名は信敦，号は桂園。幕末の砲術家で，海防に関心をもっていた。安政元年（1854），講武所の砲術師範。その後，文久3年（1863），歩兵奉行，さらに慶応2年（1866）には陸軍所の修行人教授方頭取となっている。

(4) 瀧田貞治『佛学始祖・村上英俊』（巌松堂書店古典部），中巻の28丁裏～31丁表。

(5) 「オランダ語から翻訳した場合，それが日本語の文章として整った形をとろうとすると，それは，漢文書き下し体にするのが一般であった」　松村明『洋学資料と近代日本語の研究』，（東京堂出版，P. 21）。
　なお，江戸期から明治期へかけての，欧文の翻訳書における文章形式については，古田東朔氏の「江戸期における翻訳書の文章形式」（緒方富雄編『蘭学と日本文化』，東京大学出版会，P. P. 141～148を参照。

(6) 各章は，半丁ないしは1丁からなっているのが大部分であるが，第64章（巻之2，24丁裏～33丁表），および，第95章（巻之3，19丁表～26丁裏）のような例外もある。

(7) 村上英俊は，原作者の Ternay を「テルナイ」と発音しているが，これは，やはり「テルネー」とすべきであろう。

(8) 例外として，章および節の「見出し」が，翻訳書の項目名として使用されているものもある。第3章，第32章などがその例である。

# 第5章　松代藩との関係

## 1.　仏語書購入の経路

前述したように，村上英俊のフランス語学習の経路，ならびに，英俊が公刊した仏語関係の書物に関しては，ある程度明らかにされている。

ところが，英俊がどのようなフランス語の書籍を，いかなる経路をへて購入していたのかという問題については，まったく触れられていなかった。

最近，その問題に触れたきわめて重要な資料を，長野市松代町在住の山崎元氏宅において発見することが出来た。英俊の直筆による書簡（元治2年～慶応元年），および，英俊あての覚書，領収書（元治元年～慶応元年）などがそれである。この中には彼の購入したフランス語書のリストも含まれており，日本仏学史研究の上ではなはだ興味深いものと言えよう。

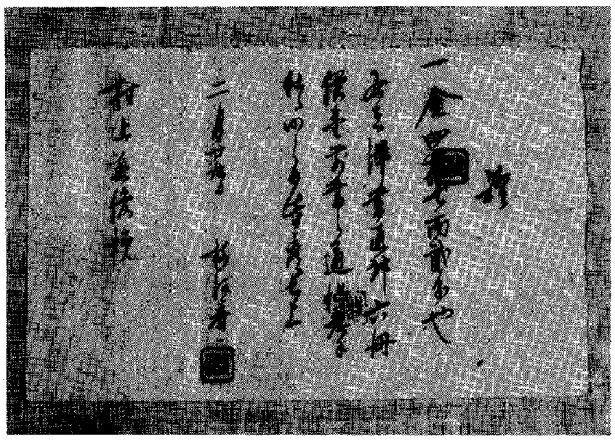
そこで，この新資料をもとにして，村上英俊のフランス語書購入の経路を述べてみることにする。

さて，記述の都合上，英俊がフランス語書購入にさいして，誰れに依頼し，どこへ発注したかをまず最初に書かねばならないが，その問題に関しては，前述した英俊あての覚書によって明らかであり，そこには次のように記されている。

「　覚
金壱(ママ)円弐分
右洋書代価慥ニ落手
いたし候　　以上
九月十四日　　蠣崎　印

村上君　　」

「　覚
一金参両壱分
　　窮理書
　　一冊
右慥ニ受取申上候
　　己上
九月二(ママ)四日　　蠣崎多浪　㊞
　　村英俊様　　」



（柳河春三が村上英俊に送った領収證，山崎元氏所蔵）

「　覚
一金拾両也
右者西洋書籍料受取
申処実正也為念如此候
己上
子十二月廿六日　　塩田順菴[1]　」

「　覚
一金拾五両也　　風土記之代
右之通慥に落掌仕候
十二月廿八日　　黒田行次郎[2]　印

村上先生　　」

「　証
一金四拾七両弐分也
右者洋書通計六冊
価金前書之通慥落手
仕候依て如此御座候己上
二月廿九日　　柳河春三[3]　印

」

「　覚
一，　七拾四両弐分
　　外八両
　　洋書　八冊料
　メ銀八拾弐匁弐分
右者三郎よりの譲申候西洋
書籍代慥に受取申候　　以上
　　塩田三郎[4]内
　　池田隆平　印

村上英俊様　　」

「　覚
一金拾五両之佛書代

右之通慥受取申候　　以上
六月　　森山　㊞

村上様　　」

これ等の資料によって，当時，開成所に勤務していた村上英俊が，同僚であり，また同じ洋学者でもあった，柳河春三，黒田行次郎，およびその他の者――塩田三郎，同順庵，蠣崎多浪，森山某――を通してフランス語書を購入していた事実が判明した。

なお，書籍代金の支払いはいずれも英俊によってなされているが，とおてい一介の藩医である英俊にそれ程の経済力があったとは考えられない。はたして，この間の事情を物語る英俊自身の書簡が残されており，後援者であった松代藩との関連を裏付けている。

英俊が松代藩の山崎卓馬（生宣）[5]，大里忠之進にあてた書簡には，次のような文面が記されている。

「　覚
一金拾両也　　風土記
九冊
右之通慥ニ請取相渡シ
申候以上

覚
一，　七両也　　佛蘭字書
右之通慥ニ請取相渡シ申候
以上
二月廿四日
村上英俊　㊞

大里忠之進殿　　」

ところで，当時，村上英俊の地位は，最高学府であった開成所で仏学を教授していることからも明らかなように，仏学界の指導者的な立場にあった。さらに，上梓した数々の仏語書によっても，いわゆる世間的には名声を博していたと言えよう。あまつさえ，英俊が松代藩主と姻戚関係にあることを考慮に入れるならば，フランス語の書籍――たとえそれが高価なものであったとしても――の購入もかなり容易だったのではないかと考えられ勝ちであるが，実際は，かならずしもそうではなかったらしく，係の者への態度にもそのような形跡がみられる。

「　口上
愈近日之内御出立之由
さてさて御多用奉察候
然者惣金高百八十三両六分

に相成候間右え三両金
此者へ御使し被下残金
三百疋(6)は度々御手数を
相掛け候間何か御餞別差上
可申之処故御魚料として
呈上致度甚だ恐入候
得共略義之段者御用捨
可被下候　　以上
　三日
　　英俊

　　忠之進様　　」

さて，村上英俊が，信州松代藩の資金を用いて江戸の洋学者仲間などから購入していたフランス語書の明細は，以下の通りであるが，そこに記載されている書目――その中にはオランダ語書，英語の書物も含まれている――には歴史書，軍事書，辞書，法律書，および科学書，さらには風土記や紀行文なども見られ，すこぶるバラエティに富むものと言える。

このリストを通して，当時のフランス学者のおかれていた立場――あまり細かな専門にはとらわれず，時代が要求していた西洋文明の紹介者――などが窺えて面白い。なお，すでに指摘したところであるが，英俊の外国語の発音が不正確であることは，ここに書かれたカナ文字によっても明白であろう。

「　　覚
一，フランス
　　イストリー　　佛史二冊
　　代三拾弐両弐分

一，ナポレオンイストリー　　一冊
　　代金拾両

一，ダルチクレリー　　兵書四冊
　　代廿五両

一，タクチケー　　将略書一冊
　　代廿五両

一，フルステルリング　　築城書一冊
　　此書ハ大炮打方並攻守ノ要務ヲ記セル書
　　代廿両

一，ヂクチヲナレイ　　字書二冊
　　代廿五両

一，佛蘭対訳字書　二冊
代七両

一，フランス日本文典　一冊
代壱両弐分

一，ロイスデフランス　法律書一冊
代三両

一，トライト　条約書一冊
代三分（ママ）

一，ヒシケイ　窮理書一冊
代三両壱分

一，リセランド　人身窮理書四冊
代弐両弐分

一，航海風土記　九冊
代拾五両

一，セクレタイレ　一冊
代弐両

一，英佛対訳字書　一冊
代壱両壱分

一，アルペス山記　一冊
代拾両

右之通り御坐候
元治二丑年九月廿五日（ママ）[7]

村上英俊　㊞

大里忠之進　」

（真田家文書「政典」，松代文庫所蔵）

英俊の購入した書籍は，資金をだした松代藩の書庫に所蔵され，今日に致っている。すなわち松代文庫の洋書の一部がそれである。

## 2．洋書関係の資料

真田家文書「政典」は松代藩の祐筆によって記された公文書であるが，この中には文章の主題と直接関係があるものや，松代藩および幕府の情勢などを窺うものが記されており，はなはだ興味深いものと言える。

なお，その部分を「政典」から摘出して掲出してみると，以下の通りとなる。

安政三丙辰年十月七日

㊀　蕃書御所蔵御屈之事

七月十七日

此度蕃書調所御取建相成候間銘々所蔵之蕃書原書之分ハ書目取調西洋紀年何年之著述ニ而何術ヌハ何科之書与申義相認差出且右之内翻訳出来之分ハ一部宛早々可ニ差出一候尤伊勢守迄差出候様可レ被レ致候

右之趣向々迄可被ニ相達申一候

六月

此度世上通用之ため吹立被ニ仰付一候新規弐分判之義来ル廿八日より可レ致ニ通用一旨云々

六月

今度蕃書調所御取建ニ付御目見以上以下并惣領ニ男三男厄介ニ致る迄経書弁書又は講釈等出来候者は勝手次第同所迄罷越可レ被レ致ニ修業一候尤前以調所迄可レ上ニ申立一候且又後而ハ陪臣等も修業之為免義御差許可ニ相成一候得共此義ハ追而可ニ相達一候

右之通可ヒ相触候

六月

㊁　御用番様

別紙大御目付様御廻状写壱通差越申候御宜被成御取斗候　以上

七月二日　　岩崎玄蕃[8]

御用番様

猶々於ニ此表一御家中迄演説申陳蕃書翻訳等之義ハ御武具奉行迄相尋置候間申聞次第差越可申候以上

㊂　御用番様　　御当用

致ニ承知一候然処別紙玄蕃殿より申来候附而ハ其表ニ而御調之上被仰聞候義与存候尚別紙ニ而御承知御勘弁可レ被仰聞一候

九月十九日

蕃書御書上之義ニ付先頃申及御掛合中候義申存候此間中津田轉(9)才足申聞候御勘弁可レ被レ聞候以上

九月十三日　　左門(10)

御用番様

㊃ 助之進様(11)　　御当用

蕃書之義及ニ御掛合一候之処御書入被二仰聞一段致二承知一候何にも惣而此表其表共御有合丈之処為二御調一御申送リ可レ被レ下候別紙も別封に御坐候此表御蔵ニ有レ之分ハ差図仕為ニ取調差越申候差様御取調可レ被レ下候以上

九月廿七日　　左門

助之進様

㊄ 蕃書記年取調別帳相添申上

御武具方

御預蕃書記年取調申上候様被仰渡奉レ畏村上英俊等江承合取調候ノ処別帳二十三筆之通ニ御座候其餘十一筆北山安世方ニ御座候問記年穿鑿屈兼候ニ付申越候得共今以到来不レ仕候之間御在所表ニ而右同人江被ニ仰渡一御取調被二成下一候様仕度奉レ存候此段別帳相添申上候以上

九月

㊅

蕃書記年取調帳　　御武具方

居家必用書

一、ショメール

但千七百八十八年之板　　十六本

（下ケ札）

本文之内

十三本村上英俊拝借

三本北山安世方ニ有レ之

天地万物几学術芸法

一、ボイス

但千七百六十九年之板　　十本

アラユルコト書タル書ナリ

律令之書ナリ

一、ウエツトブーク

但千七百六十八年之板　　二本

学術総論之書

一、ホツケカテキスミユス　九本

但千七百九十四年之板

一、アメリカ本草書

但千七百五十六年之板

ビユルマンニユス著

イギリス語ヲオランダ語ニテ注シオランダ語ヲイギリス語ニテ注シタル書

一、イギリス詞書

但千七百八年之板　二本

セウエール著

オランダ語ニ而注シタル書

一、フランス詞書

但千七百二十八年之板　一本

マーリン著

天地萬物窮理書

一、マルチネット

但千七百七十八年之板　四本

フランス国之名家之分析術ナリ

一、ベルセリウス

但千八百二十九年之板　三本

航海測量家之詞書

一、ゼーマンスヲウールデンブーク

但千八百三十三年之板　一本

日本片カナヲ洋文ニシテ翻シサ之国語ヲ以テ対訳ス

一、日本イギリス対訳詞書

但千八百三十年之板　一本

メドヒユルスト著

フランス礼家之書

一、コンパグニー

但千八百二十九年之板　一本

度学書

一、メートキユンデ

但千八百二十四年之板　一本
スミッドト著

分折術
一、シケーキユンデ
但千七百八十六年之板　三本
カステレリン著

究理書
一、テコノロヂセワンデリンケン
但千八百二十一年之板　一本
グウテ著

樹芸法之書
一、トインウーヘニング
但千八百二十一年之板　一本
ミルレルス著

ラン語訳法之書
一、レッテルキユンデ
但千八百十五年之板　一本

解体書
一、ヲントシーチング
但千七百三十三年之板　一本
パルレーン著

ラテン語ヲオランダ語ニテ注シオランダ語ヲラテン語ニテ注シタル書
一、ラテン詞書
但千八百十年之板　一本
フリーセマン著

一、フランス文法書
但千八百二十五年之板　一本
ロモンド著

外科ノ療法書
一、ゲッセル
但千七百八十六年之板　三本

水準法ヲ記シタル書

一、ワーテルパスセン
但千八百二十八年之板　一本
ケルキウェーキ著

一、ボウキユンデ
但クレルク著　一本
トイヘネ訳記年不ニ相知一

右二十三筆当時江府御有合御座候

天地萬物芸法アラユルコトヲ載タル書
一、ニーウェンボイス　五本(12)

オランダ詞書
一、ウエーランドオールデンブック(13)
十一冊合本
六本

フランス国文法学ノ書ヲオランダニテ対訳セシ書ナリ
一、スフラーカキユンスト　壱本

右三筆昨年十月中北山安世拝借仕御在所表江持参仕候

オランダノ学問ノ学ビ方ノ書
一、ウエーラントスフラーカキユンスト(14)
壱本

究理書
一、ボイス　一本
航海測量法　八線表附ス

一、スチュールマンコンスト　壱本

オランダ訳書
一、イギリス文法書(15)　壱本

翻訳書
一、産科書　四本

ドイツ語ヲオランダ語ニテ注シオランダ語ヲドイツ語ニテ注シタル書

一、ドイツ詞書(16)　　貳本

一、ハエキワンス　　（写本）二本

人身之解部ヲ委ク書タル書

一、ヘカラールト解部術(17)二本

右ハ筆蟻川賢之助(18)拝借之内北山安世内々御在所表江持参仕候之分ニ御坐候

メ三十四筆

右之通坐候此段申上候以上

九月

㊐　蕃書著述記年御書上之義ニ付御内々申上

御武具方

蕃書記年御書上之義ハ世上ニ少く且当時専川之義差載候書ハ萬々一御用にも可レ相成一哉も難レ斗候付右様之類ハ御書上候バ御除に相成候方可レ然旨蕃書調所江出役之向村上英俊へ罷越候節極密心附呉候旨英俊申聞候間同人江承リ候処御預リ之内

一、フランス文法書

一、ホーキユンテ

一、ケスセル

一、ワーテルバスセン

右四筆にも可レ有御坐候哉之旨に御坐候間御内々御含迄ニ申上候以上

九月

㊇　助之進様　　御当川

蕃書御所蔵之分御書上之義先達従公義被ニ仰出一候付此表御武具奉行御預リ迄取調差出候様申渡置候処別紙之通申聞候右之内佐久間修理北山安世拝借之分ハ其表ニ而記年著述等之義御尋可レ被成候且御手許并其表御武具奉行等御預リ蕃書も可レ有レ之候間右ハ夫々御尋都而之御所蔵迄御書上下調之義其向江御申渡成丈早速可被仰聞候

一　村上英俊申聞候趣内々御武具奉行申立候間差越申候是又宣御勘弁可レ被レ仰聞候以上

九月廿七日　　玉川左門

赤沢助之進様

㊉　蕃書取調之義ニ付御答申上

御武具奉行

蕃書御書上御一條御書類御下ゲ御尋御坐候処江府同役取調申上之内北山安世佐久間修理拝借之分早速取調之上御答申上度候且此表御預蕃書も可レ有ニ御坐一候哉申御趣ニ御坐候得共当時一切

無二御坐一候唯今江府御蕃書之義ハ以前当方御預ニ御坐候所去ル嘉永四亥年中彼表江差送リ候様被仰渡其節不レ残引渡罷来候義御坐候御手許ニ被レ為二差置一候蕃書之義者其向ニ而取調被仰渡御義ニも可レ有二御坐一哉奉存候間御書類写取則返上仕候尚可レ然御勘弁被二成下一度奉レ存候此段申上候以上

十月五日

御武具奉行

㊥ 蕃書御書上之義付江府同役御内々申上候儀御尋付御内々申上

御武具奉行

御所蔵蕃書御書上可レ有二御座一ニ付村上英俊義江府同役江申聞候越ニ而当時専用云々書等者御書上之節御除相成方可レ然之趣御内々申上候所右ハ如何可レ有二御座一哉専ら蕃学仕候向者各何之原書ハ何方様御所蔵杯申義者兼而伝聞も仕且御買上之所も承及罷在誠ニ原書到而乏敷所別而舶来希之珎書等ハ尚更名渇望罷在候義御座候所自然も申立之通御除相成候上ニ而兼而承知之者有レ之右等申出候ハヾ僅之義乍らも公辺江被レ為レ対乍レ恐御請安からざる御儀之様奉存候且当時ニ至リ専ら蕃書御用ひニ相成候得共舶来乏敷御座候所未然ニ蕃書多分御所蔵御座候義ニ而右之御蔵書天下之御益ニも可ニ相成一事ニ寄公辺ニテ御借入御写取御用ひニも相成候節者乍レ恐別段之御規模ニ可レ有ニ御座一御義之様奉レ存候然上は是迄公辺御蔵書ハ不レ及ニ申上一今般之御趣意ニ御座候得バ蕃書追々御取集も可レ有二御座一奉存候間右之内自然も御拝借御願御座候節等も別而御都合可レ宣御義之様ニ奉レ存候

一、右御取調御書上之義申上候茂甚奉ニ恐入一候得共書名假字并誤訳等無ニ御座一候様取調之義其向江被ニ仰渡一被ニ成下一度哉ニ奉存候右ハ御下ゲ御書類之内江府取調書之義者先年此表より差送候節取調遺し有之候調書之侭之様被レ存候認方も御座候処右者凡之調ニ御坐候而如何之様被レ存候義御座候得共不案内之義付急度申上兼候義乍ら存付候義ニ付申上候

一、蕃書御書上之義去六月公辺大御目付様御廻状之趣ニ而ハ御所蔵之事之様奉レ存候得共其節御家中江も被仰出候義ニ御座候得共右等取持之蕃書ハ別段之儀ニ御座候哉御容子柄不レ奉レ伺候得共御家中之内ニも間々取蔵仕居候者御座候様ニ承及候間是以存付候侭乍レ序申上候義ニ御座候尚幾重ニも御勘弁被ニ成下一度奉存候此段御尋ニ付御答申上候以上

十月

御武具奉行

㊥ 左京 (19)

蕃書御書上之義御尋御評議候処御手許御蔵有レ之分者御伺之上御側御納戸ニテ取調出来可レ申哉其次第ニ寄北山安世被レ見調之仰渡候ハヾ間違ハ有レ之間敷様奉存候且九、十、十一、御武具奉行申立之廉ニ而愚意存ニ相認候

九印 北山安世佐久間修理拝借之分者早速取調可レ申其他一切御預無レ之旨

十印 初條如何ニモ公事之論尤至極之義与存候

二條誤字誤訳無ニ御座一様云々尤之義御座候乍レ併五印江府御武具奉行兼而村上英俊等江承合取調候旨申立候ヘ者間違者有レ之間敷筈之所当申立之趣ニ而者皆敷無二覚束一次第と被レ存候右は尚篤と取調之議英俊江改而被ニ仰渡一候方と被レ存候三条大御目付様御廻状云々之次第者ハ印御用状にて御所蔵之分斗と限て相見候得共於テ二御筋合一は御

家中所蔵之分迄も御書上御座候て可レ然義と被レ存候併於二江府一一応其向江御問合二相成度義哉と奉存候

但右御書に相成候段には佐久間修理所蔵之分迄茂無論御書上可二相成一義候処当節之処二ては御憚之方二哉右は其向御内二問合二ても有二御座一度様奉存候

十一 印段々懸念之趣尤之様存候是ハ御留守居二て何とか手心致し見ては相成間敷義也

右之外別段申立方無二御座一候尚宜御勘弁可レ被レ下候以上

十月七日

㊀ 蕃書御書上之義江府同役御内々申上候義二付別段御内々申上

御武具奉行

御所蔵蕃書之内御書上之節云々御除可然趣江府同役申上候段元来蕃書調所出役之向云々密話之趣二ハ御座候得共如何様珍奇之書御書上御坐候共品二寄御借入等は御座候共無二所謂一御引揚等之義は有二御座一間敷御義之様奉レ存候右密話仕候向杯も御所蔵書等薄々存罷在候て右様申聞候義也却て右躰之向申条も御不安心之儀之様には有二御座一間敷や奉存候尚深御賢慮被二成下一度奉レ存候以上

十月九日　　御武具奉行

安政丙辰三年十月与之

〔注〕

(1) 蘭法医で塩田三郎の父親。

(2) 文政10年（1827），膳所藩の藩儒の子として生れる。父・五平次について学問を修めたのち，弘化元年（1844），大阪に出て緒方洪庵のもとで蘭学を学んだ。さらに，嘉永元年（1848）8月には江戸にのぼり，蘭学および西洋砲術を研究した。その後，安政3年（1856）に膳所藩の蘭学師範に任命されたが，彼の実力が幕府にも認められるところとなり，文久2年（1862）5月より，洋書調所教授手伝となった。

しかし，慶応元年（1865）11月には調所の職を辞し，帰藩して，藩校・遵義堂の督学となっている。さらに維新後は家塾を設けて，郷党の子弟の教育にあたるかたわら，著述や翻訳の仕事に従事した。なお，語学力のすぐれた行次郎は，明治6年(1873)，本願寺の翻訳局において嘱託となり，梵語の翻訳にあたっている。その後は，滋賀師範学校などに勤めたりしたが，まもなく辞職し，蒲生郡八幡町に隠棲し，明治25年（1892）12月14日に逝去した。66才であった。

(3) 天保3年（1832）2月25日，名古屋に生れる。西村辰助，同良三などと称していたが，彼24才の安政3年（1856）からは柳河春三と名を改めた。臥孟，楊江はその号である。幼少より和漢の学問を修めたが，後に名古屋藩医・伊藤圭介について，医学および蘭学を学んだ。その後，独立して医者を業とすることになるが，現在の環境に甘んずることを欲しなかった春三は，江戸，さらには長崎にまで遊学し，学問を研鑽している。

なお，同5年（1858）からは，和歌山藩の寄合医師となり，蘭学所に勤務している。さらに，文久2年（1862）8月，洋書調所教授手伝となったが，元治元年（1864）には開成所教授職並に任ぜられて，幕臣となった。まもなく，同所の教授職に列せられることになるが，彼の知識の豊富さには――蘭学のほかに英学，仏学，さらには，洋算や化学にまで通じていた――開成所の同僚たちも一目おいていたと

いう。

なお，春三の名晰な頭脳は，洋学者というカテゴリーの中で発揮されたばかりでなく，別の分野でも同様に，活躍したのであった。すなわち，慶応3年（1867）10月には我国で最初の雑誌，『西洋雑誌』を刊行し，翌年の明治元年（1868）2月には，「中外新聞」を発行することになった。同時に，開成所頭取にも任命されるという，八面六臂の大活躍ぶりであった。

しかし，維新後は，幕臣のときにくらべて不遇であり，明治新政府の経営する開成所の翻訳校正係，学校制度取締御用などをへて，明治2年（1869）7月からは大学小博士となったが，何故か，すぐ罷免されている。

同3年（1870）2月24日，その才能をおしまれながら39才という若さで，この世を去った。

(4) 横浜に設立された語学所の，フランス語通訳兼助教。慶応3年（1867）2月に，外国調役となったのをはじめとして，維新後も得意の語学を生かして外交畑で活躍した。明治18年（1885）12月には，特命全権公使となって北京へおもむいたが，46才の働きざかりでその生涯を閉じた。

(5) 坂西家（坂西嘉平太利泰次男）から山崎家（養父山崎藤平政隆）の養子となる。天保2年9月18日跡式，同12年7月25日御目付方調役御広間御帳付兼，さらに弘化4年8月15日御台所目付御買物役兼帯となる。

なお，卓馬の子・山崎藤太（定保）は御側壱番組御徒士から御武具方（武庫属）となって廃藩置県をむかえたが，松代藩の武器を明治新政府に引渡すさいに，その才能を山県有朋に高く評価され，上京をうながされた（明治4年の山県有朋の書簡による）。しかし長男である故と，忠義一徹な父・卓馬の意見などがあって，東京での活躍をあきらめ，松代にその生涯をおくった。

(6) 一分が百疋なので，三百疋は3分である。

(7) 元治2年（1865）は，4月18日改元になっているので，慶応元年が正しい。

(8) 松代藩中老。

(9) 江戸定府の表用人役。

(10) 家老（江戸）。

(11) 家老（松代）。

(12) 山崎元氏所蔵の資料によれば，「アルゲメーン。ウオールデンフック。ファン。キュンステン。エンウェーテンシカツベン。フオール。デン。ベシカーフデンスタンド。エンテンヘフーフエデス。ゲスエルーゲンレーフエン」，内壱本。礼俗日用芸術学問普通韵譜。グ，ト，ニーウエンホイス撰，千八百二十年ヨリ追々出版，とある。

(13) 同上。「ネーデルドイツセ。タールキュンヂヘ。ウオールデンフック」，六本。荷蘭語学詞書。プ，ウエーランド撰，千七百九十一年ヨリ千八百十一年追々出版。

(14) 同上。「ネーデルドイツセ。スプラーカキュンスト」，壱本。荷蘭文法。プ，ウエーランド撰，千八百三十九年出版。

(15) 同上。「イキレス。スプラーキュンスト」。原書書名著者年紀無シ。

(16) 同上。「ハンドウオールデンブック。テル。ホークドイツセ。エンネールドイツセ。ターレン」，貳本。神弥独乙荷蘭二国詞書。イ，フ，フレイシカウエル＝ウ，イ，オリフイール撰，千八百三十四年出版。

(17) 同上。「フ，ア，ベカラルドス。ゴロンド。ベキンセレン。テルアルゲメーネオントレードキュンデ。オフ。ヘシケレイフィング。ファン。アルデウエーフセルス。ワール。オイト。ヘット。メンセレイキ。リハーム。イスサーメンゲステルド」，貳本。普通解剖術基本即人身造営経緯論説。払郎察国フ，ア，ベカラルト原本。荷蘭ク，イ，ファンエーヘン訳，千八百二十八年出版。

(18) 佐久間象山の門弟で，松代藩の足軽奉行となる。

(19) 松代藩家老・河原左京のこと。

# 第6章　仏学塾「達理堂」について

## 1．開塾の時期

村上英俊の私塾・「達理堂」開塾の時期に関しては，従来，たんに明治元年（1868）のこととのみ伝えられているだけで，正確な月日は明らかにされていなかった。最近，ある機会からその開塾の日を明らかにする資料を入手し，これが，明治元年3月15日であることを知ることが出来た。

長野市松代町在住の田中誠二郎氏宅に「壬申戸籍」が所蔵されており，村上英俊の項に関しては，「明治元辰年3月15日ヨリ私塾ヲ開ク」と明記されている。

しかし，この記載をそのまゝ信じてよいものであろうか。これによれば，英俊の年譜に照らし合わせてみると，英俊が安政6年（1859）3月27日教授手伝となり，さらに，翻訳方として勤務してきた，開成所を慶応3年（1867）に辞めて，その翌年（明治元年），「達理堂」をはじめて開塾したことになるが，この「達理堂」という名称は，すでに彼の最初の著作である『三語便覧』（1854）にみられるものなのである。したがって，仏学塾・「達理堂」と『三語便覧』に記載されている「達理堂」とが，どのような関連をもっているのかという問題が，ここに起きてくる。

「達理堂」という記述は『三語便覧』以外にもみられる。たとえば，開塾以前に英俊が公刊した書物――『佛英訓弁』(1855),『五方通語』(1856),『英語箋』(1857),『英語箋後篇』(1863),『佛語明要』(1864),『佛蘭西答屈智幾』（1867）のうち，『英語箋』および『英語箋後篇』をのぞいた他の4冊にも「達理堂」蔵と記されている。『英語箋』は井上修理校正，村上英俊閲と記されているに過ぎず，『英語箋後篇』にも村上英俊閲，室岡東洋，上原塢一郎同校とあるだけで，二書のうちのいずれにも，「達理堂」なる名称は用いられていない。

ここで注目されることは，3人の校訂者，井上修理・室岡東洋・上原塢一郎がともに英俊の門下であったという事実である。これは門人録に3人の名が記されていることから，明らかにされることであるが，この事実からも，明治元年の開塾以前に英俊が弟子をもっていたことは明白である。

弟子に関する問題はなにも門人録のみが，それを証明しているわけではない。たとえば，英俊の山寺常山（源太夫）宛書簡（安政6年ごろ？）はその点に関する大きな資料となっている。

「当年は英吉利参り候由専申觸候間若し英船参り候ハヽ著述之書類も大分ニ賣れ可申哉り奉存候此程は蕃書調所ニ而洋文作り候事相始り候間追々五方通語用立可申と奉存候私門人へは作文之事専仕候間近々ニ相開け作文流行可仕候段々の御厚情を以て私塾ニも此節は六人計罷仕候……」

（。。は筆者が付したもの）

しかし，何故に『英語箋』および『英語箋後篇』だけに，「達理堂」の文字がみられないのであろうか。

『三語便覧』，『佛英訓弁』，『五方通語』，『佛語明要』，『佛蘭西答屈智幾』の五書が，いずれも，英俊ひとりの編纂であるのに，『英語箋』および『英語箋後編』には弟子の校閲者として名を載せたにすぎない――すなわち，校閲者の場合には，英俊は「達理堂」なる名称をいっさい使用しなかったということである。これは，おそらく弟子たちを世に出そうとする師としての配慮による

ものであったと考えられ，英俊の師弟愛の深さを偲ばせるものがある。

このような彼の気持は，わが国最初の仏和辞典ともいうべき『佛語明要』を上木するときにもあらわれている。

「本書が出版されるについては一二の逸話が残されている。その一は跋文に言う所の達理堂門人の一人上原塢一郎が，本書の出版費になやんだ先生の為めに資材を投じた事である。これを明記して門弟に感謝の意を表している事など，当然とは言え，兎角不遜になりがちの師対弟の関係に於て，弟も美しく師も美しいと言うべきであろう。上原塢一郎は佐渡の人，当時幕府金座の吏であった。文久三年に同門室岡東洋と共に英語箋後篇四冊を校合し，村上先生の閲を経て出版する者である。その一つは本書の板下は先生自ら鵞ペンを執って書記し，兼ねて達理堂に集まる門弟を督励してこれを助成せしめた事である(1)」

もし以上の事実を認めるならば，「達理堂」開塾と考えられる時期以前に，英俊は門弟をもっていたことになるが，それは，いつごろからのことであったのだろうか。残念ながらそれを実証すすに足る資料は見当たらない。

「彼は松代より再度江戸に居を移した項から，多少は，生活の料としての意味もあったろう，門下生を取って，これに重に佛学，時に應じて醫学，化学等を授けていたのであったが，学門の淵叢たる開成所引退と共に箔もつき，かたがたやゝ閑散の身となったので開塾を公けにしたのであろう。(2)」

このような記述も結局はひとつの推定でしかないが，英俊が門弟をもった時期は，江戸出府直後のことと考えられる。英俊が江戸に出たのは嘉永4年（1851）1月の交であるから，同年の末か，翌年の嘉永5年（1852）には，英俊のもとを訪れる篤学の士に，A（ア）B（ベ）C（セ）の手解きをしたとしても，なんら不思議はないからである。――おそらく，最初は同じ松代藩邸に住んでいた藩士が，彼のもとでフランス語を学んだのであろう。

いずれにせよ，英俊が門弟にフランス語を教授していたのは，明治元年の開塾以前のことであったのは間違いないので，明治元年3月15日の「達理堂」開塾は，あくまでも，正式に仏学塾・「達理堂」がスタートしたことを意味するもの，と考えられる。

それ以前の村上英俊の「塾」が彼にとって本業でなかった故に，ややもすれば恣意的になりがちで，体系的でなかったのとは，明らかに区別されるところであろう。

英俊が，従来，著書に冠していた「達理堂」という名称――それは，英俊の書院の号，あるいは家業（医者）の号であったと推測され，フランス語の「塾」の名前は一般に彼の姓をとって，「村上塾」と呼ばれていたものと考えられる――をその私塾の正式の名称に採用し，積極的に後進の育成を計ったのが，明治元年3月15日の「達理堂」開塾と考えてよいのではないだろうか。

## 2．　洋学塾の状況

明治新政府は，明治3年（1870）12月，大政官布告として民間の教育機関に対して，開塾および入塾関係の願書を提出するよう伝達した。

明治5年（1872）には文部省布達を出し，さらに同年8月には開学届の提出義務を規定したのであった。

「私学，私塾及家塾ヲ開カント欲スル者ハ，其属籍，住所，事歴及学校ノ位置，教則等ヲ詳記シ学区取締ニ出シ，地方官ヲ経テ督学局ニ出スベシ。」（43章）

このような事情によって，翌年の明治6年（1873）には多数の洋学塾およびその他の私塾が

書類を提出したのであった。

村上英俊（松翁）の仏学塾「達理堂」もこの時，開業願が提出されたものである(3)。

一，家塾位置

東京府管下第十一大区小三区深川猿江町八番地
塾名達理堂
長野県貫属士族
村上松翁　　酉六十二歳

一，教員履歴

文政九丙戌元唐津県士族故人大野東馬ニ随従漢学修業文政十二巳丑元津山県士族故人宇田川榕菴ニ随従蘭学修業嘉永元戊申志立テ佛蘭西学ヲ自研究シ師授ヲ不待読開キ候学業御坐候

一，学科

佛蘭西学

（村上英俊の開塾が記されている壬申戸籍，
田中誠三郎氏所蔵）

一，教則

一，舎密学，一，窮理学，一，歴史，一，人身窮理，一，地理学，一，文典，一，洋算。
一日課第八字ニ始リ第十二字ニ可終事

一，塾則

一，九輪講其是非ヲ論ジ本人名称之上ニ賞罰之黒白点ヲ可記事
一，九生徒其学業之功拙ニ従ヒ階級ヲ可定事
一，九生徒休日之外公私之事件ニ関係シ他出シテ徹宵スル者ハ帰来之節其県々之印章ヲモッテ其信ヲ可表事
一，土曜日夕第四時ヨリ日曜日夜十時迄他出随意之事
一，夜第十時後発声素読ヲ可禁事
一，平日課業終テ後夜十時迄散歩浴湯勝手之事
一，課業ヲ惰リ規則ヲ犯ス者ハ罰スルニ三日之間食堂ニ於テ禁足タル可キ事
一，素読并ニ会読ハ必ス其席ヲ不可欠事右之通開業仕度此段奉願候也

一家塾位置　東京府管下第十大区
小三区深川猿江町八番地
塾名　達理堂
長野県貫属士族
村上松翁
酉六十二歳
一教員履歴
文政九丙戌元唐津藩士族故人大野東馬隨
従漢学修業文政十二己丑元津山藩士族故人
宇田川榕菴ニ隨従蘭学修業嘉永元戊申年

明治六年九月

第十一大区小三区深川猿江町八番地
寄留
長野県貫属士族
村上松翁 ㊞

（村上英俊の開塾願，東京都公文書館所蔵）

この当時，東京府下にはおよそ100を越える洋学塾があったが，一般に洋学塾は幕末から続いているものはきわめて少く，その大部分は明治になって開塾したものであった。明治4，5年の洋学ブーム以隆，とくに洋学塾は急増したが，わずか1，2年の間で消滅してしまうものが多かった。東京府は明治7年（1873），これらの中から55校を選んで私立外国語学校としたのである。

日本私学教育研究所の調査資料（No.19）によれば，「明治7年・外国語学校表」に記載された東京の私立外国語学校は，次の通りである[4]。

○英語学科

| 校名 | 校主 | 所在地 |
|---|---|---|
| 攻王学舎 | 伊藤　橘玄 | 祝田町 |
| ナシ | 並河鎮之助 | 有楽町 |
| ナシ | 木下　薩蔵 | 有楽町 |
| 共学舎 | 佐原　純一 | 美土代町 |
| 弘道学舎 | 高橋　秀雄 | 本銀町 |
| ナシ | 角田　帰一 | 本材木町 |
| 翠柳舎 | 土屋　忠女 | 松川町 |
| 交信舎 | 神谷　敬五 | 元数寄屋町 |
| 墨浜舎 | 岡田　保饌 | 浜町 |
| 三汲学舎 | 箕作　秋坪 | 蠣殻町 |
| 小童舎 | 片岡淳之助 | 堀留町 |
| 惜陰舎 | 横山　訒 | 南茅場町 |

| 校名 | 校主 | 所在地 |
|---|---|---|
| 鳴門塾 | 鳴門　義民 | 露月町 |
| 勧学義塾 | 石川　総管 | 愛宕下町 |
| 攻玉塾 | 近藤　真琴 | 新銭座町 |
| ナシ | 是洞能凡類 | 琴平町 |
| 成功社 | 厳田　正義 | 西久保葺手町 |
| 有隣塾 | 中井幸太郎 | 愛宕下町 |
| 三上塾 | 三上　精一 | 愛宕下町 |
| 成義塾 | 鏡　光照 | 芝宮本町 |
| 掬養社 | 伊藤　二郎 | 芝増上寺地 |
| 共同社 | 静光　義達 | 溜池霊南坂 |
| 慶応義塾 | 福沢　諭吉 | 芝三田町 |
| 寧静学舎 | 石川　彝 | 麻布鳥井坂町 |

| 校　名 | 校　主 | 所　在　地 |
|---|---|---|
| ナ　シ | 中村　正直 | 麹町 |
| ナ　シ | 中　常三 | 麹町隼町 |
| 逢坂学校 | 川田　剛 | 牛込若宮町 |
| 培根舎 | 村上　要信 | 四谷伊賀町 |
| 槐雲舎 | 吉田　方円 | 四谷箪笥町 |
| 嚶鳴社 | 坂井　正寿 | 四谷伝馬町 |
| ナ　シ | 村上（ママ）　通定 | 四谷左門町 |
| 共立学校 | 佐野　鼎 | 神田淡路町 |
| ナ　シ | 永田　健助 | 西小川町 |
| ナ　シ | 小宮山正寿 | 小石川江戸川町 |
| 同人社 | 中村　正直 | 小石川江戸川町 |
| ナ　シ | 桜井庄太郎 | 小石川水道町 |
| 進文学舎 | 橘　機郎 | 本郷元町 |
| 共慣義塾 | 南部　信民 | 湯島三組町 |
| 共励学校 | 石田　英洲 | 下谷中徒町 |
| 教研学校 | 船橋　振 | 浅草松葉町 |
| ナ　シ | 田部　俊業 | 深川船蔵前町 |
| 青莪学舎 | 堀井　常三 | 深川東森下町 |
| 共立学舎 | 尺　振八 | 本所相生町 |
| 日新塾 | 植村　泰助 | 本所花町 |
| 遷喬学舎 | 木股　楳軒 | 本所若宮町 |
| 有隣分塾 | 中井幸太郎 | 青山原宿町 |
| ナ　シ | 小泉　晴江 | 駒込蓬莱町 |

○その他の語学科

| 校　名 | 校　主 | 学　科 | 所　在　地 |
|---|---|---|---|
| 迎義塾 | 林　欽次 | 仏語 | 愛宕下町 |
| ナ　シ | 山本　周朝 | 仏語 | 小石川諏訪町 |
| ナ　シ | 中神　守洋 | 仏語 | 下谷徒町 |
| ナ　シ | 村上　松翁 | 仏語 | 深川猿江町 |
| 訓蒙学校 | 佐久間正節 | 英・仏・独 | 一ツ橋通町 |
| ナ　シ | 太田　良平 | 英・独 | 小石川表町 |
| 壬申義塾 | 大熊　春吉 | 英・独 | 本郷元町 |
| 前園舎 | 前田（ママ）　通 | 英・独 | 湯島四丁目 |

その数は，翌年の明治8年（1874）には73校と増加したが，明治9年（1875）には63校と減少し，同10年（1876）には，40校の私立外国語学校が私立中学校に変更され，私立外国語学校は皆無となった。

私立の外国語学校の規模，および，その形態について簡単に触れてみると，一人の洋学者が自宅で数人の生徒を教えるという(5)，従来の私塾と変らないものもあるし，教師数人が共同で私塾をおこし，互いに異る学科を教える場合もあったようである。

さらに，同志が結集して，私立学校経営の責任をもつという近代的な学校もあって，一様ではない。

なお，学生達を指導した教員達は，いわゆる士族出身の者によって，その殆んどが占められていたと言っても過言ではなく，その上彼等の年令は若く，大多数が20代の若者であったという事実も，これら洋学塾の特長であろう。やはり，これも明治初期という時代を反映してのことなのであろうか。

## 3．英俊の仏学の開創的意義

従来，研究者が，村上英俊に下した評価のなかには，英俊が我国のフランス学の創始者であることを認めながらも，必ずしも芳しいものばかりでは無かったことも，事実である。

それでは一体，英俊に対する批判は，どのようなところに起因するのであろうか。ここで，村上英俊のフランス学の意義について考えてみたい。

彼に対する第一の批判は，英俊が幕末維新期という時代の波に乗ることの出来なかった，たんなる落後者ではなかったのか，という指摘であろう(6)。

しかし，はたして英俊は幕末から明治初期の激動の時代に，適応することの出来なかった，いわゆる不適格者であったのであろうか。そこで，村上英俊がどのような態度でその時代に接してきたのかを，彼の著作を通して調らべてみることにする。

さて，我国のフランス学の成立を考えてみるとき，その歴史が我国の対外関係を背景として成立し，発展していることに気づく。また，それに関連して，黎明期における仏学史の時期もかなり明確に分類することが出来るのである。すなわち，第一期（1854～1862）は，啓蒙期とも言うべきもので，当時の知識階級の一部の人々にフランス語の簡単な知識が要求されていたのであった。村上英俊は『三語便覧』(1854)，および『五方通語』(1856)等のような日本語対照のフランス語字書を上木して，時代の要求に答えている。

第二期（1863～1871）は，初歩的段階を卒業した我国のフランス学が，まさに本格的にフランス語研究に取り組もうとした時期であり，その集大成である大仏和辞典の出現が要求されてきたが，英俊は『佛語明要』(1864）を完成させて，その語学力を世に問うている。

さらに，この時期は時代の影響からか，当然のように翻訳書――実用性の上からも軍事および法律書に関する書物がおおく訳された――が出版されたのであるが，英俊は時代の動きにも敏感だったのであろうか，さっそく『佛蘭西答屈智幾』(1867)を翻訳して，それを実行してみせたのである。

第三期（1872～1880）は，時代の趨勢を反映してのことか，フランス語の学習においても，話し言葉――すなわち会話――に重点がおかれた時期でもあったが，英俊は他の洋学者に遅れることなく，『三国会話』(1872）を出版して，その健在ぶりを示している。

このような，up to date ともいえる英俊の態度が，はたして時代の流れに取り残された人物だと断定できるものなのであろうか。

さて，第二の批判についてであるが，その要点をまとめて，簡単に記してみると，それは，英俊がたんなるブック・メーカーに過ぎないのではないか，という指摘である(7)。

しかし，このような非難は，次の事柄を考慮に入れるならば，いささか的を得ていないものであることが，すぐさま明らかとなるところであろう。

すなわち，当時の出版事情は，今日のそれとは大部異なり，版行するまでには大変な苦労を伴うものであった。その点から推察するならば，仮りに英俊が書籍を上木することに異常な執着を持っていたとしても，出版社（版元）がその価値を認めないとしたら，はたして，これ程の書物を出版することが可能なことであっただろうか，ということである。

上述したように，村上英俊は時世に遅れたフランス学者でもなく，また，たんなるブック・メーカーでもなかったが，門弟達が彼のもとを去り，孤独のうちにその生涯を終えたのもまた事実なのである。英俊が次の時代に適応できなかった理由として，彼の能力不足に寄因すると

いうよりも，むしろ，その年令に原因を求めるべきものであろうと思われる。何故なら，明治初期の激しい時代の波に乗れなかったのは，なにもフランス学の分野での英俊ばかりではなく，その他の分野にもその年令のゆえに取り残された人物を，我々は数多く知っているからである。

やはり，村上英俊は我国のフランス学の歴史と共に歩み，その創始者としての役割を立派に果たして，消えていった人物と解釈すべきではあるまいか。

〔注〕

(1) 瀧田貞治『佛学始祖・村上英俊』，(巌松堂書店古典部)，中巻24丁表。

(2) 同上，上巻22丁裏。

(3) 東京都公文書館所蔵。「開学願書，明治六年八月，東京府」(第21号)，65丁～67丁。

(4) 神辺靖光「明治初年における東京の私立中学校(2)」，(日本私学教育研究所)，P. P 18～19。
なお，洋学塾関係については，その他この論稿を参照させて戴いた。

(5) 同上，68ページによれば，村上英俊（松翁）の仏学塾の生徒数は40名（明治7年）であったが，翌年には24名（同8年）と減少している。

(6) 池田哲郎「本邦における仏（フランス）学の創始について――蘭系フランス語書志――」，(研究報告No. 97，蘭学資料研究会)，P. 13。

(7) 同上。

# 第2部　入　江　文　郎

# 第1章　入江文郎の生涯

## 1.　生い立ち

(入江文郎)

入江文郎は,[1]天保5年（1834）4月8日，出雲国島根郡松江に生れ，幼名を万次郎と名づけられた。父は松江藩医・入江元範である。元範にはすでに子供が一人あり静子[2]といった。

万次郎は，のちに柳節，洽斎，観寮とたびたび名をかえ，最後に文郎と改めているが，それは，文郎の健康状態を心配した両親の配慮によるものであった。

文郎は，幼年にして藩校・明教館に入ったが，やはり健康には恵まれず，やむなく学業を続けることを断念し，療養の毎日をおくることになった。しかし，養生のかいあって嘉永元年（1848),15歳のとき復校するが，遅鈍を年下の友に嘲笑されたことに腹をたて，松江の支藩があった能義郡広瀬に――姉の静子がこの地に嫁いでいた――儒官・山村黙斎をたずねて入門する。

2年の厳しい修業をおえて黙斎のもとを離れ，松江に帰ったのは，彼17歳の嘉永3年（1850）のことであった。この後，再び学んだ明教館での彼の成績は，群を抜くものであった。学問に対して興味をもちだした文郎は，あらたに藩儒・妹尾謙三郎にも教えを乞うて，研鑽している。師の妹尾謙三郎からは特別に目をかけられ，将来を約束されたが，更に広い天地で学問を探求しようとする彼の心は，はるか遠い江戸の空へと飛んでいた。

その頃，江戸では，アメリカ合衆国東洋艦隊の来航が契機となって，我国の洋学の歩みを大きく前進させつつあった。西洋文明の摂取というはなはだ実利的な意図のもとに，従来の蘭学に加えて，新しい分野の英学,仏学,独逸学などに，知識人たちの関心が向けられていた。

文郎，21歳の嘉永7年（1854),藩医・清水同仙にしたがって江戸に出て，幕府の医官・竹内玄洞について蘭学を学んだ。数カ月後には，岩名昌山の塾にも入門し，医学を学んでいる。この間，文郎は，当時の貧しい洋学書生がよくしたように，蘭文の筆写をして学資をえていた。

安政4年(1857),父・元範が逝去したため,いったん帰郷することになったが，翌年には，藩老・三谷権太夫の推挙によるものか，藩の医官にとりたてられている。その年（1858）の5月，文郎の勤学は，藩主・松平定安の認めるところとなり，若干の学資を与えられて，江戸に戻っている。なお，藩邸を訪れるおりには，藩主に西洋の兵学，医学などの優秀性を説き，主君をおおいに啓蒙したという。

さて，入江文郎が，フランス語を学びはじめた時期は定かではないが，彼が江戸に出てきた嘉永7年（1854）以降のことと考えられる。おそらく，村上英俊の仏語書――『三語便覧』(1854),『五方通語』(1856）など――を頼りに独習したものと推定されるが，正式に教師についたのは，文郎27歳の万延元年（1860）の交のことである。横浜において，フランスの通弁官・ Weuve（ヴーヴ）[3] について，50日間フランス語を学習し，文法，作文，発音などを修めた。

ところで，当時の洋学者の大部分がそうであったように，文郎もすでにオランダ語を修得していた。そこで，フランス語を学習するさいにしても，オランダ語を仲介として学んだのであった。幸い。 Weuve がオランダ語に通じていたので蘭語を活用しての仏語学習は，大いに進んだ。

なお，文郎のフランス語の発音に関する面白いエピソードとして，現在，入江家に伝わっているものがある。それは，彼が発音矯正のために，小さな「ヤスリ」をいつも持っており，思うように発音が出来ないときには,「ヤスリ」で歯をといていたという（入江尚子氏談)。その効果のほどは，はなはだ疑問ではあるが，彼の外国語に対する意気込みには——科学的な語学教育法が確立されていなかった当時のことであってみれば——おおいに考えさせられるものがあると言えよう。

文久元年（1861),入江文郎は，フランス学者として，幕府の認めるところとなり，当時の最高学府であった蕃書調所の教授手伝に任命された。翌年の文久2年（1862）3月には外国方翻訳掛となり，さらに，同年の12月には，松江藩の洋学教授をも兼務することになった。

このようにして，蕃書調所（洋書調所と改称されてのち，更に開成所と改称される）で，仏学を教授することになった文郎は，より一層研鑽するべく，横浜において再度百日間, Weuve について学んでいる。この間の事情は，文郎が師の Weuve にあてた仏文の書簡に窮うことができる。

A Monsieur Weuve l'interprète de France au Japon

Il y a l'Académie Royale à Yedo, qui s'appelle Yau-syo-sirabé-cho (ceci signifie la chambre où tous les livres étrangers excepté le Chinois sont examinés à fond.), j'y ai été nommé membre instituteur ce là pour la langue Française en prenant pour principe expliquer le sens des mots tout seul et de traduire les livres et lettres, mais sans rapport à ce que la prononciation soit juste ou soit défectueuse.

La cause pour laquelle Sa Majesté le Taicoun m'a fait mettre à présent ici, est pour ce que je sache la meilleure prononciation Française et le mode convenable instruction, et pour qu'en retournant vers Yedo j'enseignasse les écoliers de la manière commode.

Je vous prie de m'instruire premièrement dans la prononciation seulement, et outre cela, de corriger les quelques pages de mon thème journellement; mais je ne souhaite d'être informé avec la traduction du Français au Hollandais, comme avait lieu hier matin; car il est possible pour moi d'entendre la signification des mots Français à l'aide du dictionnaire, et de plus, j'ai des livres pour exercice de traduction écrits par les Hollandais.

Il y a une autre chose que je veux connaître. C'est la question comment la méthode d'enseignement se fait dans l'académie en France, c'est-à-dire de quelle manière les leçons du garçon se rangent et les sortes des sciences arts se partagent.

Monsieur! donnez-moi une réponse claire, j'espère.

Je suis avec respect et estime

Votre fidèle serviteur

Le 16 Kycoutsky
en 2. B.K.

Irié Kouanryau.

「在日　仏通訳官 Weuve 様

江戸に洋書調所（シナ語以外の外国書を詳細に調査する室を意味します）と称する Académie royale があります。現在私は仏語を担当してこの組織の一員を命ぜられ，語の意味を主として説明し，書物，手紙の翻訳しておりますが，発音が正しいかどうかという点に手掛りがありません。

これが仏語の最も優れた発音を学ぶとともに適切な教授法を修めて江戸に帰った暁，学生にもっともすぐれた教授を行うために大君（タイクン）陛下がお差遣しになる理由であります。

私はまず最初は発音のみ教えていただくよう懇請します。そのほか，毎日私の書く仏作文数ページを添削して頂くことを希望いたします。しかし，昨朝のように仏語から蘭語に訳すことは望みません。そのわけは，字書の助けを借りて仏単語の意味を了解し得るからです。加之，蘭人の著した翻訳演習書（複数）を所持しております。

もう一つ，私の識りたいことがあります。それは仏国の Académies で，仏語教育が，いかに行われているか，であります。すなわち，男子学生に，いかなる科学，諸学の教授が行われているかであります。明白な御返答をぜひ，頂きたく存じます。　　匆々

文久二年菊月十六日

入江観寮」(4)

さて，以上，記したごとく，入江文郎の仏文はなかなかの出来映えであり，彼の言わんとする意味も理解することができる。しかしながら，ところどころに，フランス語の表現としては，適切ではないと思われる個所がみられるので，浅学をかえりみず，筆者なりに書き改めてみると，次のようなものである。(ただし，固有名詞は当時の表記にしたがって，そのまま使用した。)

A Yedo, il y a l'Académie Royale qui s'appelle Yau-syo-sirabe-cho. Ce nom désigne la salle où l'on examine minutieusement tous les livres étrangers, sauf les chinois.

J'y ai été nommé membre responsable pour la laugue française. La principe de notre méthode de travail consiste à traduire les livres et les lettres, en expliquant le sens des mots sans se préoccuper de savoir si la prononciation est correcte ou défectueuse.

Voici maintenant pour laquelle Sa Majesté le Taïcoun m'a envoyé ici:

D'abord pour que j'apprenne une très bonne prononciation française.

Ensuite, une manière d'enseigner convenable, pour que, une fois revenu à Yedo, je puisse enseigner facilement aux élèves la langue française.

Je souhaiterais donc:

premièrement, que vous m'enseigniez seulement la prononciation;

deuxièmement que vous corrigiez les quelques pages de mon thème quotidien. Je ne désire nullement que vous traduisiez à partir du texte hollandais,comme vous l'avez fait hier matin.Car, à l'aide du dictionnaire, je suis comprendre le sens des mots français; et j'ai des livres hollandais pour faire des exercices de traduction.

J'aurais encore autre chose à vous demander: je voudrais connaître la manière d'enseigner dans l'Académie en France, c'est-à-dire: quelles sont les sciences et quels sont les arts qu'on enseigne aux jeunes gens.

En attendant de vous une réponse détaillée, je demeure respectueusement.

Votre fidèle serviteur.

ところで，文郎の仏語学習の特長は，フランス人教師より直接教えをうけた点にあり，[5]その成果は「発音」，および，「作文」などにいかんなく発揮されている。仏学始祖・村上英俊が独学でフランス語を学んだが故に，その発音に問題があることを指摘されたのとは，おおいに違うところである。さらに，彼の仏語学習の時期が比較的はやく，フランス人教師について学ぶ以前に，すでにかなりの基礎的知識をもっていたことも，みのがすことが出来ない事実であろう。

現在，文郎が仏文で書いた文章が，「幕末洋学者欧文集」[6]中にみられるが，他の執筆者，小林鼎輔，[7]林正十郎，[8]多門季三郎，[9]の書いたものと比べて，かなりの欠点はあるにしても，数段あかぬけていることがわかる。これもフランス人教師から直接指導をうけた結果ではあるまいか。

「幕末洋学者欧文集」は慶応元年（1865），当時，開成所の教授であった市川斎宮が，ロシアへ留学する長男・文吉を激励する目的で，開成所の関係者にそれぞれの専門とする欧文で送別文を書いてもらったものであるが，不思議なことに，仏学教授の最古参であった，村上英俊の名が見あたらない。この時，文郎32歳であった。

慶応2年（1866）12月8日，藩籍を脱して幕臣となり，翌3年（1867）4月からは，横浜の太田村や江戸の陸軍所などにおいて，翻訳の仕事に従事することになり——仏軍事教官団 (Mission militaire française) の仏書，建白書，書簡の翻訳などもその重要な仕事であった——彼の仏語力はおおいに生かされた。

なお，この時期の仕事と推定される文郎の訳稿が，先学によって発見されたが，[10]その文章があまりにも短文のため，彼のフランス語の解釈力を窮うことができないのは，残念なことである。現在のところ，それ以外は，入江文郎の翻訳書，および，訳稿のたぐいは，まだ発見されていない。

## 2. フランス留学

明治元年（1868），幕府が瓦解するにともない，松江藩に籍を復したが，明治新政府にも教官として出仕することになった。7月の教官職制の改正に際し，二等教授から「大学中博士」となり，10月には従六位に叙せられている。明治3年（1870）12月，松江藩から家禄現米32石を給せられた。

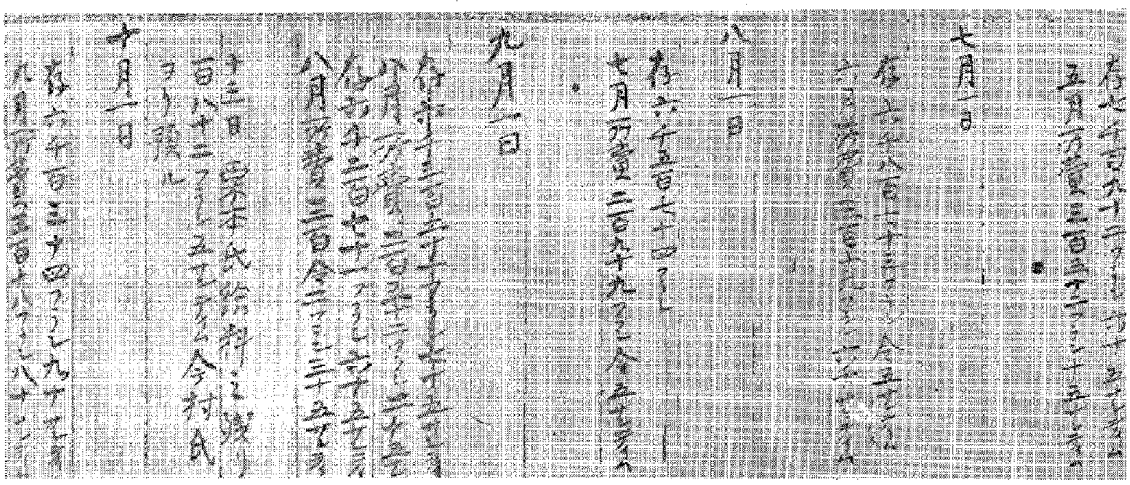
ところで，よく知られているように，明治新政府は，近代的な国家を形成するにあたって，西欧先進諸国の文物制度を，きわめて貪欲にとり入れる必要があった。この希求をより早く実現させるためには，諸外国への留学が重視され，おおくの明治日本の幹部たちが，海外へ派遣された。

明治3年12月22日には，「海外留学規則」も布告され，[11]もっとも重点のおかれた軍事，および，工業の分野から実施されていったが，教育関係においても，留学生の人選がおこなわれ，フランス学の分野で入江文郎が選ばれた。[12]

明治4年（1871）2月27日に，「学課質問」（学術研究）のため，フランスへ渡ることになった。ときに，文郎，38歳であった。なお，留学にさいして，いかにも几帳面な彼らしく，かなり克明な留学ノートともいうべきものを作っている。「西航備忘録」がそれである。[13]

「西航備忘録」は，薄い茶褐色表紙，和装袋綴の1冊もので，大きさは 8.5センチメートル×18センチメートルと小さい。表題には，「明治辛未2月，西航備忘録」と墨書されており，紙数はは30丁である。次にその内容を記すと，表題が示しているように，文郎の覚書が中心となってお

り，一般にいわれるような旅行記ではない。さらに，彼が留学期間中——その準備期間中も含めて——に使った経費の明細が詳細に記載されていたりする。あるいは，当時のフランス留学生の名前などが書かれてあったりするところから，一種の雑記帳ともよぶべき性質のものである。それ故,「西航備忘録」に記された諸々の内容は，明治初期におけるフランス留学生の，経済生活をも物語るものとして，はなはだ興味深いものと言えよう。



(「西航備忘録」の本文内容，入江尚子氏所蔵)

さて，文郎は出発を目前にした2月22日，横浜の外人貿易商を訪れ，洋行の買物をした。「西航備忘録」は記している。

| | | |
|---|---|---|
| ラシャ上着 | | 廿五弗 |
| 同　ヅボン | | |
| 同チョッキ | | |
| 同　ヅボン | | 七弗 |
| ヅボン | | 十弗 |
| チョッキ | | 六弗 |
| 同 | | |
| 上着 | | 十三弗 |
| 同 | | |
| 夏　下股引 | 六ツ | 十弗 |
| 冬　同 | 二ツ | 四弗 |
| ジュバン | 六ツ | 十八弗 |
| 亜麻　同 | 十二 | 廿六弗 |
| エリヒモ | 三ツ | 二弗 |
| カスク | | 五弗 |
| シャポー | | 三弗半 |
| 傘 | | 九弗 |
| 沓 | | 六弗 |
| 沓下 | 廿四 | 十四弗 |
| 手袋 | 二ツ | 三弗 |

ハナフキ　六ツ　　六弗
上沓　　二弗二五
カミエリ　六十　　一弗二五
袖口　三十六　　十五弗

以上，列記したように，衣服代として192弗(実際には174弗半支仏)，その他，雑物に36両3分一朱，横浜で「雇人馬車横浜宿併世話人代」80両とあり，合計 295両程かかったとしてある。しかし，横浜での80両という数字は，それにしても高額なので，彼が出帆までの期間を，この地に滞在しておって，そこで支仏われた費用の総額が80両であった，と考えた方が納得がいく。

明治4年辛未2月27日（太陽暦3月16日)。入江文郎を乗せた，仏国郵船会社 (Les Messageries Maritimes) の Pei-ho（ペイ・ホー）号[14]は，横浜港をあとにした。早春の朝，海をわたる風はまだ冷たかった。その後，異国でのさまざまな体験をかさねて，南仏の陽光が眩しい4月18日（6月5日)，マルセイユに入港した。[15] 4月26日（6月13日）には，いかにも謹厳実直な文郎らしく，「此日ヨリジュラル氏日々朝八字ヨリ十字迄来教ユ日曜日ヲ除ク一月百二十フラン一日五フラン之約定ナリ」と，明治新政府からの宿題である「学課質問」の第一歩を忠実に励んでいる。

さらに，到着早々にもかかわらず，後援者であった松江藩と大学南校[16]に，かなりの書籍を送っている。

書籍三箱
内二籍南校A印
六百十一部　六百七十八冊
代二千六百二十一フラン廿五サンテイム
運賃が　二百令三フ　廿五サン
ガルソン　二フラン
箱代諸代両度分　二十五フラン
船問屋番頭両度分　十フラン
内一箱藩邸B印
百八十一部　二百十一冊
代千令九十四フラン三十サンテイム
運賃が　百廿七フラン廿五サンテイム
但此内二箱代諸代籠レリ
船問屋番頭　十フラン

などと，彼の手帖に記されてあり，[17]いかにも苦学，努力して今日の地位をきずいた人物らしい律義さを示したものにせよ，「ガルソン，2フラン」，「船問屋番頭両度分，10フラン」などと，pourboire までいちいち書いてあるところは，どうも明治日本の幹部らしくない。

6月28日（8月14日)，マルセイユを立ち――途中，リヨンによって――西洋絵画のような田園風景のなかを，「蒸気車」に揺られて，パリのリヨン駅に到着した。7月3日（8月18日）のことであった。

最初，アルジェ街19番地の Hôtel d'Oxford et de Cambridge に住居したが，1カ月半ほどで，カジミール・ドラヴィニュ街7番地の Hôtel St. Sulpice に転居し，その5階に腰をおちつけた。

その年，明治新政府は大学南校，東校を廃して文部省を設置したので，7月27日付をもって文文部中教授に任命された。

その後,「11月政府文部理事官ヲ欧羅巴各国ニ派遣シテ学校事務ヲ調査セシム先生其翌年正月27日ヲ以テ尚仏国ニアリ之ト協議シテ調査スヘキコトヲ命セラル同6月25日文部省ヨリ帰朝ノ命アリ7月先生情ヲ文部理事官ニ陳シテ仍留学ヲ請フ理事官先生ヲシテ之ヲ全権大使ニ具陳セシメ後其許可ヲ得タリト云フ同9月14日文部省6等出仕ニ補セラル」(入江文郎先生之伝, P.P 7～8)という経過をへて，明治6年（1873）2月，フランス留学生の総代となった。前の総代であった，栗本貞次郎[18]の後任として，最年長の文郎がその跡をついだのである。

さて，文郎が，フランス留学中に，誰れについて，どういう学問をしたかの資料は，今のところ何も残っていないが，彼が哲学に興味を示し，Auguste Comte（オーギュスト・コント）を敬慕して，みずからも「Le cercle du savoir」なる稿本をものにしたと伝へられているが，その所在は明らかにされていない。

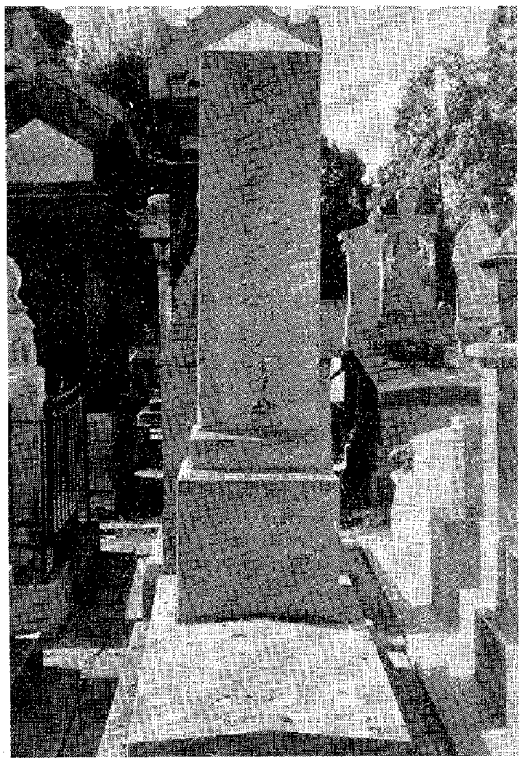
おそらく，健康にも恵まれなかった文郎は――結核を病み，さらに，リュウマチを患っていた――ひとり部屋に閉じこもり，毎日のように書物を手にしていたものであろう。この上，年令的にも高かったので，若い留学生とは違った方法で自分なりの勉強をしていたもの，と推測される。また，文郎が，文部中教授という地位にあったがため，それなりの仕事も果さねばならなかった。その間の事情を物語るものとして，現在，入江尚子氏によって所蔵されている資料がある。次の書簡がそれである。

「愈御清迪御在留欣喜之至陳者本校諸学生徒之業遂日進歩シ仏学生徒も過半己ニ普通学大概脩業致シ候ニヨリ随テ学力優等之専門教師ヲ要シ候ニ付今般文部省ノ許可ヲ得更ニ其教師一人雇人之儀其地在留代理公使中野健明君江依頼致シ候且ツ同氏ノ周旋ヲ以て本年五月中仏国ヨリ雇入候本校数学専門教師マンジョウ氏ノ説ニ拠リ巴里府上等師範学校卒業生ベルソン，ギュスターブ氏ナル者アグレゼー，エス，スシアンス，ヒジック，リサンシェー，エス，スシアンスマテマチック之称号ヲ得シ者ニテ本校教師ニ適当スベキ旨ニ付同氏ヲ雇入之儀申送候同氏雇入若シ整ハサルトキハ同府上等師範学校卒業生ニテヂフスキ氏ナル者是亦ギュスターブ氏同様之称号ヲ得シ人物之趣ユヘ此人ヲ雇入之儀モ申送候乍併右両氏共果シテ其学力優秀ニテ本校物理学専門教師ニ適任之者タルヤ否ヤハ詳知スル能ハサルニ付千万乍御手数右両氏ノ学力人物等御探索下度偏ニ冀望スル所に候又同封在住ラピット氏は博学多識ニシテ品行端正ノ者ノ由伝承致シ居候ニ付此人能ク専門物理学教師ニ適スルモノニテ本校ニ雇入ルヽ事成候ハヽ幸之旨モ申越シ候間入江君ハ平常同氏ト御交際之由ニ付若シ御周旋ニヨリ同氏ヲ雇人候儀相整候ハヾ幸甚之事ト存候併本校ニ於テハ何レニテモ学力優等人物端正ニシテ前陳ノ専門物理学校師ニ適任ニ候ハバ誰人ニ限ラス候間中野君ト御協義之上可然人物御抜択被下度且本校学歳之始メ即チ本年九月十一日ヨリ右教師必至入用ニ付一日モ速ニ来着之運ヒニ可相成様御尽力之程偏ニ所希候但シ右教師招傭期限ハ先ツ二ケ年間給料ハ一ケ月三百五十円ヨリ四百円迄ヲ以テ条約御取結相成度且旅費トシテ来帰共六百五拾円相渡可申候前件之次第特ニ御依頼迄如斯候謹言

明治八年七月廿七日

東京開成学校監事
古賀護太郎 ㊞
同学校長補
浜尾　新 ㊞

左仏国
入江文郎殿
今村和郎殿



（入江文郎の墓（モンパルナス南墓地）、
高橋邦太郎教授撮影）

二伸右物理学校教師ハスペシヤウル，ヨリシペリュール，之学科ヲ教ヘ生徒ヲリッサンシエー之学位ニ至ルマテ教導致シ候ハ宣シキ義ニ付其辺御含之上御雇被下度此如モ申添候也」

なお，文郎は前述の手紙にあるラピットの他にも，立場上，かなりの仏人との間に交際があり，彼等の間で，文郎が深い学識をもつ人物として知られるようになっていた。[19]

明治8年（1875）11月には，結核のため，パリを離れることが出来なくなったので，文部省に再度延期を願い，これ以後は自費で滞仏したい旨，書き送っている。明治10年（1877）1月11日，[20]六等出仕を免官となり，在職満8年の賜金として，六百円（2930フラン15サンテイム）を，8月13日付で受取った。

翌年の11年（1878）になると，病状はますます悪化し，非社交的な性格は助長され，長期滞在をしていたHôtel St. Sulpice から一歩も外へ出なくなった。そして，手伝いの婦人が部屋を掃除をして帰った後は，一人で大好きなブドー酒を飲んでいたという（入江尚子氏談）。人とも会わず，わずかに，親友・今村和郎[21]の訪問しか許さない程になっていた。

「……寒気の甚しいパリの或日，今村がHôtelに彼を見舞うと，すこぶる健康が衰えているので，医院に診せたらどうか，というと，あいつらは薬を売りつけるこうかつな奴らにすぎん，とても命をあずけるわけにはゆかない，と相手にしなかった。二，三日経っていってみると，入江は『おれも，いよいよ駄目になった。朝と晩にスープと鶏卵一個しか咽喉を通らなくなった。好きな煙草ものめない。』と言った。喉頭結核が進行したためである。更に入江は『体がだるくて本も読めず，せいぜい新聞だけだ』と嘆いた。病状がいよいよ進んで衰弱の加わったのを見てとった今村は医師の来診を勤めた。やっと入江が承諾したので，直ちに往診を乞うた」[22]。

しかし，その時はすでに手遅れであった。心配して病状を問う今村に，医師の返答は，あと2・3ケ月のところであろう，ということであった。その3日後の1月30日，急に文郎の容体が悪化し，今村が駆けつけた時は，すでに遅かった。

文郎の遺体は，友人知人などの手によって，モンパルナス墓地に埋葬された。[23]行年45才であった。

なお，この墓地は高橋邦太郎教授によって調査され，発見されている。[24]

〔註〕

(1) 文郎の読み方として，2通りの説がある。「ブンロウ」，および「フミオ」がそれである。確かに，本人もその両方を使用しており，彼が市川文吉におくった送別文には，Bounrau，としたためているが，フランス留学中の名刺には，Fumiwo とあって，一定していない。しかし，最近になって発見された文郎の仏文の書簡によれば，国内では Bounrau，フランスにおいては Fumiwo と記してあることが判明した。そこで，この事実をもとにして，一つの仮説をたててみたい。すなわち Bounrau という名前の発音が，フランス人に通じにくかったがために，「フミオ」と変えたのではないか。

(2) 病弱だった文郎は，生涯独身であった。それ故，入江家は静子（野津栄に嫁す）の3男，美弥三郎（後に改名して元義）によって相続された後，今日に至っている。

(3) Henri Weuve については，くわしくは不詳。

(4) 訳文は高橋邦太郎教授のものによる。「補綴，入江文郎伝」，(「研究報告」第 276号，蘭学資料研究会)。P. P 1～2。

(5) ヴーヴは入江文郎との仏語学習中・幕府の役人が傍にいるのを嫌っていた。「去々戌（文久二年）十一月中入江観寮察義学術質問之為，仏国通弁官ウェヽヽ方江罷趣候節，役人立合之儀ウェヽヽ相拒，伝習質問等罷趣候もの江，立合役人附添罷趣候ハ，伝習仕間敷旨，公使より申付置候儀之旨申聞候間，其砌附添向後相止候儀，阿部趣前守神奈川奉行相伺候処，伺之通被仰渡候」。
桃裕行「松江藩の洋学と洋医学（上）」，(「日本医史学雑誌」P，4)。

(6) Monsieur Ytchicaoua Bounquichi,

Depuis que j'eus l'honneur d'être connu de vous il y a cinq ans dans le collège Francais de Caïssaijo, je m'y ai attaché avec vous, j'ai eu un grâce à vous communiquer ma faible étude et je m'ai étonné toujours de votre conception vive et de la grande capacité.

Maintenant Son Altesse le Taicoun vous envoye en la Russie pour faire y étudier; or, tristesse et rejouissance s'en combattent dans mon cœurs, parce que c'est avec le plus grand regret qu'un des meilleurs amis nous quitte bien que durant peu d'années tandis qu'il y a le meilleur plaisir du monde à souhaiter que, voyant plusiers savants à St-Petersbourg, vous y instruisant dans quelque faculté et agrandissant votre idée, vous vous retourniez et assistiez la civillisation de notre pays.

Son Altesse vous a préféres à beaucoup des élèves de l'université à votre grand honneur que les autres ne peuvent pas avoir, pour cela le plus grand resultat que Son Altesse a pour but sur les élèves sera attendu principalement sur vous.

Adieu, Monsieru, portez vous bien et étes diligent. Je vous adresse avec estime cette parole écrite pour servir à votre memoire pendant le sejour en la contrée occidentale où vous ne devrez jamais négliger votre tâche en vous rappelant de mon conseil. On vous souhaitant beaucoup de succès, j'attend que vous retourniez bientôt au Japon.

Le 28 du cinquième mois complémentaire du prémier an de l'ère Cai-ou ou le 20 de juillet de l'an de grâce 1865.

Irié Bounrau.

(7) 桑名藩士。文久元年6月，蕃書調所教授手伝並に任命される。その後，教授手伝をへて，慶応3年8月，開成所教授職並となり，藩籍を脱して幕臣となった。村上英俊の門人。著(訳)書に，『法朗西会話篇』，『法朗西訳解』，『法朗西文典後編』および『佛学示蒙』等がある。

(8) 岩城泉藩士。文久元年6月，蕃書調所教授手伝並に任命される。その後，教授手伝をへて，慶応2年12月，開成所教授職並となり，藩籍を脱して幕臣となった。維新後は欽次と称し，私塾・「迎義塾」を開いたが，明治7年には陸軍省に出仕（7等出仕）した。退官後，東京市会議員にもなっている。村上英俊の門人だが，のちに破門。著書に『万有訓蒙一』がある。

(9) 幕臣。文久元年11月，蕃書調所仏学句読教授に任命される。その後，同教授手伝並となった。

(10) 藤田東一郎氏によって，慶応4年4月10日の中外新聞第12号に掲載されていることが，指摘された。

(11) 我国における海外留学の問題を取扱ったものとしては，『近代日本の海外留学史』(石附実，ミネルヴァ書房）が詳しい。
なお，規則の内容は次の通りである。「(1)留学生はすべての大学の管轄のもとに入り，大学からの留学免

状と，外務省からの渡航免状を必要とすること，(2)留学中の諸事務は在外の弁務使（3年の閏10月に，英仏孛は鮫島尚信，米は森有礼の各少弁務使が，その管理を命じられ，それぞれ赴任した）がこれをおこない，留学生はその指令に服すること，「(3)留学生ハ尊卑ノ別ナク皇族ヨリ庶人ニ至ル」まぜ許可するという開放主義を明示したこと，(4)「官撰」と「私願」留学の二つをはっきり分け，それぞれ細かく規定している。官撰の方は，(イ)華族は太政官，大学生徒は大学，士庶人は各府藩県でそれぞれえらび，藩のばあいは，大藩三人，中藩二人，小藩一人を枠とする，(ロ)士庶人のうち府藩県の学校や私塾に在学して学力のすぐれている者は大学でえらんでもよい，(ハ)選抜にあたっては，性質，年令，学力の三点をおもな基準とし，十六～二五歳の「稟性誠実敏達ノ者」で，「和漢ノ古典史乗等ニ略渉リ且洋学モ一通り研究〔し〕在留国語ニ達スル者」を原則とする，ただし「非凡俊秀ノ者ハ洋文不解」でも，ばあいによって許可することがある，(ニ)学科は本人の自出にまかせる，(ホ)年限は五カ年を通常とし，学費は年□元（ドル）とあって欠字になっている，(ヘ)出発および帰国にあたっての注意事項として，「生徒上程〔出発〕前其地方ノ氏神ヘ参拝シ国恩報効ヲ祈念シ神酒ヲ拝戴シテ国体ヲ辱メサルノ誓願ヲ可立帰朝ノ時亦告賽スヘキ事」がうたわれ業有之間敷万一留学中懶惰或ハ不行跡ノ聞ヘ有之者ハ直ニ之ヲ呼戻シ相当ノ咎メ可申付事　留学中拝借金ハ勿論外国人等ヨリ借財イタシ候儀一切不相成候事」とある。以上が官撰による官費留学についての規定であるが，私費の留学も官撰を規定にほぼ準じるとされ，ただ異なる点は「検査甚タ厳ナルヲ要セス且洋文不解者トイヘトモ許可スル」とあり，その制限がゆるやかであり，年限も自由であるが，費用として必要な年六～七〇〇元（ドル）の用意のない者は認めないとされた」。（同書，P. P 140～141）

(12) 明治4年1月28日発令。その時，受取ったものと思われるが，「西航備忘録」には次のように記入されている。「学費，千弗洋銀札ニテ受取，官録，二百九十五両楮幣ニテ，船賃，五百五十弗洋銀札ニテ，鉄路，四十弗洋銀札ニテ，其食料，六弗洋銀札ニテ，馬児塞里逗留五日，二十五弗洋銀札ニテ，諸雑用，七十五弗洋銀札ニテ」

なお，明治4年2月派遣された者として，欧州（大学中博士）入江文郎。欧州（同）鈴木暢。欧州（大助教）小林儀秀。右三名何れも学課質問の為め派遣（帝国大学五十年史，上巻，一六七頁）とあるが，他2名がフランスへ留学したかどうかは不明。

(13) 入江尚子氏所蔵。

(14) 文郎を乗った汽船の名前は，いままで不明であったが，高橋邦太郎教授によって明らかにされた。註4のP. 4 参照。

なお，「西航備忘録」には，船賃550弗，海上雑費87弗半支払ったとある。

(15) 4月18日（太陽暦6月5日）～4月21日（6月8日）まで「オテル・デ・コロニュ」に宿泊したが，4月22日（6月9日）からは「オテル・ド・マルセイユ」に移っている。

(16) 松江藩から金七百両，大学南校から洋銀札四百弗を，書籍代として受取っていた。

(17) 6月6日（7月23日）付。

(18) 栗本鋤雲の養子。元横浜仏語伝習所の生徒取締。帰国後，外務省御用掛准奏任。

(19) 「仏人中に何人かの友人をもったことで，その中に東洋語学校教授レオン・ド・ロニー Léon de Rosny がいた。文郎と親交を結んだことは，自他ともに裨益するところが多かったに違いない。また，未知のベルギー軍医（外科）デュトリウから，1872年7月17日附で，日本の医学の現状について問合せて来た手紙が残っている。これにはぜひ，会ってくれとうい希望が述べられているが，それに対して文郎は翌十八日に返事を認めている。その大略は，『折角会いたいといって下さいましたが，私はフランス語がよく話せんのでお手紙でお答へします。また，文章も拙いからおゆるしねがいます。日本の医学はまだ混沌 (chaos) です。約十年以来蘭法を学んだ医師がヨーロッパ式方法を日本風に利用していました。

まだ余り進歩していませんので何にもお伝えする情報がありません。匆々，イリエ』というのである。……未知のベルギー軍医から問合せがあるのは，文郎がすでに若干の人々の間にその名が知れ渡っていたことを証明するものである。」註4のP. 5

(20) 従来，この日付を1月12日としてきたが，文郎自身は1月11日と記している。「西航備忘録」参照。

(21) 明治5年頃，文部省九等出仕。その後，7年頃左院御用掛，11年太政官法制局権少書記官兼司法権少書記官。17年欧州より帰朝，23年貴族院議員。24年行政裁判所評定官。

(22) 高橋邦太郎「留学生・入江文郎」,(「日本仏学史研究」第4号，日本仏学史研究会)。P.4

(23)

M

Vous êtes prié d'assister aux convoi et enterrement de Monsieur Fumio Irié, décédé le 30 Janvier 1878, en son domicile rue Casimir-Delavigne 7, Paris, à l'âge de 46 ans, que se feront le Vendredi 1er Février, à 3 heures très précises

On se reunira à la maison mortuaire

De la part de ses amis

なお，日本での墓は島根県広瀬の洞光寺にあり，然達院本源道悟居士，がその戒名である。

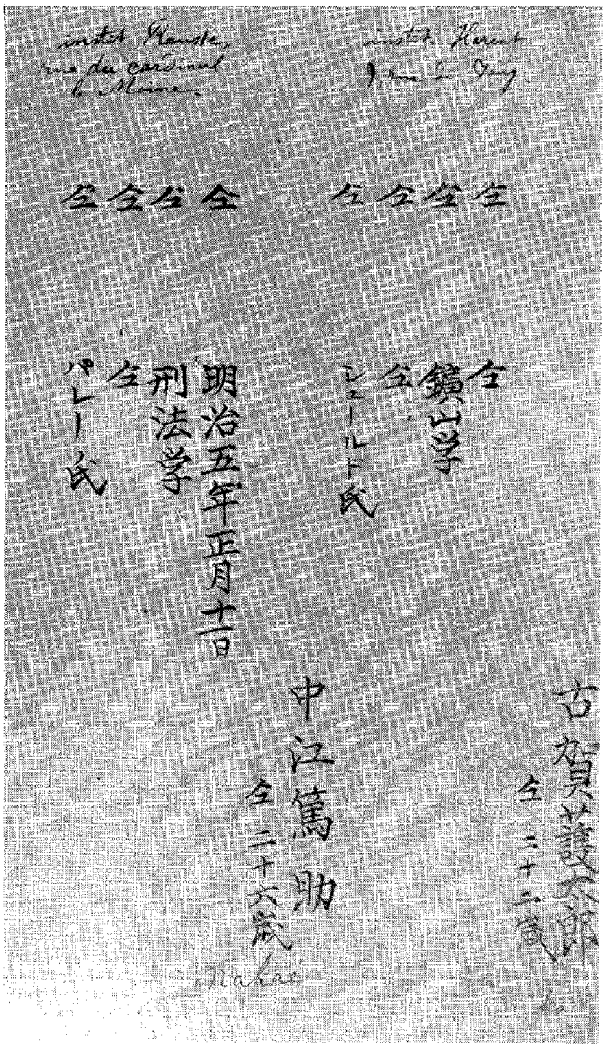
(24) Préfecture de Paris
Cimetière parisien du Sud-Montparnasse
Situation de Sépultare
IRIE Fumio
1–2–1878
13 division 7 ligne Sud
No. 9 ouest 195–1878

# 第2章 フランス留学生の名簿

さて，日本人留学生の総代になった文郎であるが，その役目は，彼の内攻性の性格からも，文郎にとってけっして喜ばしいことではなかった。さらに，留学生の中には，あの風流公子・西園寺望一郎や，放蕩三昧のため，村上英俊の達理堂を破門になった中江篤介などがいて，とても監督することなど出来ない者もいたが，相当数にのぼる年若い者たちには，絶えず世話をしており，この面倒な役目を忠実にはたしている。[1]

さて，当時の日本人留学生にはどんな人物がいて，いかなる学問を修学していたのであろうか。幸い，入江文郎の直筆による留学生名簿が理在残っているので（入江尚子氏所蔵。和紙に書かれてあり，大きさはタテ25cm×ヨコ18cm），それを記してみると，次の通りである。なお，（　）の中は，筆者の追跡調査によって判明したものである。[2]

さらに，留学生の住所が書かれた貴重な資料（入江尚子氏所蔵）を入手することが出来たので，〈　〉の中に示した。




（入江文郎の「留学生名簿」，入江尚子氏所蔵）

## 1. 官費之分

**西園寺望一郎**　　申二十四歳
　仏国著　　明治四年二月六日
　学　　科　　制度学（政治学）
　当時所学　　普通学（一般教養）
　教　　師　　ミルマル氏
　<Institution Marc. 53, rue des Dames. Batignoles>
（のちに公望。出身地，京都。公家華族。明治法律学校教員，東洋自由新聞社長・主筆，各国公使，文相，首相。）

**石丸三七郎**　　同二十三歳
　同　　明治三年十一月廿八日
　同　　築　城（築造学）
　同　　普通学
　同　　ニース政府学校

（兵学寮生徒。出身地，岡山。）

**小坂勇熊**　　同二十三歳
同　　同
同　　隊外士官業務（参謀学）
同　　普通学
同　　サンルイ学校
（のちに，千尋。出身地，岩国。兵学寮生徒。陸軍大学教官。陸軍省軍務局第一軍事課長兼陸軍省参事官。陸軍歩兵中佐。）

**樽崎頼三**　　同二十六歳
同　　同
同　　軍事刊法
同　　普通学
同　　ミルマン氏
（兵学寮生徒。出身地，山口。パリにて明治8年2月17日病死。）

**堀江提一郎**　　同二十六歳
同　　同
同　　同
同　　普通学
同　　コルネーイ氏
（兵学寮生徒。招魂社司。）

**船越熊吉**　　同十九歳
同　　同
同　　大砲（砲兵学）
同　　普通学
同　　サンルイ学校
（兵学寮生徒。出身地，広島。）

**野村小三郎**　　同十八歳
同　　同
同　　隊外士官業務
同　　普通学
同　　デカルト学校
（兵学寮生徒。出身地，岡山。パリで死亡。）

**小国　磐**　　同十七歳
同　　同
同　　土兵学（築造学）

同　　普通学
同　　（仏国政府学校）
（兵学寮生徒。出身地，岩国。陸軍大学教官。陸軍少将。）

**駒留良蔵**　　同
同
同　　法律学
同
同
<M. Koma-Tomé. 16, rue Lord-Byron>
（出身地，沼津。警視庁准奏任御用掛。長崎控訴院検事。）

**安藤直五郎**　　同
同　　明治五年四月
同　　兵　学
同　　普通学
同
<Instit. Preyset Desboeufs. 19, rue Masurel (à Lille)>

**前田弘庵**　　同二十四歳
同　　明治三年正月十二日
同　　農　学
同　　普通学
同　　クエー学校
<Instit. à Couché (dépt. de Vienne)>
（のちに正名。出身地，鹿児島。外務，内務，大蔵省に歴任。山梨県知事。元老院議官。貴族院議員。）

**西直八郎**　　同二十三歳
同　　千八百七十一年三月二日
同　　兵　学
同　　普通学
同　　マルク氏
（出身地，鹿児島。）

**岩下長十郎**　　同二十歳
同　　千八百七十一年四月十六日
同　　未　定
同　　普通学
同　　フブール氏
（出身地，鹿児島。砲兵大尉。）

**渡六之助**　　同二十五歳
　同　　明治三年三月一日
　同　　兵　学
　同
　同　　陸軍大兵学校サンシール
（のちに正元。出身地，広島。陸軍少佐。参謀局諜報提理兼幼年学校次長。大政官書記官。元老院議官等を歴任。貴族院議員。著書に『巴里籠城日誌』。）

**河津祐之**　　同二十四歳
　同　　明治五年四月廿六日
　同　　究理学（物理学）
　同　　普通学
　同　　デマレー氏
（編輯寮六等出仕。出身地，静岡。元老院大書記官。東京上等裁判所詰検事。司法大書記官。函館控訴院検事長。逓信次官。訳書に『佛国革命史』）

**熊谷直孝**　　同二十三歳
　同　　同
　同　　化学
　同　　普通学
　同　　ボンネー氏
　<Instit. Harent. 9, rue de Jouy>
（造船寮九等出仕。出身地，京都。京都府権中属。）

**稲垣喜多造**　　同二十四歳
　同　　千八百七十一年十月三十日
　同　　算術英仏語学
　同　　ボンネー氏塾
（工部省，工作局造船技師・主船寮中師。横須賀造廠所技師。）

**長谷部仲彦**　　同二十三歳
　同　　明治五年五月十一日
　同　　工　学
　同　　普通学
　同　　ギベール氏
　<Chez M. Silvestre Léon. 8, rue de Tarente>

**榎本彦太郎**　　同二十歳
　同　　明治五年四月十五日
　同　　鉱山学
　同　　普通学

同　　ヲルチュス塾
<Pension Hortus. 94, rue du Bac.>

**山口彦次郎**　　同十七歳
同　　同
同　　農　学
同　　普通学
同　　ルノワール氏
<Instit. Marc. 53, rue des Dames. (Batignoles)>

**松原且次郎**　　同十八歳
同　　千八百七十一年三月十四日
（ブリツキセール着）
同　　鉱山学
同　　普通学
同　　ラヒット氏
<Instit. Harent. 9, rue de Jouy>
（南校生徒。出身地，金沢。）

**古賀護太郎**　　同二十三歳
同　　同
同　　鉱山学
同　　普通学
同　　シュールド氏
<Instit. Harent. 9, rue de Jouy>
（のちに袋久平。南校生徒。出身地，佐賀。）

**中江篤助**　　同二十六歳
同　　明治五年正月十一日
同　　刑法学
同　　普通学
同　　パレー氏
<Instit. Reusse. rue du Cardinal le Maine>
（のち兆民。南校助教。出身地，高知。外国語学校長。元老院権少書記官。衆議院議員。「東洋自由新聞」主筆。著（訳）書多数。）

**河内宗一**　　同二十四歳
同　　同
同　　同
同　　普通学
同　　ブランション氏

<Chez M. Winter. Institution Parc-de- Neuilly, Neuilly>

**大田徳三郎**　　同
同
同
同
同
（出身地，広島。陸軍省七等出仕。砲兵大尉。大阪砲兵工廠監務などをへて陸軍中将。）

**柏村庸之允**　　同（廿二歳）
同　　（午ノ十一月廿八日）
同　　（砲兵学）
同
同　　（仏国政府学校）
（兵学寮生徒。出身地，山口。）

**大山　岩**　　同
同
同
同
同
（大山巌。　通称弥助。　出身地，鹿児島。　陸軍士官学校長。　内務大輔大警視。　議定官。　陸軍卿。　参謀本部長。　陸軍大臣。　海軍大臣。　文部大臣。　枢密顧問官等の顕官を歴任。　陸軍元帥。）

**山中一郎**　　同
同
同
同
同
（出身地，佐賀。政治経済学を修学。佐賀の乱で処刑される。）

**松田正久**　　同（廿七歳）
同　　（軍事刑律）
同　　（普通学）
同
同　　（マルク塾）
（西周塾生。出身地，佐賀。軍事学を修学せず，政法に転じたため帰国を命じられる。検事。鹿児島造士館教頭。文部参事官。長崎県会議長。衆議院議員。大蔵大臣，文部大臣，を歴任後。衆議院議長。）

**曽根荒助**　　同
同
同
同
同
（大阪兵学寮幼年舎。陸軍経理学を修学。出身地，山口。士官学校出仕並太政官少書記官。法制局参事官。衆議員書記官長。衆議員議員。各国公使を歴任。その後，司法大臣，農商務大臣，大蔵大臣，臨時外務大臣となり，統監。

**長嶺正介**　　同（十八歳）
同　　（申ノ十月廿日）
同　　（歩兵学）
同
同　　（仏国小学校在留）

## 2. 県費之分

**飯塚　納**　　申二十八歳
仏国着　　明治四年五月廿五日
学　科　　法律学
当時所学　　普通学
教　師　　デヌビール氏
学　費　　千　金
<Chez M. Dlahausse, à la Sorbonne. 15, rue de la Sorbonne par l'escalier 5>
（出身地，島根県。「東洋自由新聞」副社長。詩人。黒竜会。）

**山田虎吉**　　同十九歳
同　　明治三年十一月廿九日
同　　制造学
同　　普通学
同
<Instit. Galtier. 104, rue Amelot>
（または寅吉。出身地，豊津。エコール・サントラールにて土木建築学を修学。工博。）

**山口健五郎**　　同二十三歳
同　　明治四年六月廿八日
同　　鉱山学
同　　普通学
同　　ルフワール氏
同　　千　金
<Instit. Massin. 12, rue des Minimes>

（致遠館に学ぶ。出身地，伊万里県。）

**浅田逸次**　　同二十二歳
同　　同
同　　医　学
同　　普通学
同　　ベナール氏
同　　千　金
＜20, Avenue du Bel-tir. ? Chez M. Silvestre. pension du Trône＞
（出身地，伊万里県。）

**福地鷹次**　　同二十歳
同　　同
同　　法律学
同　　普通学
同　　ボンネー氏
同　　千　金
<Chez M. Bonnel. 26, Bd de la Reine, Versailles>
（出身地，伊万里県。）

**大塚琢造**　　同二十二歳
同　　同
同　　兵　学
同　　普通学
同　　メニール氏
同　　千　金
<Instit. Prétel. 69, rue de Clichy>
（致遠館に学ぶ。出身地，伊万里県。外国貿易並びに博覧会審査官。大正博覧会協会理事。）

**黒川誠一郎**　　同二十五歳
同　　千八百六十九年四月
同　　法律学　巴里法律大学校ニテ修業
学費　　八百四十ドル
<26, rue Monge>
（出身地，石川県。司法少書記官。司法大書記官。外務大書記官兼外務書記官。無任所公使館参事官。行政裁判所評定官。）

**清水金之助**　　同二十八歳
同　　千八百六十九年七月二日
同　　器械学
同　　普通学終り最上等学

同　　アラン氏塾
同　　八百ドル
<Instit. Harent. 9, rue de Jouy>
（誠。金之助は通称。工芸大学に入学。出身地，石川県。東京でマッチ会社「新燧社」設立。）

**岡田丈太郎**　　同十六歳
同　　千八百六十九年七月二日
同　　鉱山学
同　　普通学
同　　クンチアン学校
同　　五百ドル
<Pensionnat des Frères à Passy>
（出身地，石川県。）

**小埜弥一**　　同二十六歳
同　　明治四年五月
同　　化　学
同　　普通学
同　　ジビノー氏塾
<22, rue Maronnière>
（出身地，静岡県。）

**庄司金太郎**　　同十九歳
同　　明治三年十一月廿八日
同　　海　軍（築造学）
同　　普通学
同　　ニース学校
<Lycée de Nice, Nice>
（出身地，島根県。）

3.　自費之分

**蜂須賀万亀次郎**　　申九歳
仏国着　　明治五年三月十九日
学　科　　幼年ニ付末見留無之
当時所学　　普通学
教　師　　マール氏
<Chez Mlle. Sébirot. 199, route d'Orléans au Grand Montrouge>
（式部官。）

**池田　登**　　同二十三歳

同　　同
同　　器械学
同　　普通学
同　　ボンネー氏塾
<Chez M. Damarc,Instit. à Jgny (S.et O.)>

**村上四郎**　　同二十五歳
同　　明治三年十一月廿八日
同　　工　学
同　　普通学
同
<Chez M. Bénard. rue de Paris à Palaiseaux (S.et O.)>
（出身地，山口県。）

**中島精一**　　同二十二歳
同　　明治五年正月十四日
同　　器械学
同　　普通学
同　　シウエー氏塾
（出身地，石川県。）

**前田利同**　　同十七歳
同　　明治五年二月廿四日
同　　兵　学
同　　普通学
同
（外交官。式部官。宮中顧問官。）

**江藤彦夫**　　同二十三歳
同　　明治五年三月十九日
同　　器械学
同　　普通学
同　　ミケール氏

**毛利藤内**　　同二十二歳
同　　明治三年十月廿八日
同　　法律学
同　　普通学
同　　ベナール氏
<Chez M. Bénard. rue de Paris à Palaiseaux (S.et O.)>
（大阪で仏式兵法伝習。出身地，山口県。第百十銀行頭取。）

**新納武之助**　　同十六歳
　同　　千八百六十六年十一月廿九日
　同　　未　定
　同　　普通学
　同　　オルチュス氏塾
（または次郎四郎。出身地，鹿児島県。）

**三刀屋七郎次**　　同二十七歳
　同　　明治五年二月二十日
　同　　未　定
　同　　語　学
　同　　カンール氏
（出身地，山口。）

**中村雄次郎**　　同二十一歳
　同　　明治五年九月
　同　　兵　学
　同　　普通学
　同　　ガルニエ学校
　<Chez M. Garnier. 20, Bourg de Reine. Instit. Garnier>
（出身地，度会県。砲兵中尉。）

**津田霞一郎**　　同二十二歳
　同　　同
　同　　兵　学
　同　　普通学
　同　　ガルニエ学校
　<Chez M.Blanchan. au Vésinet.>
（出身地，和歌山県。）

**小田均一郎**　　同
　同
　同
　同
　同
（出身地，松江。元藩執政。）

**坂田乾一郎**　　同
　同
　同
　同

同

**浦島健蔵**　　同二十一歳
同　　明治五年八月五日
同
同
同

**新田静丸**　　同
同
同
同
同

**多田弥吉**　　同
同
同
同
同

（出身地，和歌山県。砲兵中尉。大阪府鎮台予備砲兵第二大隊第二小隊予備隊長心得。陸軍中尉。田原坂にて戦死。）

その他,「西航備忘録」には，栗本貞次郎（静岡），三浦十郎（佐土原),桂太郎，吉武彦十郎（山口),戸次正三郎（柳川),前田壮馬（高知),小倉衛門介，周布金鎚，光田三郎（山口),大黒屋幸藏，中山譲治，加藤忠七，上村佐七，小佐佐作（常陸処士),藤本屋（出身地不詳),等の名が記載されている。

なお，すでに見てきたように，当時の留学生が学び，体得した新知識の多くの場合，帰国後，すぐにも役立つ文物制度であるのも，この時代を反映していて，はなはだ，興味深いものといえる。

〔註〕

(1) 「現在，残っている入江文書を調べてみると長谷部，榎本，山口の三人の如きは1873年12月16日，直ちに帰国するよう命令が出されたので，1874年1月4日マルセイユ発で乗船する旨，三人が在籍している学校長に宛てた入江の手紙を写しがある。長谷部仲彦と，榎本彦太郎は鉱山学，山口健五郎は専門未詳で，いづれも留学期限が切れたのである。

また，日附及び宛名人はわからないが，山田なる学生が急用でロンドンへ行かなければならないので，明土曜3時以後三日間，学校を休ませて欲しいと校長に宛てたものも見出される。」（第1章の註22のP.3）

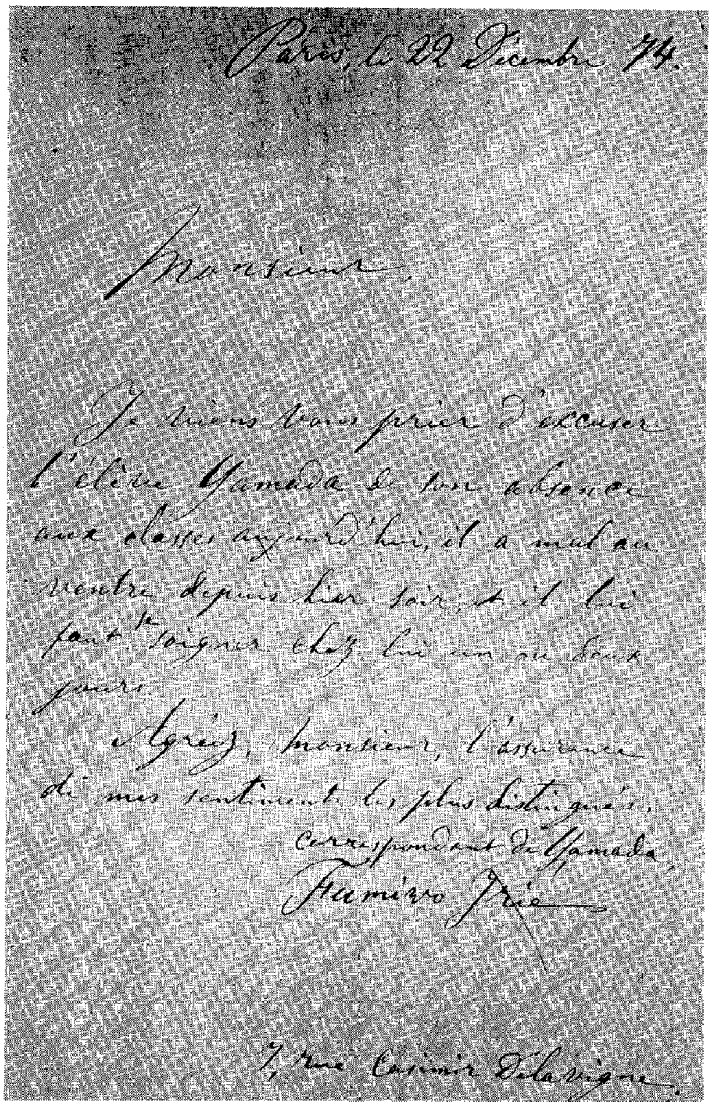
(2) 追跡調査にあたっては，ⓐ『明治過去帳』（大植四郎編，東京美術）ⓑ『大正過去帳』（稲村徹元，井門寛，丸山信共編，東京美術）ⓒ『近代日本の海外留学史』等を参照した。

# 第3章 入江文郎の仏文

明治初期のフランス留学生がどのような仏文を書いていたのか，この問題は日本仏学史関係では大変興味のある問題の一つであろう。しかし，ほんの断片的な紹介はされても，まとまった資料の公開はいまだになされていなかったものである。

ところが，この度，桃裕行教授（立正大学），ならびに，高橋邦太郎教授（共立女子大学）のご協力によって，入江文書 ―とくにフランス語関係―の全文を入手することが出来た。とくに恩師・高橋邦太郎先生からは，これら未発表の仏文資料を，筆者が発表することを快諾してくださったばかりか，入江文郎が，パリの東洋学者会議で講演した時のレジュメ[1]をも，提供してくださったのである。

そこで，これ等の資料をもとに，筆者なりに① 留学生の世話役をしていた文郎が各学校長に宛てた書簡，② 日本のことを紹介した文章，③東洋学者会議での講演の順で整理し，入江文書の一部をここに掲出することにした。


Paris, le 22 Décembre 74.

Monsieur,

Je viens vous prier d'excuser l'élève Yamada de ne [illegible] aux classes [illegible] d'hui, il a mal au ventre depuis hier soir, et il lui faut le soigner chez lui [illegible] deux jours.

Agréez, Monsieur, l'assurance de mes sentiments les plus distingués,

Correspondant de Yamada,

Fumiro Irie

7, rue Casimir Delavigne

（入江文郎のフランス語の書簡）

なお，入江文書の訳については，①②ともそのほとんどを大意訳としたが，③の個所については，文郎の達意なフランス語――フランス人がもちろん手を入れたものとは思われるが――をそのまゝ伝えることを主眼にしたので，補足的な和訳は削除し，省略したことを付記しておく。

## ① 学校宛の書簡

1. Son éducation précédente n'est pas suffisante pour suivre les cours de votre école. Par conséquent, on a décidé qu'il fasse pendant quelque temps ses études préparatoires pour rentrer plus tard dans votre école quand il deviendrait capable d'y faire concurance. Veuillez donc lui accorder de quitter l'école pour le moment . Je vous prie, d'avance, de reprendre vos soins pour ses études quand il se trouvera en état de supporter les méthodes régulières de votre école.

（彼の実力では，貴校の授業にはついて行けません。そこで，予備の勉強をさせ実力をつけさせた後に，お願い致しとう存じますので，しばらくの間，休校させて戴きたく存じます。貴校の授業に堪えられるようになり，再び通学させて戴けます折には，御指導を賜わりますよう，伏して

お願い致します。)

2. Les grandes vacances s'approchent, Monsieur Naroushima passera ce laps de temps hors de l'école mais sans négliger ses études. Veuillez donc lui accorder de quitter demain, le mardi, l'école pour rentrer après les vacances.

Agréez, Monsieur, l'assurance de mes sentiments les plus distingués.

(夏休みが近ずきましたが，この期間中 Naroushima[2] 氏は，決して勉学は怠りはしませんが，学校外で過すことにしておるようです。つきましては，休み明けには帰校致しますので，明日の火曜日に貴校を出ることを御許可いただきますよう，お願い申し上げます。

敬具)

3. J'ai l'honneur de vous exposer que le gouvernement du Japon vient de révoquer la mission de tous les élèves envoyés en Europe par le ministère de l'instruction publique, parmi lesquels l'élève Okada. Il ne peut donc plus continuer ici des études.

Je vous prie par conséquent de l'autoriser de quitter le Lycée aujourd'hui.

Agréez ...

Okada

(文部省からヨーロッパに派遣されている全留学生を，この度，日本政府が取り消しにしたことをお知らせ申し上げます。

それ故，これら留学生の一人であります Okada[3] が，フランスにおいて勉学することが出来なくなりましたので，貴校を退校させて戴きたく存じます。

敬具)

4. le 16 décembre 1873.

Monsieur,

Comme les trois élèves Hassébé, Enomoto et Yamagoutsi sont envoyés en France par la commission de l'exploitation, et par suite d'une modification de l'organisation de la commission, ils viennent de recevoir une Dépêche télegraphique par laquelle ils sont obligés de retourner au Japon tout de suite.

Vous savez combien Yamagoutsi est content d'être dans votre école et partant je suis aussi; je vous remercie beaucoup. Mais c'est à mon grand regret que je viens vous prier d'accorder à Yamagoutsi de quitter l'école le 20 courant, parce que les trois élèves ont décidé de partir le 4 janvier 1874 de Marseille.

(拝啓,

1873年12月16日

我国の開化政策によって， Hassébé[4] Enomoto[5] Yamagoutsi[6] の三名の留学生が，フランスに派遣されておりましたが，政策変更のため，至急彼等に帰国を命ずる電報を受け取りました次第です。

ご存知の様に， Yamagoutsi 君は貴校において勉学をすることを望外の喜びと致しておりまし

たし，小生も同様の感をいだいておりましたので，幾重にもお礼申し上げる次第でございます。しかしながら，三君は来年の1月4日にマルセイユを出航致すことになり，この上なく残念ではございますが，今月の20日付をもって Yamagoutsi 君を退めさせて戴けますよう，お願い申し上げます。）

5. Lundi 24 Février 73.

Monsieur le Directeur de l'institution massin, Elève Yamakoutsi est venu chez moi depuis samedi soir pour passer les vacances, et il restera jusqu'à demain mardi.

（Massin 学院の院長先生へ

73年2月24日，月曜日

生徒山口君[7]は，休暇を過すため，土曜日から小生の所に来ております。明日の火曜日まで滞在致しますので，ご通知申し上げます。）

6. Paris, le 15 mai 1873.

Monsieur le Directeur,

J'ai l'honneur de vous remercier de la communication que vous avez eu la bonté de m'adresser à propos des fêtes de l'ascension où les cours seraient interrompus.

Veuillez donc, Monsieur, accorder à Mr. Naroushima de sortir à 5 heures du soir le Mercredi 21 courant pour rentrer à minuit et demi 22 Jeudi, sans coucher à l'école, mercredi soir.

Agréez, monsieur le Directeur, l'assurance de ma considération très distinguée.

Irié

（ 1873年5月15日，パリにて

校長先生へ

授業が休みとなる昇天祝日についてお知らせ戴き有難とうございました。

成島氏に，今月21日，水曜日の夕方5時に貴校の宿舎を出て，翌22日木曜の，夜12時30分に帰校することをお認め戴きたく存じます。

敬具

入江）

7. J'ai l'honneur de vous exposer que l'élève Yamada se trouve obligé de se rendre chez son ami à Londre par une affaire importante et très pressée.

Je viens donc vous prier de vouloir bien lui accorder un congé de trois jours à partir de demain Samedi à midi.

（貴校の生徒山田君[8]は重要な急用のため，ロンドンの友人の所に行かねばならなくなったことを，御通知申し上げます。

明日の土曜正午から三日間の休みを彼に与えて戴きますよう，お願い申し上げます。）

8. Paris, le 24 Février 1873.

Monsieur,

Comme je suis nommé correspondant des élèves japonais en France en remplacement de Monsieur Kourimoto nommé Secrétaire de l'Ambassade, je viens de recevoir de lui une lettre dans laquelle il m'a chargé de vous envoyer la somme de deux mille francs (2.000) qu'il a dû vous remettre.

Je vous envoie maintenant la dite somme. Mais cette somme, a ajouté Mr. Kourimoto, n'est pas exactement conforme à celle que vous.

(　　1873年2月24日，パリにて

拝啓

小生，この度，書記官に任命られました Kourimoto 氏[9]にかわって，フランス在住の日本人留学生の総代に任命されました。

なお，小生，氏から彼が貴殿にお渡しすべき2,000フランを,貴殿にお送りするようにとの手紙を受け取りました。

そこで上記の金額をお送り申し上げますが，さらに氏は，これは貴殿にお渡しすべき金額と正確には同額ではないものと，つけ加えております。)

9.

Paris, le 21 Décembre 1873.

Monsieur,

Je vous remercie sincèrement de vos soins que vous avez prodigués pour mon compatriote Naroushima. Par une circonstance il vient de prendre la décision de retourner prochainement au Japon pour revenir tôt ou tard en France où il attache son intention d'achever ses études commencées.

Je viens donc vous prier de vouloir bien lui accorder de quitter l'école le 24 courant.

Veuillez, Monsieur, agréer l'assurance de ma parfaite considération.

Correspondant de (ママ) élèves japonais

Irié.

(　　1873年12月21日，パリにて

私の同胞成島氏に戴きましたお世話に対しまして，心からお礼申し上げます。事情により，彼は近く帰国することになりましたが，フランスで始めました勉学を成しとげるため，いずれ又もどってくるものと存じております。

それ故，今月の24日付をもって貴校を退校させて戴きますことをお認め下さいまするよう，お願い申し上げます。

日本人留学生総代（監督者）

入江）

10.

Monsieur le Directeur de l'institution Massin,

L'élève Yama-kouti a été depuis le 4 Dimanche chez son ancien Daïmio pour lui servir entreprète, et il entre aujourd'hui mercredi.

Agréez, Monsieur le Directeur, recevoir l'assurance de mes sentiments les plus distingués.

le 7 mai 73.

Correspondant des élèves japonais

Irié.

( Massin 学院の院長先生へ。

貴校の生徒山口君は，4日の日曜日から，彼の旧藩主のところに通訳として出むいており，今日水曜に戻りますので，御通知申し上げます。

73年5月7日。

日本人留学生総代（監督者）

入江）

11.

Monsieur le Directeur,

J'ai l'honneur de vous connaître personnellement aujourd'hui, et j'ai le plaisir de voir Monsieur Yamagoutsi être élève de l'institution dirigée par vous il est bien content et partant je le suis aussi.

Mais comme je n'ai pas l'habitude de parler le français, je ne peux pas vous communiquer ma pensée; voici une conversation écrite qui en faisant la jonction de ma bouche montre le but de l'étude de monsieur Yamagoutsi.

Les élèves Japonais à Paris s'attachant chacun à l'étude respective, il faut que Monsieur Yamagoutsi s'occupe particulièrement de la science: mathématique, physique, chimie, dessin, etc. Il faut y ajouter l'étude de la grammaire française, mais il ne faut pas perdre le temps dans la littérature, qui n'est pas de la première nécessité pour lui; la grammaire française parce qu'il faut bien apprendre de parler pour suivre plus facilement les cours de la science, non pas la littérature parce qu'il est impossible de devenir un bon écrivain en français, c'est ce qui n'est pas de la domaine de ses études.

Il est intelligent et infatigable, j'espère qu'il fasse rapidement des progrès dans la science et qu'il soit bientôt accueilli dans l'école centrale. Pour lui faire atteindre ce résultat, veuillez, Monsieur, vous donner beaucoup de peine, je prends la liberté de vous en prier.

Irié.

( 院長先生

小生，本日，個人的にお手紙を差上げますことを光栄と致すものであります。さらに，山口氏がご貴殿のご指導なさる生徒であることを喜ぶものでございます。彼も又そのことを大変喜んでおります。

しかしながら，小生は普段フランス語で話しをする習慣をもちませんので，小生の考えておりますことを口頭にて述べることが出来ません。それ故，山口氏の勉学の目的について小生がお話し致す用件を手紙にしてお伝えする次第です。

パリ在住の日本人留学生は各々自分の専門の研究を致しておりますが，山口氏は特に理学を専攻致しておる者でございます。すなわち，数学，物理，化学，製図等々であります。その為には

仏文法も必要ではありますが，彼にとって不用であると存じおります文学には時間をかける必要はないと存じます。

理学の講義を受けやすくするためには，話し方を習得する必要がございますし，仏文法は当然なことに大切なのでありますが，フランス語の文章家（作家）になるのではないのですから，文学の講義には彼にとって必要とは思われません。まったくこれは彼の研鑽領域には入っていないことであると存じます。

彼は頭脳も明晰ですし，その上，努力家でもありますので，理学方面に早い進歩を示し，やがては，エコール・サントラールに入れてもらえることを小生は希望致すものであります。

彼がこの目的を達成できますよう，何卒よろしくご指導の程，お願い申し上げます。

入江拝）

12.

Paris, le 6 Janvier 1874.

Monsieur,

J'apprendes par la lettre que vous m'avez fait l'honneur de m'adresser, que l'élève Chimizou se trouve dans une triste position en obtenant des notes regrettables à ses examens, et je vous remercie de votre conseil pour son intérêt.

Je me présenterais sur le chap à votre bureau pour m'informer en détail de sa situation,mais pour une indisposition je ne peux pas vous visiter pour ce moment-ci. En interrogeant l'élève Chimizou et puis l'élève Yamada je suis convaincu que le bon concours d'un répétiteur est nécessaire pour la situation actuelle de Chimizou; mais à mon grand regret c'est absolument impossible de lui accorder des frais exceptionnels. Par conséquent il doublera ses efforts et fera de son mieux mais s'il ne peut pas parvenir à améliorer sa situation el se trouvera classé parmi les impuissants sans se plaindre parce que c'est à cause de sa propre incapacité.

Agréez, Monsieur le Directeur des études, l'assurance de mes sentiments les plus distingués.

Le correspondant des élèves japonais

Irié.

（拝啓　　1874年1月6日，パリにて

貴殿から戴きましたお手紙により，Chimizou君[10]が試験の成績が悪く，困った状態にあることがわかりました。彼に関しての，ご貴殿のお知らせに対し厚くお礼申し上げます。

彼の様子を詳しく御伺い致すため参上すべき所，小生の身体の具合がおもわしくなく，現在の所うかゞえませんのが残念でございます。

Chimizou と山田の両君に事情を聞き質しましたところ，　Chimizou　君は補習を受けるべきだということが判りました。しかし残念ながら彼に特別に授業料を捻出致すのは不可能であります。したがって，彼は今までの倍も努力をし，自己の最善をつくした上で，それでも尚，成績が向上しない場合には，どうぞ落第にさせて戴いて結構でございます。彼自身の実力不足なのですから，仕方がないことと存じますので。

敬具

校長先生へ

日本人留学生総代（監督者）

入江）

## ② 日本紹介の文章

1.

Paris, 18 juillet 72.

Monsieur,

J'ai reçu votre lettre par laquelle vous voulez me faire l'honneur de m'accorder un entretien, mais je ne sais jouir ces plaisirs parce que je ne parle le français que très peu. Je vais cependant vous répondre en écrivant, il vous faudrait bien de peine de deviner ce que je dis parce que je ne peux pas non plus bien écrire en français.

L'état de la médecine japonais est encore en chaos. Depuis quelques dizaines d'années les médecins Hollandais ont initié aux Japonais la méthode médicale européenne,qui reste encore imparfaite. Je n'ai rien à vous donner des enseignements sur l'état de la médecine japonais parce que ce n'est pas assez développé.

Veuillez agréer, Monsieur, l'assurance de mes sentiments les plus distingués.

Irié.

à M. le docteur Entrieux, médecin militaire belge.

(　　72年7月18日，パリにて

拝啓

御手紙拝見致しました。あなたと御話出来ることは大変うれしく思いますが，フランス語をほんの少ししか話せませんのでこの喜びに応ずることが出来ません。

そこで書面により御返事を差上げます次第です。なお，フランス語を書くのも上手に出来ませんので，判読しにくいとは存じますが，私の云わんと致すことを適当に御想像願わしく存じます。

さて，お尋ねの日本の医学の状態は，いまだ混沌と致しておりますが，数十年前にオランダの医者が我国に西洋医学の方法——と申しましてもまだ不完全ではございますが，——を導入致したものであります。

私は我国の医学の現況について，あなたに御教え致す何も持たないのが残念でなりません。それが未開発の状態にありますので，何卒お許し戴きたく存じます。

敬具

入江より

ベンギー陸軍々医，　Entrieux 殿)

2.

Monsieur,

Vous désirez que je fasse quelque observation sur le *Do-Yô* dont un français vous a demandé l'explication; rien n'est plus facile mais ça ne se peut dire sans rire.

Avant de commencer l'explication je fais en passant une petite note sur l'étymologie. Ces deux mots japono-chinois *Do*, la terre (élément), et *Yo*, faire fonction, s'emploient vulgairement chez les Japonais, mais l'origine en est les mots chinois *Do-Wau* (　); *Do*, la terre et *Wau*, être puissant, je les traduirais en français: *la présidence de la terre* parce que le *Do-Yo* signifie l'époque du plein

pouvoir de la terre, élément personnifié. Ainsi dirait-on que le président du printemps est le bois, celui de l'été est le feu etc. Ca veut dire que les cinq agents dirigent les phénomènes pendant leur présidence respective.

En voici l'explication sommaire. Les anciens Chinois adoptèrent les cinq éléments.

（あなたが聞かれた土用　Do-yo　について説明致します。非常に簡単なことで，まことに御笑い草なのですが。説明を致す前に語源についてちょっと述べておきたいと思います。土用という日・支語は，土（元素）と用（役をする）から成っており，我国では一般に用いられているものなのです。

しかし，もともとは Do-Wau という支那語で，Do が土，Wau が強いという意味ですので，フランス語で云えば「土の支配期間」，すなわち「擬人化された元素・土が力に満ちている時期」を示していると申せましょうか。

このように春の主が木，夏のそれは火…。すなわち，5元素が自分の支配期間に全現象をつかさどることを意味していると云えるのです。

以上がごく簡単な説明なのですが，古代の支那人はこの5元素を物事のすべてに適用させていたものです。）

## ③　東洋学者会議での講演

1.

M. IRIE FUMIO (Japon): Il y a, dans mon pays, deux opinions différentes au sujet de la prononciation *go* des caractères chinois (*go-won*).

Les uns disent que le gouvernement japonais fit venir, en l'année 306 de l'ère européenne, des tisseuses d'une certaine région de la Chine appelée 呉 *Go*; et que ces ouvrières répandirent au Japon la prononciation de leur pays. Or *Go* était l'endroit qu'on appelle aujourd'hui Nanking.

Les autres disent que les religieuses de *Go* sont venues au Japon comme missionnaires du bouddhisme, et qu'elles ont enseigné au Japon leur prononciation.

Le *Go* était un pays très-peuplé et très-florissant, dont la capitale était une ville de science, de commerce et d'industrie. Les habitants disaient que la prononciation de 漢 *Kan* était un patois, et le peuple du Nord soutenait le contraire; c'était comme la différence de prononciation qui existe entre le midi et le nord de la France ancienne. Et, depuis, le *Kan-won* l'emporta.

Dans les transcriptions phonétiques de livres bouddhiques, on trouve beaucoup de sons de *Go* qui correspondent mieux que la prononciation de *Kan* aux mots primitifs indiens.

Quelques mots sont prononcés au Japon suivant la prononciation de *Tau.* Ainsi 明, comme nom de dynastie chinoise, ne se lit pas *mei* ni *myau,* mais *min;* exemple: 明の代 *Min no yo* ≪les règnes des Ming≫.

(Prononciation japonaise des signes chinois. p.p 238 ~ 239)

2.

M. IRIE (Japon): Plusieurs membres du Congrès ont bien voulu appeler mon affention sur quelques documents chinois relatifs au Japon, et ils m'ont signalé, entre autres faits erronés que renferment ces documents, une phrase en quelque sorte stéréotypée que l'on rencontre au début de tous ces documents, lesquels d'ailleurs, sont des copies les uns des autres . Dans cette phrase, il est dit: ≪ L'empire du Japon est le pays de *Wa-do* de l'antiquité; ses souverains prennent 王 *Wau* pour leur nom de famille. ≫ Ce passage a soulevé, avec raison, des doutes dans l'esprit de notre savant président, M. Léon de Rosny, et c'est sur son invitation que j'ai l'honneur de vous communiquer les explications suivantes:

*Wado* signifie les esclaves de *Wa.* 和 *Wa* est un nom du Japon dont on se sert dans les mots composés, et les Chinois y ont ajouté le mot *do* qui veut dire ≪ esclaves. ≫ Cette dénomination dérisoire se trouve, pour la première fois, dans l'histoire des premiers *Han* (cinquième dynastie de la Chine). Orgueilleux de leur civilisation plus avancée que celle de leurs voisins, les Chinois ont donné ce sobriquet aux Japonais, parce qu'alors les Chinois regardaient tous les étrangers sans exception comme des barbares, des êtres inférieurs et même presque des animaux.

Voice la vérité:

La maison de l'empereur du Japon n'a pas eu de nom de famille. Suivant la tradition nationale, on n'avait pas besoin du nom de famille pour la maison mikadoyale, car le noms de famille, ayant pour effet de distinguer les familles les unes des autres, ne sont utiles que quand il s'agit de plusieurs familles, soit simultanées, soit successives; or il n'y a au Japon qu'une seule dynastie ≪ issue du Ciel ≫, qui ne doit jamais subir de changement, comme il y en a eu souvent ailleurs et surtout en Chine. En effet, une seule et même famille impériale a duré sans interruption et dure encore depuis son fondateur *Zinmu,* 660 ans avant Jésus-Christ, jauqu'à nos jours.

Il est d'usage au Japon, depuis les temps reculés, que tous les enfants d'un mikado, excepté le prince héréditaire (*taisi*), prennent le titre 王 *Wau* qui s'ajoute après leur nom individuel. Ce privilége est accordé jusqu'à leurs cinquièmes descendants, et les sixièmes n'ont aucun titre. Mais il y a les quatre maison de *Sin-wau* ≪ prince du sang ≫ qui conservent leur titre héréditaire et peuvent monter au trône si le mikado meurt sans laisser d'enfant mâle.

C'est pour cela, il me semble, que l'auteur chinois des documents en question s'est trompé en prenant *Wau* pour le nom patronymique de la maison souveraine du Japon.

(Les Peuples étrangers connus des anciens Chinois. p.p 375 ~ 377.)

〔註〕

(1) "Congrès international des Orientalistes" (Paris—1873) に掲載されていたものであるが，高橋邦太郎教授によって発見された。

(2) 入江文郎直筆の「留学生名簿」には，成島とだけあってプレノンが記入されていない。
なお，同名簿によれば，成島の住所は，「école superieure du commerce. 102, rue Amelot.」となっている。

(3) 岡田丈太郎のことである。

(4) 長谷部仲彦（工学専攻）。

(5) 榎本彦太郎（鉱山学専攻）。

(6) 山口彦次郎（農学専攻）あるいは同健五郎「鉱山学専攻」のいずれかと考えられるが，おそらくその専門分野から推測して後者・山口健五郎であろうと思われる。

(7) 「留学生名簿」の住所欄にMassin学院内とあるので，　山口健五郎であることに間違いないであろう。

(8) 山田虎吉のこと。

(9) 栗本貞次郎。

(10) 清水金之助のことであると思われる。

# 第3部　山本松次郎

# 第1章山本松次郎の生涯

(山本松次郎)

長崎における最初のフランス語学習が，文化5年（1808）2月，6名のオランダ通詞達によって開始されたことは，すでに記述した通りである。[1]ただ残念なことに，この勉学はその後中断することを余儀なくされたが，慶応元年（1865）8月，済美館（明治元年より広運館と改称）において，再開される運びとなった。[2]

その時代に，この学問所で，フランス語の教育を受け，後に同校で教鞭を執った者に山本松次郎がいるが，この人物に関しては専門家の間でも，幻のフランス学者と呼ばれて久しく，その業績もまったく明らかにされていなかったのである。

しかしながら幸運なことに，彼に関する文献としては最高のものと言うべき貴重な資料を，その直系の方から入手することが出来た。そこで，この資料を手掛として，地方の代表的なフランス学者が，明治日本の近代化が進行していく過程で，如何に時流に対応し，さらに洋学者としての役割を果たしていったかを，ここに述べてみたい。

従来，日本仏学史の研究がややもすれば，東京——旧幕時代の江戸を含めて——を中心に活躍したフランス学者に，焦点をあて過ぎる嫌いがなかったとは言えない。これでは，学問分野としてかなり片寄ったものに陥る危険性も存在すると思われるので，その点からも，この小稿が，上記の欠点を幾分でも補うことが出来ればと願うものである。

なお，山本松次郎に関する資料は，かなりの分量にのぼり，それも当時の洋学者によく見られる傾向として，フランス語は勿論のこと，ドイツ語，英語，さらには漢学の領域にまで及ぶというものなのである。それ故，ここで，その総てについて触れることは，紙数の上からも不可能なことである。そこで，本稿では，フランス語関係のもののみに限定して，報告せざるを得なかったことを付言しておく。

## 1. 生い立ち

山本松次郎[3]は，彼自身の筆になる「晩翠慶歴」によれば，弘化2年（1845）1月15日，長崎表の紺屋町12番戸において，山本晴海[4]の第5子として誕生している。

嘉永3年（1850）1月，松次郎が5歳の時，父・晴海が江戸町で開塾していた私塾・柿蔭古屋において，はじめて教育を受けた。その教育は，当時の伝統的な教育方法にしたがって，漢籍の入門書から開始している。

さらに，安政2年（1855）1月から，同5年（1858）7月まで，すなわち，11歳から14歳まで，東築町の志方民助，および，その子である俊三の私塾において習字を学んでいる。傍ら，柿蔭古屋にも通って，漢学を研鑽しているが，その進歩は目覚ましく，四書の輪講に加わったり，詩

文の添削などを受けるまでに上達した。

なお，松次郎は今まで修業してきた漢学を廃して，万延元年（1860）1月から，医学および蘭学の学習を始めることになったが，それも，時代の流れが急速にその速度を早め，本格的な洋学時代に入っていたからなのであった。ときに松次郎16歳のことである。師匠は，諏訪町に居住していた，大村藩医・村瀬杏庵であり，彼の私塾でオランダ文法[5]および，医学の講義を聴いている。[6]

文久2年（1862）3月から，同年9月までは，オランダ語を専門に勉学をする必要上，大村藩医・長与専斎の外浦町の私塾で句読を受けた。傍ら，村瀬杏庵の塾においてもオランダ文法の輪講に加わっている。さらに，この年の9月から，同3年（1863）4月まで，長与専斎に従って大村藩城下の片町に行き，そこで，「荷蘭学校読本」，「格致問答書前篇」などの翻訳に関する指導を受けている。また，同年5月から，元治元年（1864）3月に至る期間は，広島藩加茂郡仁方村戸田の医者・三刀玄寛について，訳読の指導を受けることになったが，オランダ語にもようやく精通してきた松次郎は，その語学力をおおいに発揮して，するどい質問を発している。[7]この年，20歳になっていた松次郎は，はじめて九州の地を離れて遊学をし，大阪堂島の大村藩邸に寓居して，緒方郁蔵について物理学を学んだのである。[8]元治元年の3月から4月のことである。

蘭学をさらに極めようとする彼の気持は，より一層の探究心を彼に与えることになる。すなわち，同年8月から慶応元年（1865）7月までの約1年間の修学もその一例であろう。

長崎の小島郷にある近代的な医学校において，御雇教師・勃度英[9]より内科学，眼科学，外科学の講義を聴き，さらに，同校の塾長であった，佐賀藩医・水町三省，および，相良弘庵の両名について，訳読の指導を受けている。[10]

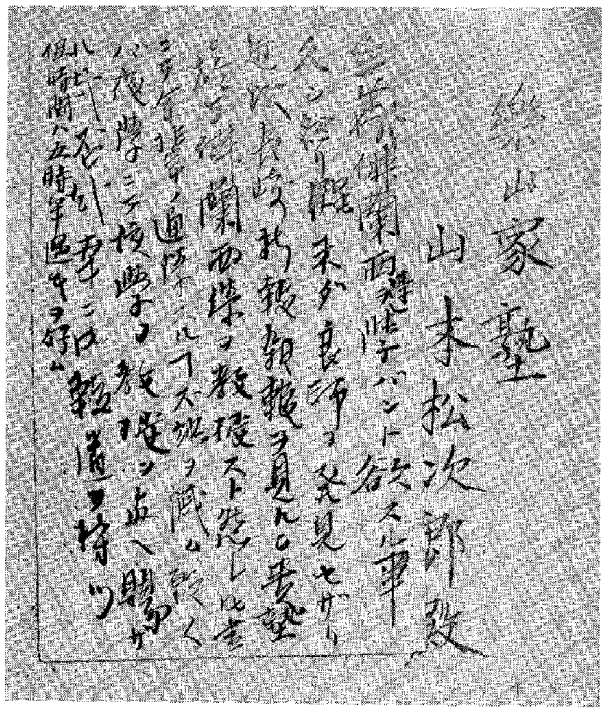
## 2. フランス語の学習歴

さて，山本松次郎が，おおくのフランス学者がそうして来たように，いつ頃からオランダ語および医学を廃して，フランス語の学習に入ったのであろうか。「晩翠慶歴」は記している。

「慶応元年八月十五日ヨリ同三年十月下旬（即チ維新ノ際）ニ至ル迄ハ（佛朗須学専修ノ為メ蘭学及ヒ医学ヲ廃シ）本県本区新町ノ済美館ニ就テ御雇教師ペチジャン氏[11]フィーゲ氏[12]及ヒ佛語教長平井希昌氏[13]教員亡志築龍三郎氏ヨリ尋常教則（メトードフワミリエール著述者ノ姓名ハ忘レタリ）エフペーベ社編輯ノ佛朗須文源（ガラメール，フランセー，エレマンテール）等ノ句読ヲ受ケ，ノエル氏シャプサル氏ガ佛朗須文典（ヌーウェル，ガラメール，フランセー），コルタンベル氏ガ近世地理小程（ペチー，クール，ズ，ヂョーガラフィーモデルン）ブード，ズ，モンウエル氏ガ化学告示（ノション，ズ，シミー）等ノ疑義ヲ質ス。

明治元年正月十五日ヨリ同四年十二月廿四日ニ至ル迄ハ本県御雇教師フルベッキ氏[14]ヂュリー氏[15]ニ本区旧西邸跡広運館ニ就テブード，ズ，モンウエル氏が理学告示（ノション，ズ，フィジク）ヂェリー氏が神代小史（ペチー，クール，ヂストアール，ユニウエルセン）上古小史（ペチー，イストアール，アンシャン）中世小史（ペチー，イストアール，モイヤナーヂ）近世史（イストアール，タンモデルン）——及ヒエフペーベ社編輯ノ教戯読本等ノ疑義ヲ質ス。

同年同月廿五日ヨリ同五年三月廿三日ニ至ル迄ハ大浦居留地ノ橋畔ニ寓居スル佛国陸軍士官ドーフィン氏ニ就テ一世那北列翁氏ノ兵法及ヒ意見書（マキシーム，ズ，ゲール，エ，パンセー，ズ，ナポレオンプレミエール）三世那北列翁氏ガ北部独逸同盟国ノ兵制告示（ノット，ロルガニサシヨン，ミリテール，ズ，ラコンフェデラション）ノ疑義ヲ質ス。」



（「楽山家塾」への入塾願，山本晴雄教授所蔵）

以上が，松次郎のフランス語の学習歴（年令的には20才から27才まで）ということになるが，「晩翠慶歴」によれば，「……当時制度末タ定マラサルト志業末タ終ヘサルトヲ以テ卒業証書及ヒ免許状等ヲ有セス」とあって，いかにも謹厳卒直な性格が伺われる。

次に，職歴を簡単に記しておくと，次の通りとなる。

「慶応三年卯七月，済美館教授方助申付勤候内御扶持方三人扶持被下之，長崎済美館」を最初に，明治2年（1869）4月，長崎府広運館仏語訓道を申付けられ，さらに，同年12月，大句読を申付られ官禄26石下賜されている。この頃の生徒に西園寺公望，[16]井上哲次郎，巨智部忠承等がいて，山本松次郎の教えを受けている。

明治3年（1870）には，外務省より要請があったが，病気のため出仕することが出来なかった。翌年の明治4年（1871）6月には，1等句読となり，松次郎の語学力はおおいに認められたが，同年12月に広運館変更の為，職を辞さねばならなくなった。その後は，直接フランス語を教える機会にも恵まれず，明治5年（1872）のある時期には，日見村里正兼戸長なども申付けられている。

明治7年（1874）2月から，司法省翻訳課において14等出仕に補せられたが，何故か司法省での勤務は松次郎には適さず，翌年（1875）の11月4日には依頼退職している。これも，「人と為り卒直謹厳人を憚らず，言行世人の意表に出づるもの尠からず往々畸人を以て称せらる，されば直言を以て時に上司と合はざれ共敢て意に介せず」[17]の故ででもあったのであろうか。

その後，以文会社新聞の編集をしたり，脩立社産業雑誌の編集長をしていたが，明治11年（1878）10月，恩師・平井希昌の招きによって上京し，明治政府の為にフランス語書の翻訳などをしたが，病気によって帰郷せねばならなかった。明治13年（1880）5月，ようやく松次郎は教育職に任ぜられることになった。すなわち，「嘱長崎県師範学校助訓之任，月俸金十円交附候事，長崎県」，がそれである。同15年（1882）には，同校の2等助教諭となり，さらに16年（1883）には，1等助教諭に任ぜられたが，明治19年（1886）4月1日，依願免本官となった後は再び出仕せず，すでに開塾していた楽山家塾（漢学塾）[18]の経営に専念することになった。傍ら，東山学院，および，羅甸学校などにも出講していたが，明治35年（1902）1月4日，故郷・長崎の地でその生涯を閉じたのであった（墓所は同市内の皓台寺である）。時に57歳であった。

山本松太郎の語学に対する才能，さらには，その人的関係を考慮に入れるならば，明治政府のもとでの活躍を当然期待されるが，健康に恵まれず，長崎の地から出られなかったのは，残念なことであった。

〔註〕

(1) 拙稿「Les origines de l'étude du français au Japon」（創価大学文学部論集，第4巻第2号）参照。

(2) 『増補訂正・幕府時代の長崎』（名著出版，P．220）

(3) 松次郎は通称であり，諱は良木，又は晴茂，後には貞幹。さらに，霞松，鶴湊，藍水訳史，火州後学，観瀾舎などの号があったが，晩年には晩翠と号していた。

(4) 通称清太郎。名は逸，字は無逸，秋村，又は淡斎と号した。45歳の時から晴海と改めた。
文化元年12月17日，長崎奉行組下，船番職・竹内良太夫の長子として誕生したが，成長した後，西洋流砲術を高島秋帆に，儒学を広瀬淡窓について学んだ。30歳の時より私塾を開いて子弟の教育をしていたが，慶応3年2月15日歿す。64歳であった。

(5) 「晩翠慶歴」には,「ラフゲス氏等荷蘭文典（ネーデルドイツ，スペラーク，キュンスト）ノ句読ヲ受ケ」とある。

(6) 同上。「……合信氏が訳スル所ノ内科新説婦嬰新説全体新論博物新編及ヒ緒方洪庵氏カ訳スル所ノ病学通論等……」。

(7) 使用した教科書は,「イソールヂング氏ガ著ス所ノ理学提要（原名ハ之ヲ忘ル）及ヒウエーランド氏ノ生理書（メンセン，ナチュールレール）」であった。

(8) 同上。「蘭人某（姓名ハ之ヲ忘ル著ス所ノ物理易知（ナチュール，ケンニス）」。

(9) **Bauduin, Antonius Franciscus.**　オランダ人。

(10) 使用教科書,「カンスタット氏カ著ス所の治療書（ヘネース，キュンデ）及ヒワフネル氏ガ化学書（シケーキュンデ）」。

(11) **Bernard T. Petitjean.**　フランス人。

(12) 不詳。

(13) 通称義十郎。天保10年，長崎に生れる。唐通詞をへて後に通弁御用頭取となる。維新後は明治政府に出仕して大政官大書記官にすすんだ。さらに，弁理公使としてアメリカに駐在したが，明治29年に没した。訳書に,『万国公法』がある。
なお，中江兆民も弟子の一人であり,「慶応元年，兆民はその学才を認めた細川の推薦で，英学修学のために，藩の留学生として，長崎におくられた。彼はここではじめて平井義十郎についてフランス語を学んだ。」（桑原武夫編,『中江兆民の研究』,岩波書店，P.24）

(14) **Guido Fridolin Verbeck.**　アメリカ人（オランダ系）。

(15) **Léon Dury.**　フランス人。

(16) 「1869年（明治2）12月，フランス留学準備のために，北山望一郎と名のって長崎に遊学し，広運館に入学した。それから，渡仏前のおよそ1年の間，ジュリーや名村泰蔵，山本松次郎からフランス語を学んだ。」（重久篤太郎著,『お雇い外国人（教育・宗教）』，鹿島出版会，P.121）。

(17) 『長崎県人物伝』(長崎県教育会編)。P.P.633～634。

(18) 「楽山家塾名簿」によれば，入学を希望する生徒の中には，わずか数名ではあるが，フランス学を修学するものもいたことが，判明した。

# 第2章　辞書の解説

## 1.　「佛語荘嶽・其之一」

「佛語荘嶽」には同名の字書が2冊ある——仮りに其之一，および其之二とする——が，その内容が異なるので，別種の書として解説をすることにする。なお，どちらも部門別分類による和仏字典であるが，出版されなかったが為に，この草稿がいつ頃執筆されたかについては，明らかではない。

「佛語荘嶽・其之一」は，青表紙，左袋綴の和装1冊本である。縦20.6センチメートル，横13.3センチメートルの寸法で，紙数は墨付丁数が98丁からなっている。題簽は「佛語荘嶽」と記されてあり，見返しには「佛語類選，鶴湊山本松晴茂編述」と朱書されている。

さらに，記述の便宜上，同稿の構成内容に関して，順をおって紹介してみると，次の通りである。

一瞥すると，まず最初に気づくことは，一種の発音の部——「佛語荘嶽」では，母韻，子韻さらに合韻というように分けている——とも言うべきものに，30丁もの紙数を費しているのが目につくところである。

さて，いよいよこの字書の内容について触れることになるが，詳細に検討した結果，次のことが判明したので，以下に報告する。

なお，原文では最初にフランス語が書かれ，後に日本語という順序になっているので，一見すると仏和字典のように思われる。しかしながら，この字書で使用されたフランス語の単語，および，日本語のみが記入されてあって，それに相当するフランス語が配置されていない例などから考えても，前述したように，和仏字典であることは間違いないところであろう（記述の都合上，本稿では，日本語を最初に記し，次にフランス語という順序にかえた。さらに，(　) は筆者が付したものであるが，これは原文において空欄を示すものである）。

「名　辞　類」

（天文部）　64語

| | |
|---|---|
| 月 | lune, f |
| 星 | étoile, f |
| 雲 | nuage, m |
| 風 | vent, m |
| 霜 | gelée blanche, (　) |
| 夕陽 | (　　) |
| 満月 | plaine lune, (　) |
| 梅雨 | (　　) |
| 寒 | froideur, f |
| 北 | nord, m |

（地理部）　64語

| | |
|---|---|
| 街坊 | rue, f |
| 道路 | chemin, m |
| 方角 | région, f |
| 山 | montagne, f |
| 海 | mer, f |
| 湖 | lac, m |
| 洋 | océan, m |
| 港 | port, m |
| 江 | golfe, f |
| 浜 | rivage, m |

（神仏部）　64語

| | |
|---|---|
| 政神 | thémis, ( ) |
| 軍神 | mars, m |
| 農神 | cérès, ( ) |
| 天人 | ange, ( ) |
| 仙士 | génie, m |
| 法王 | pape, m |
| 僧正 | cardinal, m |
| 乞力思 | chrétien, m |
| 天堂 | paradis, ( ) |
| 古典 | bible, f |

（人民部）　64語

| | |
|---|---|
| 老婆 | vieille femme, f |
| 壮婦 | ( ) |
| 少女 | jeune femme, f |
| 童女 | fille, f |
| 市人 | bourgeois, ( ) |
| 征夫 | voyageur, m |
| 夷人 | barbare, m |
| 頑民 | sauvage, m |
| 冶郎 | joueur, m |
| 孤子 | orphelin, ( ) |

（時令部）　76語

| | |
|---|---|
| 朝 | matin, ( ) |
| 夕 | soir, ( ) |
| 午 | midi, ( ) |
| 子 | minuit, ( ) |
| 暁 | aurore, f |
| 昏 | brune, f |
| 一時 | une heure, ( ) |
| 一刻 | une minute, ( ) |
| 一分 | une seconde, ( ) |
| 四半時 | un quart d'heure, ( ) |

（世態部）　64語

| | |
|---|---|
| 賄賂 | cadeau, m |
| 謝儀 | reconnaissance, ( ) |
| 職業 | travail, m |
| 遊戯 | amusement, m |
| 日課 | tâche, f |
| 夜作 | élucubration, f |
| 学問 | science, f |
| 耕耘 | agriculture, f |
| 商売 | commerce, f |
| 婚礼 | mariage, m |

（学術部）　64語

| | |
|---|---|
| 解部 | anatomie, f |
| 分析 | chimie, f |
| 測量 | géométrie, f |
| 算数 | arithmétique, f |
| 政道 | politique, f |
| 兵法 | art militaire, ( ) |
| 砲術 | artillerie, ( ) |
| 医術 | art de la médecin, e, m |
| 制糖 | ( ) |
| 造油 | ( ) |

（遊戯部）　64語

| | |
|---|---|
| 従弟 | cousin, ( ) |
| 従妹 | cousine, ( ) |
| 男子 | fils, ( ) |
| 孫子 | petit fils, ( ) |
| 舅 | beau-père, m |
| 姑 | belle-mère, f |
| 夫 | époux, ( ) |
| 妻 | épouse, ( ) |
| 養子 | ( ) |
| 養女 | ( ) |

（官爵部）　63語

| | |
|---|---|
| 地頭 | baron, ( ) |
| 街長 | échevin, ( ) |
| 勅使 | ambassadeur, ( ) |
| 給使 | échanson, ( ) |

| | |
|---|---|
| 太史 | sécrétaire, ( ) |
| 訳師 | trucheman, m |
| 門吏 | portier, m |
| 元帥 | général, m |
| 副将 | colonel, m |
| 按針役 | pilote, ( ) |

（職業部）　64語

| | |
|---|---|
| 武士 | militaire, m |
| 農夫 | cultivateur, ( ) |
| 工師 | ouvrier, m |
| 儒士 | philosophe, m |
| 医師 | docteur, ( ) |
| 巫 | apôtre, m |
| 僧 | prêtre, ( ) |
| 馬師 | piqueur, m |
| 画工 | peintre, m |
| 史官 | historien, m |

（才徳部）　64語

| | |
|---|---|
| 仁 | grâce, f |
| 義 | raison, f |
| 礼 | compliment, m |
| 楽 | musique, f |
| 孝 | piété, f |
| 信 | amitié, ( ) |
| 徳 | vertu, ( ) |
| 智 | génie, ( ) |
| 勇 | courage, m |
| 善 | bonté, f |

（身体部）　64語

| | |
|---|---|
| 頭 | tête, ( ) |
| 顔 | visage, ( ) |
| 額 | front, ( ) |
| 頬 | joues, ( ) |
| 顎 | mâchoire, ( ) |
| 肩 | épaules, ( ) |
| 背 | dos, m |
| 胸 | poitrine, ( ) |
| 腹 | ventre, ( ) |
| 足 | pied, m |

（性情部）　64語

| | |
|---|---|
| 精神 | esprit, ( ) |
| 魂魄 | âme, ( ) |
| 性命 | vie, ( ) |
| 気力 | force, f |
| 性質 | caractère, ( ) |
| 思慮 | pensée, ( ) |
| 決断 | jugement, ( ) |
| 目的 | but, m |
| 遺忘 | oublie, m |
| 心痛 | chagrin, ( ) |

（疾病部）　63語

| | |
|---|---|
| 頭痛 | mal de tête, ( ) |
| 腹痛 | mal de ventre, m |
| 歯痛 | mal de dents, m |
| 寒冒 | rhume, ( ) |
| 火傷 | brûlure, ( ) |
| 熱 | fièvre, f |
| 下痢 | cours de ventre, ( ) |
| 咳嗽 | toux, f |
| 動悸 | palpitation, ( ) |
| 喘息 | asthme |

（運命部）　64語

| | |
|---|---|
| 得 | gain, ( ) |
| 失 | perte, ( ) |
| 貴 | dignité, ( ) |
| 富 | richesse, f |
| 貧 | pauvreté, f |
| 誉 | renommée, ( ) |
| 大 | grandeur, f |
| 小 | petitesse, f |

| | |
|---|---|
| 康寧 | santé, ( ) |
| 誕生 | naissance, f |

（宮室部）　64語

| | |
|---|---|
| 抵第 | palais, ( ) |
| 舎館 | hôtel, ( ) |
| 政所 | cour de justice, ( ) |
| 官府 | hôtel de ville, ( ) |
| 会所 | collège, m |
| 鍛府 | usine, f |
| 銀座 | monnaie, ( ) |
| 旅館 | auberge, ( ) |
| 両替屋 | banque, f |
| 旗亭 | restaurant, m |

（衣服部）　64語

| | |
|---|---|
| 軍服 | habit d'uniforme, ( ) |
| 風領 | cravate, ( ) |
| 袴 | pantalon, ( ) |
| 手袋 | gant, m |
| 足袋 | chausson, ( ) |
| 冠 | chapeau, ( ) |
| 帯 | bande, f |
| 手巾 | mouchoir, ( ) |
| 首飾 | collier, m |
| 腕飾 | bracelet, m |

（飲食部）　64語

| | |
|---|---|
| 茶 | thé, m |
| 烟草 | tabac, m |
| 米 | riz, ( ) |
| 麦 | blé, ( ) |
| 白酒 | vin blanc, ( ) |
| 紅酒 | vin rouge, ( ) |
| 麦酒 | bière, f |
| 焼酒 | eau-de-vie, f |
| 塾肉 | bouilli, du |
| 炙肉 | rôti, du |

（薬剤部）　単語なし

（家什部）　64語

| | |
|---|---|
| 金箱 | coffre-fort, m |
| 提灯 | lanterne, ( ) |
| 皿 | assiette, ( ) |
| 箸 | fourchette, ( ) |
| 栓 | bouchon, m |
| 火石 | pierre à feu, f |
| 火寸 | allumette, m |
| 油 | huile, f |
| 炭 | charbon, m |
| 薪 | tison, m |

（文具部）　64語

| | |
|---|---|
| 文台 | bureau, m |
| 書机 | tablettes, ( ) |
| 書籍 | livre, m |
| 石筆 | crayon, ( ) |
| 字典 | dictionnaire, m |
| 文範 | grammaire, f |
| 名刺 | carte de visite, f |
| 寒暑針 | thermomètre, m |
| 望遠鏡 | télescope, m |
| 顕微鏡 | microscope, m |

（武備部）　64語

| | |
|---|---|
| 城 | château, m |
| 塞 | forteresse, f |
| 胸壁 | parapet, m |
| 寄湟 | tranchée, f |
| 軍艦 | bâtiment de guerre, ( ) |
| 陣営 | camp, ( ) |
| 砲塁 | batterie, f |
| 大砲 | artillerie, f |
| 小銃 | pistolet, m |
| 弾丸 | balle, f |

「動　辞　類」　548語

| | |
|---|---|
| 備エル | munir |
| 塾スル | mûrir |
| 争闘スル | mutiner |
| 泳ク | nager |
| 生レル | naître |
| 質オク | nantir |
| 侮トル | narguer |
| 話ス | narrer |
| 破船スル | naufrager |
| 怠タル | négliger |

「形　容　辞」　318語

| | |
|---|---|
| 異ナル | étrange |
| 狭キ | étroit |
| 明ナル | evident |
| 委シキ | exact |
| 外ノ | extérieur |
| 易キ | facile |
| 弱キ | faible |
| 高名ナル | fameux |
| 誠実ナル | fidèle |
| 強キ | fort |

「副　詞　類」　113語

| | |
|---|---|
| 茲ニ | ci |
| 幾許 | combien |
| 左様ニ | comme |
| 如何 | comment |
| 逆ニ | contre |
| 猶多ク | davantage |
| 縦テニ | debout |
| 内ニ | dedans |
| 外ニ | degors |
| 既ニ | défà |

「接　辞　類」　61語

| | |
|---|---|
| 無ニ | sans |
| 除イテ | sauf |
| 随テ | selon |
| 上ニ | sur |
| 於テ | en |
| 間ニ | entre |
| 由テ | par |
| 側テ | près |

△「接　辞　類」　26語

| | |
|---|---|
| 何ナレハ | car |
| 然シ | cependant |
| 如ク | comme |
| 然ラハ | donc |
| 猶 | encore |
| 而シテ | et |
| 時ニ | lorsque |
| 或ハ | ou |

「集　合　副　辞」　62語

| | |
|---|---|
| 不意ニ | toute à coup |
| 全ク | tout à fait |
| 直チニ | tout à l'heure |
| 終ニ | à la fin |
| 彼コニ | là bas |
| 其上 | là dessus |
| 語毎ニ | mot à mot |
| 己ナラス | non seulement |

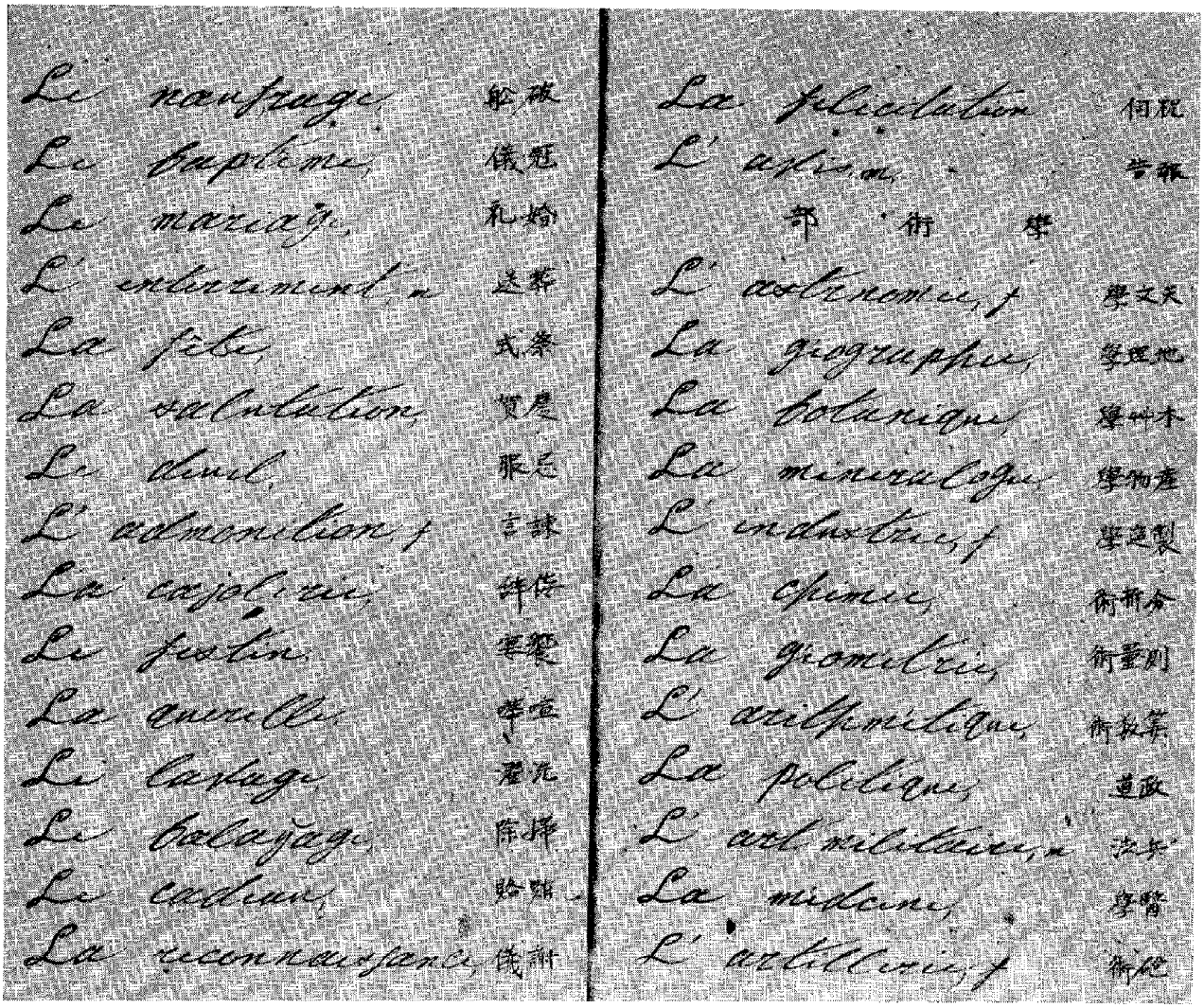
「集　合　前　辞」　17語

| | |
|---|---|
| 周囲ニ | autour de |
| 側ニ | auprès de |
| 沿フテ | le long |
| 至マテ | jusqu'à |
| 含マス | non compris |

「集　合　接　辞」　21語

| | |
|---|---|
| 仮令イ | bien que |

| | | | |
|---|---|---|---|
| コトホド | pour que | 実ニ | en effet |
| 少トモ | au moins | 或ハヌ | ou bien |


Le naufrage, 船破
Le baptême, 儀洗
Le mariage, 礼婚
L'enterrement m 送葬
La fête, 式祭
La salutation, 賀慶
Le deuil, 服忌
L'admonition f 言諫
La captivité, 拘俘
Le festin, 饗宴
La guerre, 戦争
Le lavage, 濯洗
Le balayage, 除掃
Le cadeau, 贈賜
La reconnaissance, 儀謝
La félicitation 祝賀
L'aptitude, 資質
部 術 學
L'astronomie, f 學文天
La géographie, 學理地
La botanique, 學艸本
La minéralogie 學物産
L'industrie, f 學造製
La chimie, 術析分
La géométrie, 術量則
L'arithmétique, 術数算
La politique, 道政
L'art militaire, m 法兵
La médecine, 學醫
L'artillerie, f 術砲

（山本松次郎「佛語荘嶽・其之一」の本文，山本晴雄教授所蔵）

## 2. 「佛語荘嶽・其之二」

この字書は，濃紺表紙，左袋綴の和装1冊本であるが，その寸法は「佛語荘嶽・其之一」とまったく同一のものである。題簽にはやはり「佛語荘嶽」と記されているが，見返しはなく，墨付丁数が84丁からなっている。そのうち，いわゆる「佛語荘嶽」といえるものは58丁で，残りの26丁は「佛学逢原・巻之五」に該当するものである。

この本も「其之一」と同様に，仏和字書の形態をとってはいるが，前述したように，和仏字典である。しかし，ここでは原本の内容を出来るだけ正確に報告するために，そのまま掲出することにした。

なお，（　）は筆者が付したものであるが，これは原文において空欄を示すものである。

「語　類　編」

(Nom)　96語

Univers, m　六合
Monde, m　世界
Pays, m　国
Province, f　郡
Montagne, f　山
Science, f　学問
Commerce, m　商売
Travail, m　職業
Amusement, m　遊戯
Fête, f　祭

(Verbes)　32語

Baisser,　下リル
Laver,　洗フ
Voir, irr　視ル
Entendre,　聴ク
Dire, irr　言フ

(Adjectif)　16語

Clair,　明ナル
Sombre,　暗ラキ
Epais,　濃キ
Blanc,　白キ
Noir,　黒キ

(Adverbe)　25語

Beaucoup,　多ク
Peu,　少コシ
Souvent,　屢シハ
Rarement,　希レニ
Toujour,　常ニ

(Conjonction)　8語

Ainsi,　夫故ニ
Quand,　若シモ
Mais,　然シ
Et,　及ビ

(Pronom)　8語

Je,　吾
Tu,　汝
Mien,　我レノ
Celui-ci,　此ノ
Celui-là,　彼ノ

(Participe)　8語

Gagnant,　設タル
Desputé,　争ソワレタル

(Article)　4語

Le　(　　)
La　(　　)
Un　(　　)
Une　(　　)

(Interjection)　4語

Ah!　(　　)
Bah!　(　　)

「語　類　編」

名　辞

(天文部)　32語

Le ciel,　天
La terre,　地
Le soleil,　日
La lune,　月
L'étoile, f　星

（地理部）　32語

| | |
|---|---|
| La rivière, | 河 |
| Le bois, | 林 |
| La vallée, | 谷 |
| La mer, | 海 |
| Le port, | 港 |

（神佛部）　32語

| | |
|---|---|
| Jupiter, m | 天神 |
| Pluton, m | 地神 |
| (　　) | 山神 |
| Mars | 軍神 |
| Némésis, f | 仇神 |

（人民部）　32語

| | |
|---|---|
| Un vieillard, | 老翁 |
| Un garçon, | 童男 |
| La noblesse, | 貴人 |
| La canaille, | 賤人 |
| Un bourgeois, | 市人 |
| Un paysan, | 野人 |

（時令部）　43語

| | |
|---|---|
| L'année dernière, | 去年 |
| L'année prochaine, | 来年 |
| Le mois passe, | 去月 |
| Demain, | 明日 |
| Hier au soir, | 昨晩 |
| Demain soir, | 明晩 |

（世態部）　32語

| | |
|---|---|
| Une averse, | 驟雨 |
| Une trombe, | 龍巻 |
| Une tempête, | 津浪 |
| La guerre, | 戦争 |
| La navigation, | 航海 |

（学術部）　32語

| | |
|---|---|
| La minéralogie, | 産物学 |
| La politique, | 政道 |
| La philosophie, | 世道 |
| La physique, | 物理 |
| La fable, | 小説 |
| La conversation, | 通弁 |
| (　　) | 槍術 |

（遊戯部）　31語

| | |
|---|---|
| Le théatre, | 戯場 |
| Le drame, | 浄瑠理 |
| Les lotos, | 双六 |
| Les cartes, | 花札 |
| La promenade, | 徘徊 |
| La poupée, | 偶人 |
| Le masque, | 假面 |

（家倫部）　32語

| | |
|---|---|
| L'époux (le mari), | 夫 |
| L'épouse (la femme), | 妻 |
| La fille, | 息女 |
| La bru, | 媳 |
| Le serviteur, | 僕 |

（官爵部）　32語

| | |
|---|---|
| Un marquis, | 郡守 |
| Un baron, | 県令 |
| Le sergent, | セルヂャント |
| Le caporal, | コルポラール |
| L'officier, | 司官 |
| Le soldat, | 兵卒 |

（職業部）　32語

| | |
|---|---|
| Un écrivain, | 史人 |
| Un peintre, | 画工 |

| | |
|---|---|
| Un comédien, | 俳優 |
| Une blanchisseuse, | 浣女 |
| Un pêcheur, | 漁夫 |

（才徳部） 32語

| | |
|---|---|
| La sagesse, | 賢 |
| La folie, | 愚 |
| La bonté, | 善 |
| La méchante, | 悪 |
| L'habilité, f | 巧 |

（身体部） 32語

| | |
|---|---|
| La tête, | 頭 |
| Le visage, | 顔 |
| Le front, | 額 |
| L'épaule, | 肩 |
| Le dos, | 背 |

（性情部） 32語

| | |
|---|---|
| L'esprit, m | 精神 |
| La vie, | 生命 |
| La force, | 気力 |
| Le génie, | 才智 |
| Le but, | 目的 |

（疾病部） 32語

| | |
|---|---|
| Le mal de tête | 頭痛 |
| Le mal de ventre | 腹痛 |
| Un rhume, | 寒疾 |
| La brûlure, | 火傷 |
| Le frisson, | 悪寒 |

（運命部） 32語

| | |
|---|---|
| Le bonheur, | 福 |
| Le malheur, | 禍 |
| La prospérité, | 盛 |
| La puissance, | 強 |
| Le danger, | 危 |

（官室部） 32語

| | |
|---|---|
| Un palais, | 抵第 |
| Un hôtel, | 舎舘 |
| L'église, f | 佛寺 |
| Un bureau de poste, | 駅舎 |
| Un restaurant, | 飲亭 |

（衣服部） 32語

| | |
|---|---|
| Le coton, | 綿 |
| Le fil, | 糸 |
| Le linge, | 布 |
| De la laine, | 毛 |
| Un pantalon, | 袴 |

（飲食部） 32語

| | |
|---|---|
| Des legumes, | 蔬菜 |
| Du pain, | 蒸餅 |
| Du café, | 匂ヒ |
| Du sel, | 塩 |
| Du sucre, | 砂糖 |

（薬剤部） 単語ナシ

（家什部） 32語

| | |
|---|---|
| Une table, | 卓子 |
| Un chaise, | 椅子 |
| Un lit, | 寝状 |
| Un tapis, | 席 |
| Une lanterne, | 提灯 |

（文具部） 32語

| | |
|---|---|
| Un bureau, | 文台 |
| Des tablettes, | 書机 |
| Un livre, | 書籍 |
| Un cahier, | 帳面 |
| La copie, | 写本 |

（武備部）　32語

Le château,　城
Le camp,　陣営
de l'arme, f　武器
Le pistolet,　小銃
Le sabre,　刀

（禽獣部）　32語

Un éléphant,　象
Un bœuf,　牛
Un cheval,　馬
Un chien,　犬
Un mouton,　羊

（魚蟲部）　32語

Une baleine,　鯨
Une carpe,　鯉
Une anguille,　鰻
Un serpent,　蛇
Une grenouille,　蛙

（艸木部）　32語

Le sapin,　松
Le bambou,　竹
Le cerisier,　桜
La pivoine,　芍薬
La tulipe,　爵金香

（金石部）　32語

L'or, m　金
L'argent, m　銀
Le cuivre,　銅
Le fer,　鉄
Le plomb,　鉛

（動　辞）　200語

Ouvrir,　開ク
Fermer,　閉スル
(　　)　戴ク
Avaler,　呑ム
(　　)　秀ツル
Couler,　流レル

（形容辞）　96語

Grand,　大ナル
Petit,　小サキ
Plusieurs,　多キ
Moindre,　少キ
Bon,　善キ

（副　辞）　63語

Très,　甚ハタ
Plus,　多ク
Moins,　少シ
Bien,　能ク
Jamais,　決シテ

（前　辞）　32語

Sur,　上ニ
Sous,　下ニ
Dans,　内ニ
Hors,　外ニ
Entre,　間ニ

（接　辞）　16語

Donc,　然ラハ
Sinon,　然サレハ
Mais,　然カシ
Et,　而シテ
Comme,　如トク

（冠　辞）

| | |
|---|---|
| le, | 定男単 |
| la, | 定女単 |
| les, | 定両複 |
| un, | 不定男単 |
| une, | 不定女単 |

（その他，au, aux, du，等を記してあり簡単な説明を加えている。）

〔代名辞〕

（人性代名）

主語人称代名詞の他に，補語人称代名詞等が記されている。

（指示代名）

| | |
|---|---|
| celui, | 男単 |
| celle, | 女単 |
| ceux, | 男複 |
| celles, | 女複 |

（その他，ceux-ci, cela 等が記されている。）

（物主代名）

| | |
|---|---|
| le mien, | 男単 |
| la mienne, | 女単 |
| les miens, | 男複 |
| les miennes, | 女複 |

（当然のことに，2人称単数以下，3人称複数まで列記されている。）

（関係代名）

| | |
|---|---|
| lequel | 男単 |
| laquelle | 女単 |
| lesquels | 男複 |
| lesquelles | 女複 |
| qui | 両性両数 |

（その他，auquel, duquel, quoi, que, dont, où 等が記されている。）

（不定代名）　10語

on
personne
chacun

〔歎息辞〕　7語

| | |
|---|---|
| ha! | 恐懼 |
| Oh! oh! | 驚愕 |

〔禽獣語声〕　19語

| | |
|---|---|
| le chien | aboie, |
| le chat | miaule, |
| le cochon | grogne, |

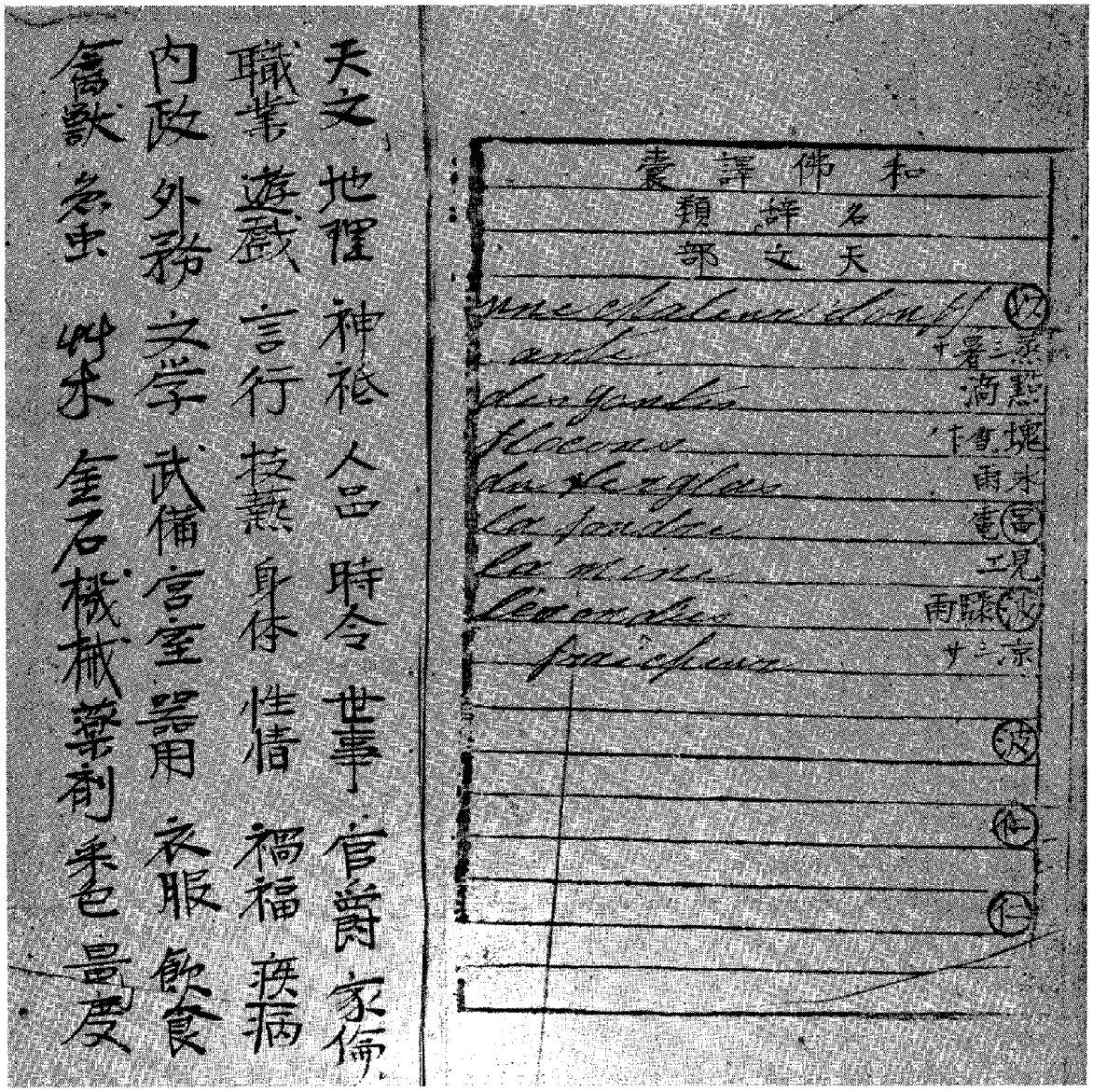
## 3.　「和佛譯囊」

この草稿は上下からなる左袋綴の和装2冊本であるが，両者とも縦20.5センチメートル，横13.3センチメートルの寸法である。表紙は上巻には「和佛譯囊・上，山本松蔵本」と墨書されており，下巻の方もほぼ同様のものであるが，さらに「動形副前接」の文字が見られる。文本は20段の赤罫線入りのものであり，単純な丁数計算で数えればかなりのものであるが，まだメモ程度のものであるため単語の数はきわめてすくない。

なお，簡単にこの字書を紹介してみると，次の通りである。

まず最初に言えることは，この和仏字典が我国の伝統的な辞書の編集方式を踏襲しているとい

うことであり，その点では村上英俊の『五方通語』に似ており，天文，地理，神祇，人品，時令，世事，官爵，家倫，職業，遊戯，言行，技藝，身体，性情，禍福，疾病，内政，外務，文学，武備，宮室，器用，衣服，飲食，禽獣，魚虫，艸木，金石，機械，薬剤，采色，量度の32部門にわけ，さらに以呂波の順に分類している。




（山本松次郎「和佛譯囊」の本文，山本晴雄教授所蔵）

① 上巻　126丁

〔名辞類〕

（天文部）　10語

grand froid,　㋐ 大寒
le bruit,　㋑ 音響

（地理部）　24語

la cour,　㋒ 中庭
le marché,　㋓ 市場

（神祇部）　18語

la croix,　㋔ 十字柱
l'eternel,　㋕ 神明

（人品部）　29語

boulanger,　㊗　パンヤキ
un vieux garçon,　㊚　壮夫

（時令部）　30語

toute vie,　㊤　一生
le jour de l'an,　㊐　元日
un jour de fête,　㊥　祭日

（世事部）　36語

la perte,　㊥　損失
les messages,　㊥　使令
prix,　㊥　価

（官爵部）　11語

un gouverneur,　㊥　県令，アガタヌシ
un juge,　㊥　裁判官

（家倫部）　9語

le cousin germain,　㊤　従兄弟
une fille âgée,　㊥　長女

（職業部）　35語

un libraire,　㊤　書買
un vitrier,　㊥　硝子工

（遊戯部）　6語

les cartes,　㊗　骨牌。花合ノ類

（言行部）　28語

silence,　㊤　沈黙

les cérémonies,　㊥　礼儀

（技芸部）　単語ナシ

（身体部）　17語

sang,　㊤　血
les bras,　㊥　腕

（性情部）　21語

l'espérance,　㊥　希望
la volonté,　㊥　嗜好

（禍福部）　3語

les grâces,　㊥　恩恵

（疾病部）　13語

une pustule,　㊥　肉刺。吹出物

（内政部）　1語

recommandation,　㊤　命令

（外務部）　単語ナシ

（文学部）　15語

un billet,　㊥　小書
une éponge,　㊥　海綿

（武備部）　24語

l'armoire,　（ ）　鎧イ
une bataille,　㊥　野戦

（官室部）　26語

la boucherie, ㊀ 肉店
un comptoir, ㊁ 算室
un cabaret, ㊂ 酒肆

（器用部） 87語

un clou, ㊃ 釘
le couvert, ㊄ 食膳蓋布
la sonnette, ㊅ 鈴

（衣服部） 47語

robe, ( ) 長上着
un bonnet, un chapeau, ㊆ 帽子
un jupon, ㊇ 下着

（飲食部） 38語

des blés, ㊈ 麦
du rôti, ㊉ 炙モノ

（薬獣部） 52語

des peaux, cuir ㊊ 皮
un loup, ㊋ 狼

（魚蟲部） 33語

un saumon, ㊌ 鱒
une carpe, des perches, ㊍ 鯉

（艸木部） 63語

les branches, ㊎ 枝
des prunes, ㊏ 李

（禽石部） 2語

des bijoux ㊐ 貴石

（藥械部） 単語ナシ

（藥剤部） 4語

du soufre, ㊑ 硫黄

（采色部） 5語

claire, ( ) ハデナル

（度量部） 32語

le second, ㊒ 第二
une feuille, ㊓ 一枚

② ド巻 72丁

〔動 辞 編〕

（以 部） 12語

arriver, 到ル

（波 部） 11語

quitter, 離ス

（亻 部） 5語

ressembler, 似寄ル

（保 部） 単語ナシ

（辺 部） 1語

diminuer, 減縮スル

（十 部） 11語

arranger, 整エル

| | | | |
|---|---|---|---|
| （知　部） | 4語 | souhaiter, | 願フ |
| jurer, | 誓フ | （奈　部） | 5語 |
| （利　部） | 1語 | gronder, | 鳴。(雷ナドノ) |
| profiter, | 利益スル | （良　部） | 単語ナシ |
| （奴　部） | 6語 | （武　部） | 2語 |
| coudre, | 縫フ | guérir, | 迎エル |
| （留　部） | 単語ナシ | （宇　部） | 19語 |
| （和　部） | 3語 | garantir, | 受合フ |
| separer, | 別レル | （乃　部） | 8語 |
| （加　部） | 22語 | échapper, | 逃レル |
| prêter, | 貸ス | （於　部） | 14語 |
| （輿　部） | 3語 | craindre, | 恐レル |
| traverser, | 横ギル | （久　部） | 10語 |
| （太　部） | 13語 | peigner, | 櫛ル |
| se battre, | 戦ウ | （也　部） | 3語 |
| （礼　部） | 単語ナシ | loger, | 宿ル |
| （曽　部） | 3語 | （末　部） | 8語 |
| convenir, | 相応スル | attendre, | 待ツ |
| （津　部） | 10語 | （計　部） | 2語 |
| cueillir, | 摘ム | diminuer, | 減スル |
| （称　部） | 2語 | （不　部） | 7語 |

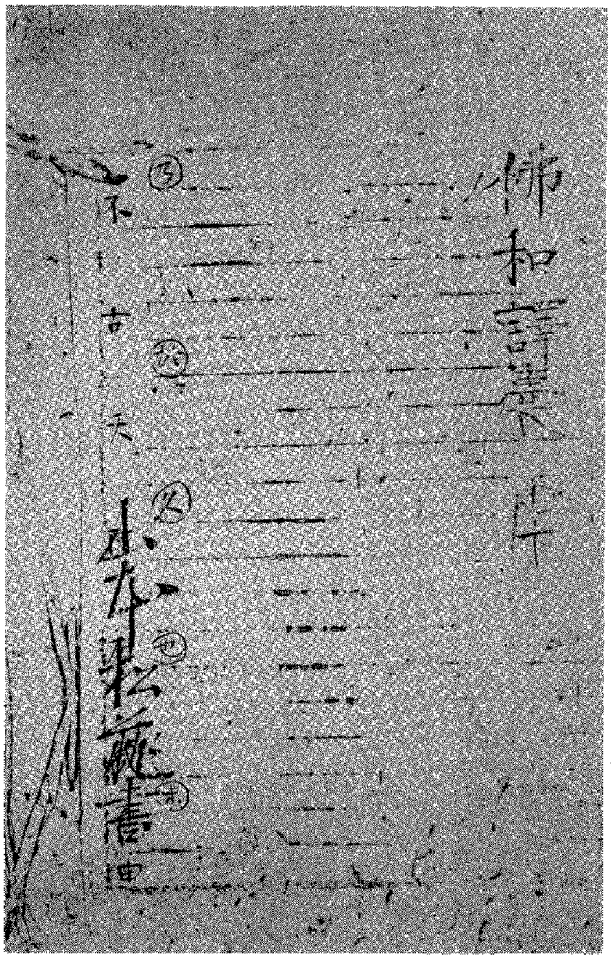
| | | | |
|---|---|---|---|
| trembler, | 震フ | (比　部) | 3語 |
| (古　部) | 7語 | tirer, | 引ク |
| essayer, | 試ル | (毛　部) | 7語 |
| (天　部) | 1語 | chercher, | 求ル |
| renverser, | 転倒スル | (世　部) | 単語ナシ |
| (阿　部) | 14語 | (寸　部) | 9語 |
| marcher, | 歩ム | asseoir, | 坐ル |
| (左　部) | 9語 | 〔形　容　辞〕 | |
| crier, | 叫フ | (以　部) | 6語 |
| (幾　部) | 8語 | actuelle, | 現今ノ |
| éteindre, | 消ル | (波　部) | 5語 |
| (由　部) | 5語 | honteux, | 辱シキ |
| permettre, | 許ス | (仁　部) | 単語ナシ |
| (女　部) | 4語 | (保　部) | 4語 |
| marquer, | 目附ル | tempéré, | 適宜ノ |
| (美　部) | 9語 | (辺　部) | 2語 |
| conduir, | 導ク | commode, | 便利ナル |
| (之　部) | 9語 | (土　部) | 2語 |
| remercier, | 謝スル | pointus, | 尖キ。トガキ |
| (恵　部) | 1語 | (知　部) | 2語 |
| choisir, préférer, | 撰フ | cuite, | 熟シタル |

| | | | |
|---|---|---|---|
| （利　部） | 単語ナシ | （武　部） | 1語 |
| （奴　部） | 1語 | cruel, | 虐ナル |
| excellent, | 抽タル | （宇　部） | 8語 |
| （留　部） | 単語ナシ | minces, | 薄キ |
| （和　部） | 単語ナシ | （乃　部） | 単語ナシ |
| （加　部） | 3語 | （於　部） | 10語 |
| enrhumée, | 寒冒シタル | retard, | 遅キ |
| （興　部） | 3語 | （久　部） | 6語 |
| aise | 喜タル | sombre, | 暗キ |
| （太　部） | 6語 | （也　部） | 3語 |
| délicieux | 貴キ | molle, | 柔ナル |
| （礼　部） | 単語ナシ | （末　部） | 5語 |
| （会　部） | 3語 | vrai, | 実ノ |
| teint, | 染タル | （朱　部） | 1語 |
| （津　部） | 3語 | entier, | 全キ |
| dure, | 強キ | （計　部） | 2語 |
| （称　部） | 3語 | magnifique, | 結構ナル |
| gris, | 猟色ノ | （不　部） | 9語 |
| （奈　部） | 2語 | double, | 二重ノ |
| possible, | 成ヘキ | （古　部） | 2語 |
| （良　部） | 単語ナシ | exacte, | 細密ナル |

| | | | |
|---|---|---|---|
| （天　部） | 1語 | piquant, | 鋭トキ |
| propre, | 適当ナル | 〔副　　辞〕 | |
| （阿　部） | 10語 | （以　部） | 7語 |
| vert, | 青キ | un petit mot, | 一言 |
| （左　部） | 2語 | （波　部） | 2語 |
| meilleur, | 最上ノ | à l'envi, | 首ニ |
| （幾　部） | 6語 | （仁　部） | 2語 |
| attentif, | 気付ヨキ | de jour en jour, | 日々 |
| （出　部） | 単語ナシ | （保　部） | 1語 |
| （女　部） | 2語 | aussitôt, | 程ナク |
| exacte, | 緬密ナル | （辺　部） | 単語ナシ |
| （美　部） | 2語 | （土　部） | 同上 |
| court, | 短キ | （知　部） | 2語 |
| （之　部） | 7語 | parfaitement, | 十分 |
| tranquille, | 静ナル | （利　部） | 単語ナシ |
| （恵　部） | 単語ナシ | （奴　部） | 同上 |
| （比　部） | 3語 | （留　部） | 同上 |
| pareille, | 均キ | （和　部） | 1語 |
| （毛　部） | 単語ナシ | guère, | 僅モ |
| （世　部） | 同上 | （加　部） | 2語 |
| （寸　部） | 2語 | sagement, | 賢ク |

| | |
|---|---|
| (興　部) | 2語 |
| à propos, | 良時ニ |
| (太　部) | 6語 |
| sur le champ, | 直チニ |
| (礼　部) | 単語ナシ |
| (会　部) | 3語 |
| dedans, | 其ノ中ニ |
| (津　部) | 2語 |
| prudemment, | 慎テ |
| (称　部) | 単語ナシ |
| (奈　部) | 1語 |
| rien, de quoi, | 何モ |
| (良　部) | 単語ナシ |
| (武　部) | 同上 |
| (宇　部) | 同上 |
| (乃　部) | 同上 |
| (於　部) | 3語 |
| beaucoup, | 多ク |
| (久　部) | 単語ナシ |
| (也　部) | 1語 |
| incontinent, | 将ニ |
| (未　部) | 5語 |
| d'abord, | 先ヅ |
| (計　部) | 単語ナシ |
| (不　部) | 同上 |
| (古　部) | 同上 |
| (天　部) | 同上 |
| (阿　部) | 2語 |
| pis, | 悪ク |
| (左　部) | 単語ナシ |
| (幾　部) | 2語 |
| absolument, | 急度 |
| (由　部) | 単語ナシ |
| (女　部) | 同上 |
| (美　部) | 同上 |
| (之　部) | 3語 |
| autrement, sinon, | 否サレハ |
| (恵　部) | 1語 |
| sans cérémonie, | 遠慮ナシニ |
| (比　部) | 1語 |
| excessivement, | 非常ニ |

| | |
|---|---|
| （毛　部） | 2語 |
| snas dire, | 勿論 |
| （世　部） | 単語ナシ |
| （寸　部） | 2語 |
| promptement, | 急速ニ |
| 〔前　辞〕 | 4語 |
| dans, en, | 内ニ |
| 〔接　辞〕 | 4語 |
| à cause du, | ノ故ヲ以テ |



（山本松次郎「佛和譯囊」，山本晴雄教授所蔵）

## 4.　「佛和譯囊」

「佛和譯囊」（左袋綴の和装2冊本，20.6cm×13.3cm）は「和佛譯囊」の姉妹本といえるもので，上巻（107丁），および下巻（113丁）からなり，両巻とも表紙には，それぞれ「佛和譯囊（上・下），山本松蔵書」と黒書されている。本文は「和佛譯囊」のときと同様に赤色の入った和紙（楽山堂製）を使用しているが，墨付丁数にくらべて白紙のまゝの頁が多いのも，その特長の一つであろう。

さて，この本の構成内容に関して述べてみると，山本松次郎の編集――と言ってもフランス語関係のものは，その総てが原稿のまゝであるが――した辞書として形式も内容（訳語が複数で使用されるようになった）も一番進んでおり，村上英俊の『佛語明要』を彷彿させるものがある。さらに，我国の伝統的な編集方法によらず，欧米式のA．B．Cの順序で構成されているのも目新しいところであろう。

① 上巻

「佛語譯囊」

| (A) | 99語 | (B) | 65語 |
|---|---|---|---|
| agneau, | 稚羊 | | |
| aisément, | 容易ニ | bénéfice, | 利益 |
| amateur, m | 愛スル人 | bibliothéque, f | 書棚 |
| appartement, m | 住居。家宅 | bouger, | 動ク |
| | | auteur, | 作者 |

| | |
|---|---|
| bruit, m | 音響。報告。馨聞。風説。 |
| bruiner, | 細雨フル |

(C) 174語

| | |
|---|---|
| commission, | 使令。荷物。重任 |
| contrôle, m | 簿記。名簿 |
| cravate, f | 風領。クビマキ |
| curieux, | 新奇好ミ |
| culotte, f | 一股，一マタ |

(D) 70語

| | |
|---|---|
| dessin, m | 思立。手本。紋。アヤ |
| duché, m | 諸候ノ領地 |
| duc, m | 諸候 |
| duchesse, f | 公夫人 |
| destiné, | 取極ラレタル，前以ノ世話サレタル |

(E) 78語

| | |
|---|---|
| élus, | 貨銭。価ノ名 |
| enchanté, | 迷フベキ。面白キ |
| éternité, | 永久。生涯 |
| excuser, | 免ス |
| excuse, | 免科。言訳 |

(F) 60語

| | |
|---|---|
| façons, | 作法 |
| fiancé, m | 約婚郎。擬夫 |
| foncée, | 暗キ |
| franchement, adv | 先見スニ。自由ニ。放膽ニ。相応ニ |
| fumé, adj | 薫タル |

(G) 50語

| | |
|---|---|
| garde, f | 介抱人 |
| galatine, | 凝固物 |
| glace, | 硝子鏡 |
| gobelet, m | 硝大杯。飲器 |
| grenier,m | 家上ノ物置。天井 |

(H) 23語

| | |
|---|---|
| habiller, | 着服スル |
| haricots, pl | 美人豆 |
| habitude, f | 住居・習慣 |
| hirondelle, f | 燕 |
| hospitalier, adj | 寄宿スベキ |

(I) 36語

| | |
|---|---|
| impolitesse, | 不敬 |
| instant, m | 暫時 |

② 下巻

(J) 15語

| | |
|---|---|
| journaux, pl | 日誌 |
| jus, | 汁 |
| jupe, f | 上衣。女ノ |
| jupon, m | 下衣。同上 |
| jurer, | 誓フ |

(K) 1語

| | |
|---|---|
| kilogramme, m | ポンド |

(L) 34語

| | |
|---|---|
| lendemain, m | 翌日 |
| lenteur, f | 遅緩。 |
| lis, m | 百合花 |
| lieutenant, | 主将＝代テ都督スル者。カピテーンの次官 |

(M) 71語

malle, f 旅装ノ革袋。飛脚車
méthode, f 進歩
ménage, 家事。倹約
ministre, m 教師。説法者
moral, 作法ヨキ

(N) 16語

nappe, f 卓子ヲ覆フ棉布
niveau, m 水準
noël, 祭ノ名。祭ノ市

(O) 20語

occupation, 勤務
opiniâtre, 頑固
orphelinat, m 撫孤院

(P) 137語

pape, m 法王
passager, 旅客
planche, 板
pois, pl 黒豆。又豆ノ惣名
prêt, 貸借

(Q) 9語

quai, m 海堤。波戸
quérir, 迎フ。牽ク。引ク
quoi, adv 何

(R) 89語

respirer, 吸収スル。呼吸スル
riz, m 米
royaume, 王国
ruban, 紐
ruelle, f 径。小町

(S) 92語

séjour, 住居
singe, m 猿
siège, m 椅子
sollicitude, 大心配。大用心。心遣イ
souper, 夜食

(T) 55語

tantôt, adj 唯今
timide, adj 遠慮シタル
titre, m 上書。標題

(U) 1語

user, 用ユル

(V) 38語

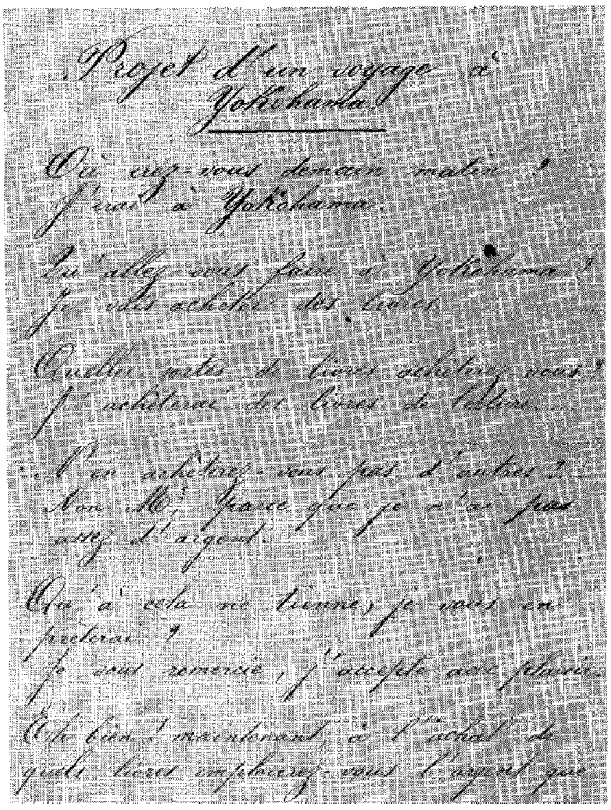
vente, f 売リ
vilain, adj 悪シキ。醜シキ
vif, 活発ナル

(W) 単語ナシ

(X) 同上

(Y) 同上

(Z) 同上


Projet d'un voyage à Yokohama

Où est-ce vous demeurez maître ?
J'ai à Yokohama.

Qu'allez-vous faire à Yokohama ?
Je vais acheter des livres.

Quelles sortes de livres achetez-vous ?
J'achète des livres de histoire.

Qu'en achetez-vous pas d'autres ?
Non Mr. Franco que je n'ai pas assez d'argent.

Qu'à cela ne tienne, je vous en prêterai ?
Je vous remercie, j'accepte avec plaisir.

Cette fois, j'arrêterai à l'école de quelques leçons, vous l'apprendrez que

(山本松次郎の仏文，山本晴雄教授所蔵)

# 第3章　仏文の解説

山本松次郎がフランス語をもって記述したものの中に，"Cahier de conversations" という題名のノート（19.9cm×16.5cm）が現存するが，これはフランス人の朱のはいらない，松次郎自身のものという意味で大変興味深いものなのである。（その他にもフランス人によって添削されたと思れるものも残っているが，大変 illisible なものなので，本稿では省略した)。

このノートについて簡単に紹介しておくと，表紙はいわゆるアヅキ色で，本文は82ページからなり，23段の青罫線の入っている普通の様式のものである。

さらに，第1ページの部分を記してみると，次の通りとなる。

J'écris avec plaisir par demander de mon cher ami Yamamoto, mais excusez-moi la maladroite écriture s'il vous plaît.

20 novembre de 21 Méidzi.
à Shindaie-Matchi Nagasaki.
1888.

さて，いよいよ本文について触れることになるが，かなりの分量にのぼるので，ここでは，そのごく一部を掲載することにした。

なお，松次郎の仏文に対して，あえてその訳文を付さなかったのは，彼のフランス語をそのまま伝えるためであり，さらには，文章がやさしい会話体のものなので，その必要性が認められないと思ったからである。（次に記した仏文の各章は山本松次郎のノートの1頁分を示すものである。)

Le marchand a-t-il apporté les gants que vous avez acheté chez lui.
Il a oublié de ne les apporter.
Pourquoi avez-vous manqué de venir chez mon père ce matin.
Le tailleur n'a pas apporté les habits qu'il a promis. Par conséquent je n'ai pu y aller.
Quelle distance y a-t-il de Paris à Londres.
Il y a près de cinquante lieues de Paris à Londres.
Pourquoi vous enfuiez-vous?
Je m'enfuis, car j'ai peur.

Est-il votre ennemi?
Je ne sais pas s'il est mon ennemi.
Mais je crains tous ceux qui ne m'aiment pas.
Car s'il ne me font pas de mal, il ne me feront pas de bien.
Etes-vous allé voir le colosse de Nara?
Pas encore, mais je crois y aller bientôt avec M. Daibutsu.
J'en ai aussi déjà lui promis si nous y allons, combien de jours y restrons-nous?
Nous y resterons huit jours.
A quels jours fixons-nous notre départ?

Ne le fixons à la semaine prochaine.
Combien de lieues y a-t-il d'ici à Nara?
Il y en a environ cent cenquante.
Combien de jours faut-il pour y aller?
Si vous y aller à pied, il faut quinze jours, mais si vous prenez le bateau à vapeur, il n'en faut que quatre.
Vaut-il mieux prendre le bateau à vapeur que d'aller à pied?
Certainement, cela va sans dire.
Je préfère y aller par terre que par mer, car je crains le mal de mer.

Quel chemin faut-il prendre pour y aller?
Il faut prendre le Tôcaidô.
N'y a-t-il pas d'autre chemin pour y aller?
Si monsieur il y en a plusieurs, mais ils sont plus mauvais que celui-là.
Après avoir passé huit jours à Nara ne serez-vous pas d'avis que nous allions à Kioto. Y verrions-nous l'exposition.
Je suis de votre avis et j'y la visiterai avec plaisir. Reviendrez-vous immédiatement de Kioto après avoir vu l'exposition.

Oui M., j'en reviendrai immédiatement.
Je suis venu hier.
Je compte venir demain.

Je compte y aller probablement demain.
Venez tout à l'heure s'il veut plaît.
Cette femme y est allée hier.
Viendrai-je.
Je désir beaucoup y aller.
Il est venu avant hier.
Je compte m'en retourner dans trois jours à compter d'aujourd'hui.

Apportez immédiatement.
Je les ai emporté chez vous.
Une personne est venu, il y a quelque instant.
Viendrez-vous demain.
Je n'irai pas demain.
J'irai après demain.
Je ne pouvai y aller probablement demain.
J'irai tout à l'heure.
Quand irai-je?
J'ai pensé y aller avant hier.
Allons.

En définiment je n'y ai allé point.
Donc je reviens chez moi.
Je l'ai acheté hier.
J'irai acheté demain.
Irai-je acheter immédiatement.
Je vais faire des achats.
Je suis allé acheter des livres.
Qu'avez-vous acheté?
Je l'ai acheté immédiatement.
Vu le bon marché.
Je n'ai pas encore de maître.

Je désire procurer un maître.
Je vous demande chercher un bon maître pour moi.
Je vous l'amenerai; aussitôt que j'en trouvais.
Que lui paierai-je par mois?
Mon dieu! trois rios suffiront.
Qu'étudiez-vous.
Je désire étudier la langue japonaise.
Pendant combien d'années avez-vous étudié.
Voici celle que je préfère, quel en est le juste prix?

Je vends drap pour un pantaron ordinairement cinq piastres, mais pour vous, Mr, ce ne sera que quatre et demi.
C'est bien, mais voulez-vous me le vendre à crédit car je n'ai pas d'argent sur moi maintenant.
Mais comment donc Mr! certainement, et si vous avez besoin d'autre chose, que cela ne vous gêne pas.
Comment passez-vous votre temps?
Je le passe à étudier.
Qu'étudiez-vous?
J'étudie le français et les mathématiques.

Quand avez-vous commencé ces études?
Je les ai commencées depuis six mois.
Comment s'appelle votre professeur.
Il s'appelle Napoléon, le connaissez-vous?
Je ne le connais que de nom, je n'ai pas encore en l'avantage de le voir.
Si vous désirez le connaître, je vous présenterai à lui.
Vous m'obligerez infiniment car il y a longtemps que je cherche à faire sa connaissance.

A votre service, aujourd'hui, demain, quand vous voudrez .
C'est trop de bonté, votre jour et votre heure seront les miens.
Eh bien puisque cela vous est agréable, allons-y de suite.
Le chasseur a tiré dans ce bois un lièvre un cerf, un perdrix.
Le serrurier a besoin d'un ciseau et d'un marteau, pour faire un clef, un vis, ou un verrou.
Le fils de ce villageois obtint chaque année le premier prix au lycée.
L'élève d'une école a eu la peine d'être condamné à la domesticité pendant dix semaines, pour en avoir déserté.

Je ne le connais que de nom, je n'ai pas encore eu l'avantage de le voir.
Si vous désirez le connaître, je vous présenterai à lui.
Nous m'obligerez infiniment car il y a longtemps que je cherche à faire sa connaissance.
A votre service, aujourd'hui, demain, quand vous voudrez.
C'est trop de bonté, votre jour et votre heure seront les miens.
Eh bien! puisque cela vous fait agréable, allons-y de suite.
La maison est-elle loin d'ici?

Elle est tout près d'ici, justement derrière de ma maison.
Il est probable qu'il soit absent.
Je n'ai vu rien qui mérite d'être signalé, si ce n'est que le pays qui m'a semblé pittoresque.
Je ne le crois pas, car il a beaucoup d'élèves, de sorte qu'il ne peut sortir pendant le jour.
Mais aujourd'hui est dimanche, travaille-t-il donc comme tous les jours?
Ah! c'est juste, je n'y pensais pas, mais c'est une raison pour que nous le trouvions chez lui car il aime beaucoup à se reposer.
Eh bien! allons-y immédiatement.

# 第4章　その他の著作

さて，前述したように，山本松次郎の著作は数多くあり，翻訳書（原稿のまゝであるものがおおい）や雑稿の類も例外ではない。その他，ドイツ語辞書（袖珍字語訳嚢）はすでに紹介されているところである。そこで，本稿では，それらの翻訳書を簡単に紹介しておきたいと思うが，従来，その内容についてはまったく触れられていなかったものである。なお，とくにフランス語関係のものについては，翻訳書とその原書とを対比させることによって，松次郎の解釈力をも窺いたかったが，時間的な余裕がなかったため，残念ながら，その問題に関しては第二稿に譲りたい。

## 1.　「日課譯稿・壹」

「日課譯稿・壹」は，茶色表紙，右綴和装の1冊本（24.8cm×17cm）であり，題簽には「日課譯稿・壹」と墨書されている。見返しには，「日課譯稿之壹，使節紀行目録（朱記）」とあり，その枚数は36葉と記されているが，実際には135丁のものである。

その構成を示すと，次の通りである。

イ．題名不詳であるが，日本のことを中心として，個条書に記したもの。

ロ．「使節紀行」という題にて，さらに「原書蘭人所著」とある。その内容は日本および日本人の紹介が多い。

ハ．その他

## 2.　「日課譯稿・貳」

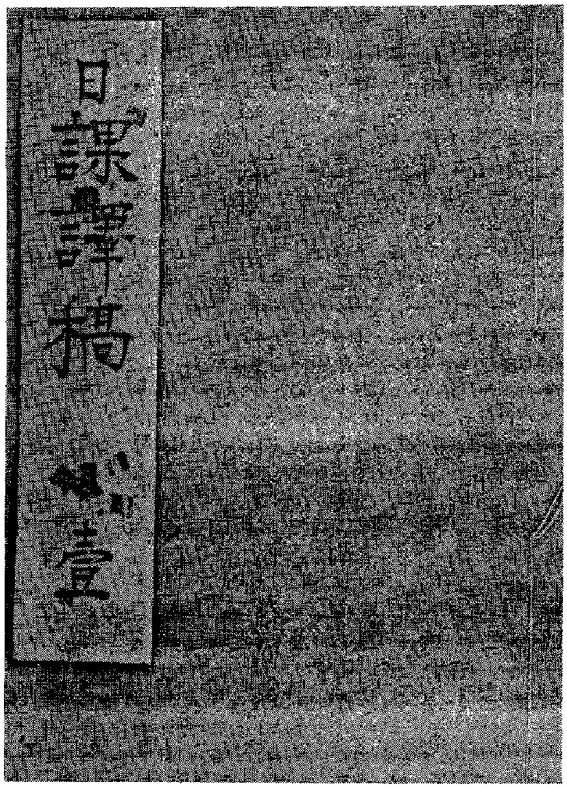
この訳書は，山本松次郎の翻訳書としては主要なものであり，『日本西教史』(1)が所収されているものである。

表紙，および寸法については，「其の壱」と同一であるが，題簽は「晩翠・日課譯稿，山本松譯・貳」となっている。なお，見返しには，「山本松次郎所有印，日本西教史原本佛人所著（朱記）日課譯稿之貳，山本松次郎譯」とあり，その枚数を示すものとして45枚と書かれているが，調らべてみると110丁が，その丁数である。

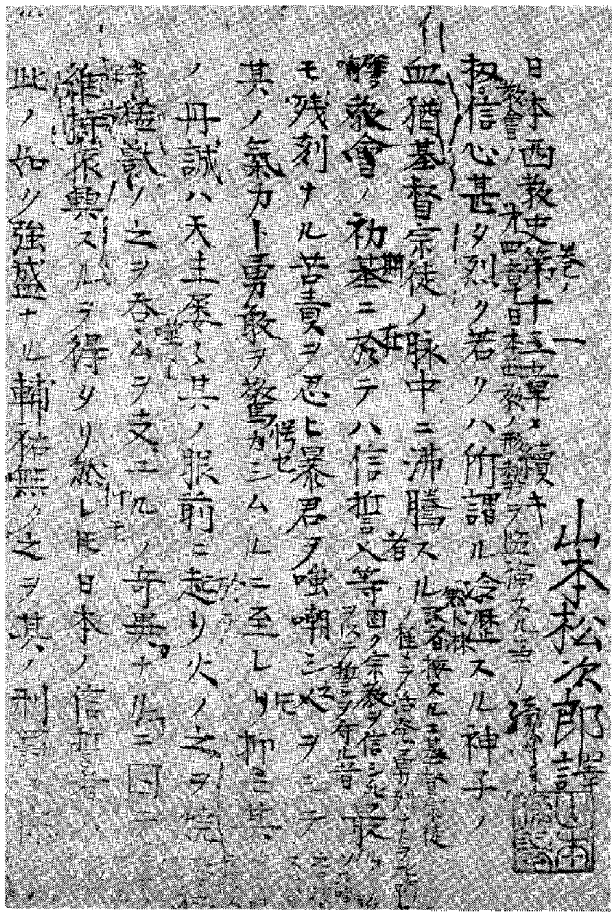
その内容を示すと，以下のような訳文である。

「第十五章　一ノ基督宗徒其ノ苦責ニ関シテ説話セシ事

扨将軍ニ因テ発シタル第二回ノ圧制ニ在テハルーイ，ソツタルト云フ基督宗ノ高貴ガ其ノ苦責中奪ヒ難キ丹誠ト勇気ヲ顕セリ此ノ人ハ既ニダイヒユサマ（誰未詳）ト云フ将軍ノ時ニ粗暴ノ攻撃ヲ




（山本松次郎「日課譯稿・壹」の表紙，山本晴雄教授所蔵）



（山本松次郎「日課譯稿・貳」の本文，
山本晴雄教授所蔵）

受ケシト雖モ是レハ其ノ後其ノ子ノ将軍ニ受ケシ所ニ比スレハ遊戯タルニ過キズ……（以下略）」

## 3. 「晩翠譯稿，数部・壹」

「晩翠譯稿」は，縦24.1cm×横16.1cmの寸法で，表紙は茶色，紙数は188 丁のものである。見返しはなく，本文のおもなものを記すと，次の通りである。

イ．那北列翁遺訓前編

ロ．脩辞譯稿

(1) 若晏略伝

「若晏陀留(ヂョンダルク)句佛国度鵡(ドムレミー)礼味村農夫邪句陀留(ジャックダルク)句之第三女也。母伊坐部留(イサベルロメ)呂迷……（以下略）」（1丁表）

(2) 西暦沿革説略，

(3) 徐福梦言，

(4) 古史廿三葉

(5) 異聞膾炙談

(6) 脂燭ト俵燭ノ製法

(7) その他

ハ．保約官教育法

ニ．写真大成

ホ．家用学（一名生計物誌），佛国ルーイ・フィギー著

ヘ．羅氏農工辞典鈔譯

## 4. 「晩翠餘稿」

「晩翠餘稿」という原稿は4冊あるが，ここでは直接に関係がないものと思れるので，ごく簡単な紹介だけにとどめておく。

イ．「晩翠餘稿・壹」

(1) 産業雑誌（石鹸乃製方）

(2) 草稿（投書）

「嗚呼光陰ハ矢ノ如ク少壮ハ老易シ是ニ於テ世ノ最モ羨ムヘキ者ハ児童ナリ重ズヘキ者モ亦児童ナリ佛国ノ文部卿ヂュルシモン日ク……（以下略）」（1丁表）

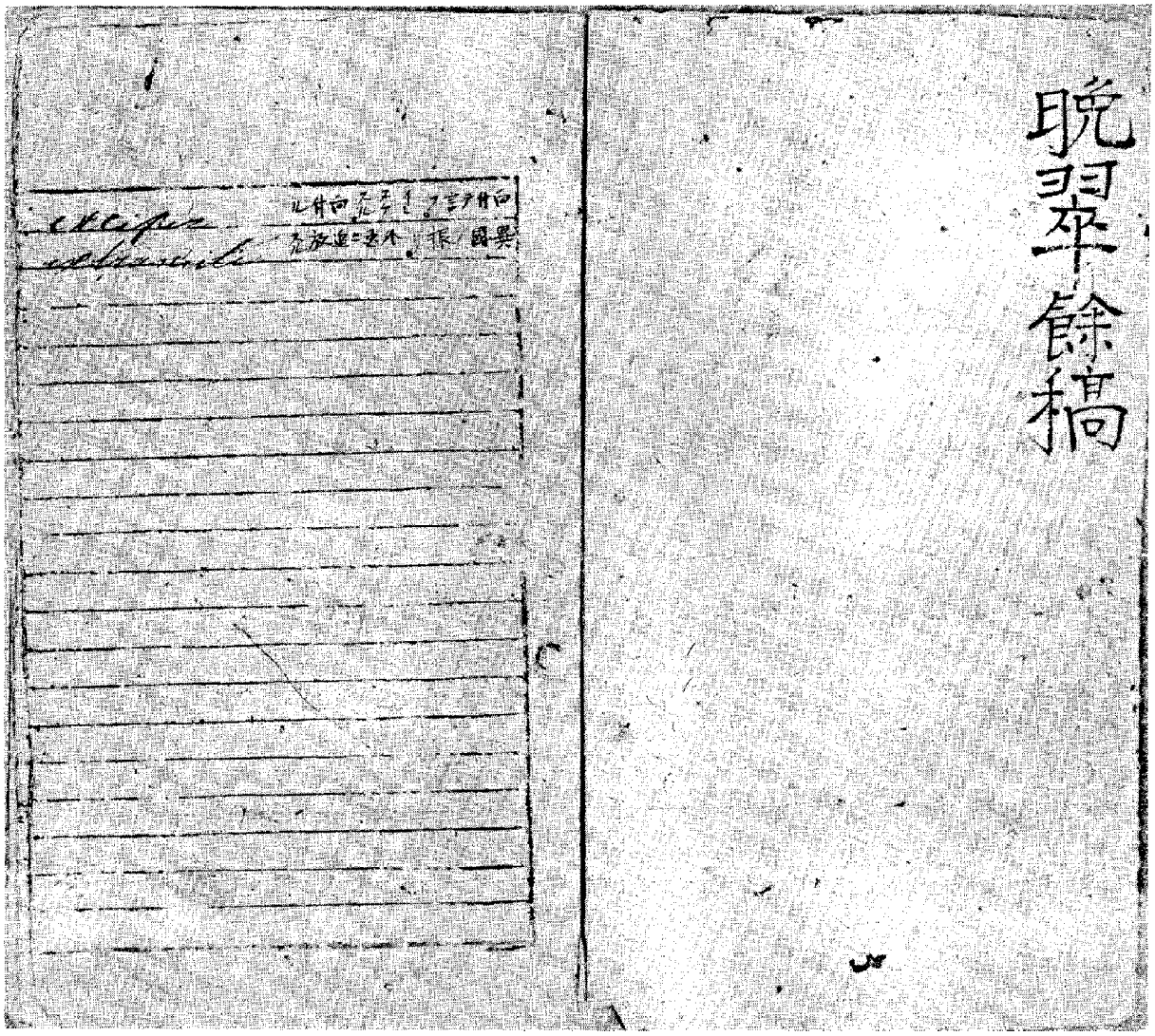
(3) 洋学心理

「序次如左

……中段，文法書　萬物究理書　歴史新聞終(ママ)　序文　学至此則可得外国之事情得其芸術強国家之武威是以善解其書也……（以下略）」（2丁表）

その他，「産業雑誌序」，「童家教育論」，「那北列翁法経集註鈔譯」，および，「西洋婚儀

略説」等多数。




(山本松次郎「晩翠餘稿・壹」の表紙，山本晴雄教授所蔵)

ロ．「晩翠餘稿・貳」

「娼妓論」から始まって「民権論に致るまで，じつにさまざまな論稿が記されている。なお，その他のものをすこし紹介してみると以下の通りである。

(1) 宗教論
(2) 商法論
(3) 史　論
(4) 茂樹開路論
(5) 世鑑外紀ノ数節
(6) その他

ハ．「晩翠餘稿」（青色表紙）

(1) 山本松次郎の履歴
(2) 山本二翁合伝序
(3) 聿脩録巻之上
(4) 漢詩

その他，色々の雑稿があって，最後に「長崎明倫録」なるものが記されている。

ニ．「晩翠餘稿」（表紙は白）

(1) 青寒社則

(2) 「ナポレオン」が繪事ニ力ヲ尽セシ事

(3) 上京言志ハ首

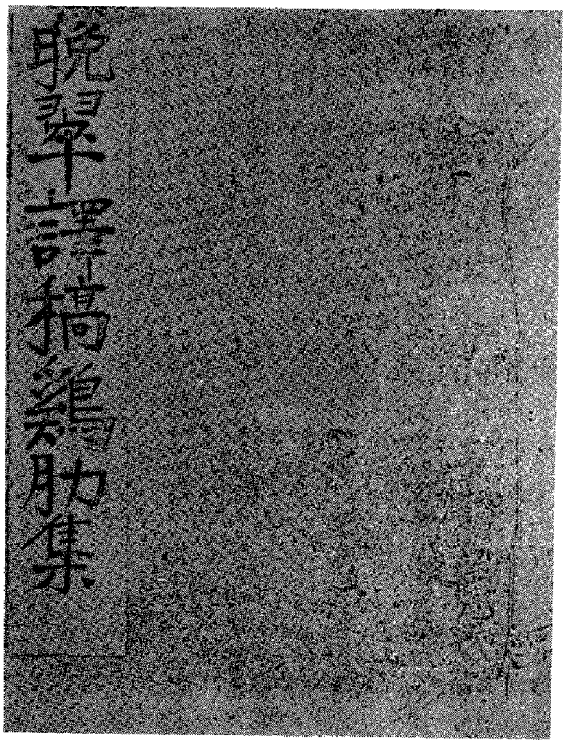
(4) 投書（勤病体解部説）

(5) 杞憂夢言

等がそのおもなものである。

ホ．「晩翠餘稿」（表紙が絵入り）

おもなものとしては，平井希昌関係のものがあるだけであるが，最後の方が一種のフランス語の単語帖になっているのも特長であろう。

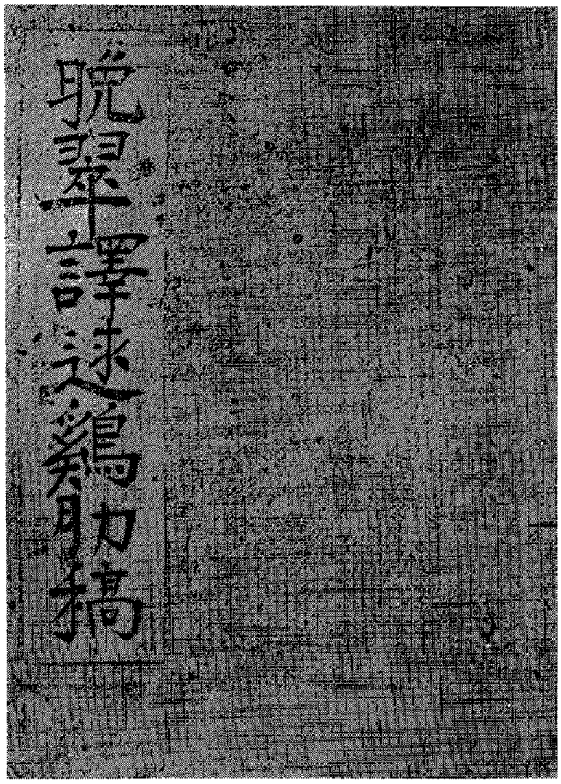



（山本松次郎「晩翠譯稿鷄肋集」の表紙，山本晴雄教授所蔵）

## 5. 「晩翠譯稿鷄肋集」

右綴和装の1冊本（24.6cm×16.6cm）であり灰色表紙，紙数は82丁からなり，題簽には「晩翠譯稿鷄肋集」と墨書されている。

その内容について触れると，写真化学，歴史関係，民法抄訳と続き，その後，「那北列翁法要，ゼブス・ピコー著，山本松次郎訳」，「民権論原序」，「民権論巻一，第一編，家権」とあり，最後に「佛国古哲孟德斯鳩著，羅馬盛衰論譯稿」でおわっているものである。




（山本松次郎「晩翠譯述鷄肋稿」，山本教授所蔵）

## 6. 「晩翠譯述鷄肋稿」

やはり，種々の雑稿から成っているが，その中心となるのは，「守国軍政譯稿」であろう。なおすでに所収されている原稿，たとえば「西洋婚儀略説」や「勤病体解部説」なども再見するが，何故なのであろうか。

この原稿も5.と同様，灰色表紙，右綴和装の1冊本で，寸法も同じである。枚数は64丁とその紙数がすくない。

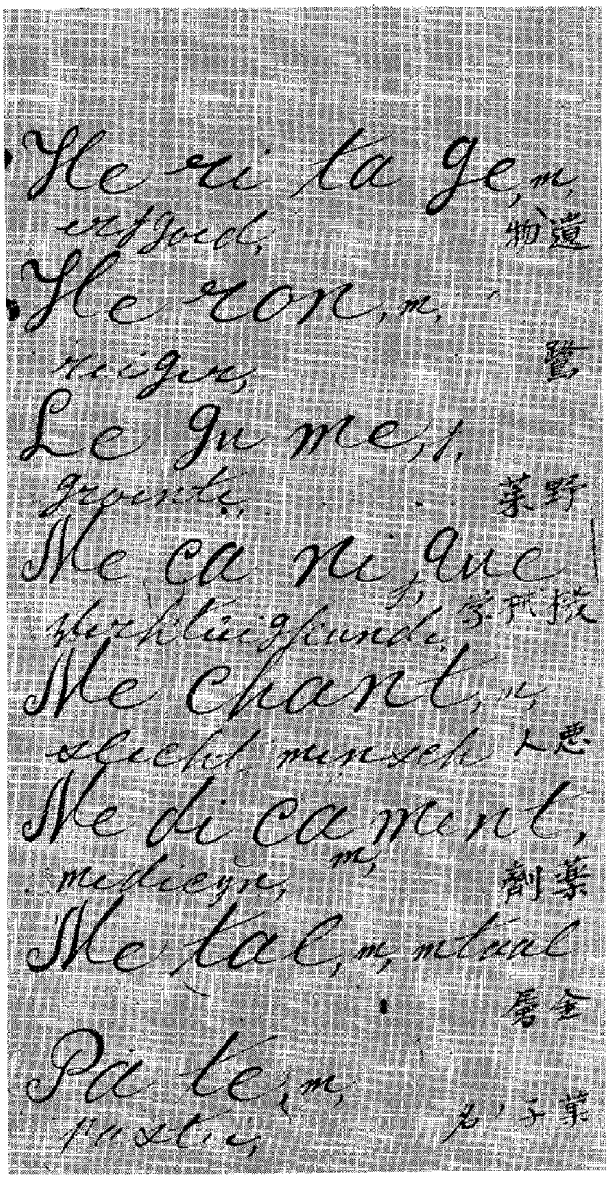
## 7. 「佛学逢源」

一種のフランス語入門書とも言うべきもので，発音の部，および単語の部から構成されている。和紙をそのまま表紙（題簽はなく，ただ「佛学逢源」と記されている）に使用しており，左綴の1冊本である。寸法は縦20.5センチメートル，横13

.4センチメートルのものであるが，枚数はかなりすくなく，わずかに26丁のものである。

〔注〕

1） 原書名はJean Crasset：Histoire de l' Eglise du Japon（高橋教授による）とされれているが，この翻訳をした一人として早くから山本松次郎に注目したのは幸田成友博士が最初であった。『幸田成友著作集・第四巻』，（中央公論社，P.P 432～436参照）。




（山本松次郎「佛学逢源」の本文，山本晴雄教授所蔵）

あとがき

本稿を作成するにあたっては，多くのすぐれた先学の研究業績に負うところがおおいが，とくにこれまで終始あたたかいご指導をたまわった恩師・高橋邦太郎先生（共立女子大学教授）には，この機会をかりて，心から御礼の言葉を申し上げたい。

また心よく数々の資料を示してくださった山本松次郎の直系（孫）であられる本学教授山本晴雄先生をはじめとして，立正大学教授桃裕行先生，真田幸治氏（旧松代藩々主），高橋雲峰氏（郷土史研究家），田中誠三郎氏（同上），山崎元氏（同上），永井久子氏（同上），入江尚子氏（入江文郎の子孫），村上英夫氏（村上英俊の子孫）の方々には大変お世話になった。ここに記し謝意を表したい。

さらに図書館関係では，長野市松代町の宝物館々長・矢沢頼忠氏，同副館長・寺尾大園氏，静岡県立中央図書館の石田徳行氏に，とくにお力添をいただいた。厚くお礼申し上げる次第である。

なお原稿で使用した古文書の解読には，高橋雲峰氏のご協力があったことを付記して，深く感謝したい。